平成19年度
ライフスタイルの多様性を支える
少子化対策の展開
調査研究報告書

少子・家庭政策研究所

（財）ひょうご震災記念21世紀研究機構

ま　え　が　き

この報告書は、少子・家庭政策研究所によって平成 18 年度から 19 年度の２年間にわたって継続して実施された「ライフスタイルの多様性を支える少子化対策の展開」に関しての調査研究の最終報告書であります。

「少子化」という言葉が 1992 年の『国民生活白書』において初めて公式に使用されて以来、少子化の問題は、今日にいたっては、わが国における最大の社会問題になってきております。すでに中間報告書では、急速な少子化の動向を受けて、これまでさまざまな少子化対策が行なわれてきている現状に対する議論ならびに多様なデータを整理し、少子化の何がどのように問題なのか、あるいは対策の効果をどのように評価すべきなのかを確認する作業を行なってきました。

この最終報告書では、県内の女性たちの多様なライフスタイルのあり方を明らかにし、その多様なライフスタイルとの関連から、子どもを実際に生み育てている女性たちにインタビュー調査を試みました。そして、そのデータをもとに作業仮説を組み立てて、アンケート調査を実施しました。ここでは出産・育児の楽しみとは何か、そして出産・育児の楽しみを規定している要因は何かを、明らかにしています。分析の結果では、（１）子どもへの愛着、あるいは執着、（２）変化への適応性、（３）自分の成長、（４）つながりの増加、（５）コントロール願望不全感、そして（６）身近なモデルの影響という６つの因子が明らかになりました。より詳細な分析を１つだけ紹介しておきますと、以下のとおりです。

すなわち、これらの因子と、多様なライフスタイルである都市型ライフスタイルや地方型ライフスタイルとの関連性をみてみますと、都市型ライフスタイルの地域では、子どもへの愛着、変化への適応性、そして自分の成長という３因子の平均点が高く、地方型ライフスタイルの地域では、つながりの増加、コントロール願望（不全）感、そして身近なモデルの影響という３因子の平均点が高いという結果が得られました。このことは核家族で子どもを育てている都市型ライフスタイルでは、自分の楽しみを大切にできると同時に、ときに孤独にも陥りがちであることを示しています。また三世代同居や子ども数の多い地方型ライフスタイルでは、他者との関係で子育ての楽しみや不全感をもつ傾向にあることが分かります。少子化政策においても多様なライフスタイルを十分に配慮した政策策定が望まれています。詳しくは、ぜひ本報告書をご一読いただければ、幸いと思います。

最後になりましたが、今回のこの調査には、多くの方がたのご協力とご配慮をいただくことができました。とくにインタビュー調査にご協力いただいた皆様には、この場をかりて厚く御礼を申し上げたいと思います。今回、このような調査研究が成功裡に実施できましたのは、皆様のご協力の賜物と感謝いたしております。

平成 20 年３月

少子・家庭政策研究所
所長　　野々山　久也

研究体制

研究責任者	野々山　久　也	少子・家庭政策研究所所長 甲南大学文学部教授
研究者（執筆者）	越　智　祐　子	少子・家庭政策研究所研究員
	和　泉　広　恵	流通経済大学社会学部専任講師 （中間報告書および第 1 章第 3 節執筆）

ライフスタイルの多様性を支える少子化対策の展開

第 1 章 はじめに：少子化対策の展開と子育ての「楽しみ」 1
第 1 節 問題の所在 1
第 2 節 研究の枠組み：目的と意義 2
第 3 節 多様なライフスタイルと地域性 2
1. 地域特性から見る少子化 2
2. M 字型就労とは 4
3. 県別にみた女性の就労のあり方 7
第 2 章 女性の就労パターンにみる兵庫県下の地域特性 20
第 1 節 目的 20
第 2 節 方法 20
第 3 節 結果と考察 20
1. クラスタ分析 20
2. 平均値の比較 25
3. 考察 27
第 3 章 妊娠や出産、子育てに関する女性の意識についての定性的把握 29
第 1 節 目的 29
第 2 節 グループインタビュー：つらくも楽しい子育て生活 29
1. 方法 29
2. 結果 30
3. 考察 33
第 3 節 個別インタビュー：「脱コントロール」という方法 34
1. 方法 34
2. 結果と考察 35
第 4 節 先行する事例としての多胎育児－現状と課題 52
1. 多胎出産の動向 53
2. 多胎育児をめぐる状況：インタビューおよび参与観察から 55
3. 先行する育児支援の方法 57
第 5 節 本章のまとめ 59
第 4 章 妊娠や出産、子育てに関する女性の意識に関する定量的把握 61
第 1 節 目的と調査仮説 61
第 2 節 方法 61
1. 対象 61
2. 用具 62
3. 手続き 62
第 3 節 結果と考察 62
1. 属性 63
2.「子育て意識」の構成要素 68
3.「子育て意識」に影響を与える要因 70
4. 妊娠のコントロール幻想 76
第 4 節 本章のまとめ 77
第 5 章 おわりに：結論と政策提言 79
引用・参考文献 80

第１章 はじめに：少子化対策の展開と子育ての「楽しみ」

第１節 問題の所在

家族のライフスタイルが多様化している現在、妊娠、出産、子育てのとらえ方も、産む性としての当事者である女性や、当事者である女性を含めた家族によって違いがあり、多様化している。しかし、これまでの少子化傾向や少子化対策に関する研究者や行政のまなざしは、主としてすでに子どもを持っている家庭、なかでも「都市の核家族で就労もしている母親」にとっての「負担軽減」に向けられがちであった。もちろん、現代日本の子育ては大事業であり、養育者、特に母親に多くの負担がかかっていることは事実である。

1990 年の「1.57 ショック」を受けて 1994 年に策定された「エンゼルプラン」に始まるわが国の具体的な少子化対策は､子育てにかかる負担を軽減させることによって、子どもを生み育てることをためらっている女性や家族に、子どもを生み育てる選択をしてもらおうという「子育て支援策」がその中心であったといえる（内閣府 2007)。これに呼応するかのように、出産や育児の負担感やストレスについての研究は数多くなされてきた。これらの研究は、その成果によって、出産・育児の負担やストレスの軽減をねらった政策立案へ寄与してきたといえる。

しかし 2005 年、日本の人口は初めて自然減となり、予想以上に少子化は進行していると認識せざるを得ない状況となった。2006 年時点で、この方向での調査研究および、その成果による政策だけでは、少子化傾向に歯止めがかからなかったと評価されている（内閣府 2007)。また、「負担」への対処という議論をすることによって、育児とは大変なことであって、産むと損だ、というメッセージを図らずも女性や家族に伝えることになりかねない。

本当に子育ては､「負担」それだけなのだろうか。桜井智恵子は、子育て家庭について、いつも「支援」される存在なのか、と問題提起している（2007 年 4 月 10 日付読売新聞記事「育ちささえる」)。社会が子育てを「支援」するということは、子育ては家族の課題だとする認識の言い換えだ、という指摘である。桜井は「子どもとの暮らしを、文句を言いつつ面白がっている家庭はたくさんある」と書いている。現実の子育て家庭には､地に足のついた子育ての楽しみやよろこびがあると考えられる｡『国民生活白書（平成 19 年版)』によれば､「家族がいてよかったこと」として、①精神的な充実感を得られること、②子育ての楽しさを味わえること、③困った時に助け合えることが挙げられている。しかし実際には、妊娠から出産の過程や、子育てを「楽しむ」ことに焦点をあてた調査研究はそう多くない｡多様化しているライフスタイルに、調査研究がおいついていないのである。だとすればわたしたちはここで、原点に立ち返って、子どもを生み育てることのよろこびや楽しみをいま一度、丁寧に確認する必要があるのではないだろうか。

第２節 研究の枠組み：目的と意義

本研究の目的は、出産や子育ての「負担」のみに注目するのではなく、出産や子育てについての態度や意識を、もっと複雑なままに、現実に即してとらえることにある。このため、子どもを実際に生み育てている女性にとっての①「出産・育児の楽しみ」とは何か、②「出産・育児の楽しみ」の規定要因はなにか、を明らかにすることを試みた。

この２点を明らかにすることで、実際に子どもを生み育てている女性たちの「つらくもあれば楽しくもある」意識を具体的に記述することが可能となり、将来の親世代への啓発に活用することができる。また、出産や子育てを「負担」としてのみとらえる否定的な視点に偏ることなく、楽しみの伝播、増幅といった肯定的な視点からの施策を含めた、バランスの取れた制度設計に寄与することができる。さらに、ライフスタイルの多様性に配慮した制度設計に寄与することも可能となる。

このため本稿は、以下の構成をとる。まず次節で、2006 年度におこなった調査研究のうち、都道府県ごとの女性就労率について、年齢階級別の推移パターンを分析した結果を述べる。続く第２章では、同様の検討を兵庫県の市区町ごとの女性就労率推移パターンでも妥当するかを検討した。この結果の一部は、第４章の質問紙調査の設計と分析に反映されている。第３章では、グループインタビューならびに、個別インタビュー調査の結果を報告している。この結果から、出産や子育ての「楽しみ」を中心とする女性の意識について概念化・仮説化をおこない、第４章で報告する質問紙調査によって仮説を検証した。

第３節 多様なライフスタイルと地域性

1. 地域特性から見る少子化

先進諸国の少子化に対する取り組みをみると、それぞれに力点が異なり、各国の生活様式や家族・就労等の文化を反映していることがわかる[1]。こうした多様性は、国ごとに異なるだけでなく、国内においても同様に存在していることが予想される。日本でも、出生率はそれぞれの地域によってばらつきがあり、子育て環境や仕事と家庭の両立のしやすさ、出産や育児のもつ意味など、子どもを産む／産まないという選択に影響を与える要素は、どの地域でも同じというわけではない。そして、それらの状況の背後には、生活や就労スタイル、結婚の時期、ライフコースなどの違いがあるのである。

樋口美雄らは、家計経済研究所「消費生活に関するパネル調査」から、（１）住宅事情（２）通勤時間（３）家族政策（４）景気動向と出生率の地域格差との関連について分析を行なっている[2]。そして、以下のような結果を指摘する。

---

[1]詳細は、「ライフスタイルの多様性を支える少子化対策の展開（中間報告）」を参照されたい。（http://www.hemri21.jp/kenkyusyo/seika/katei/pdf/h18_03.pdf）

[2] 樋口美雄、松浦寿幸、佐藤一磨「地域要因が出産と妻の就業継続に及ぼす影響について：家計経済研

・賃貸住宅や住宅ローンがあると第２子以降の出産が抑制される。また、親と同居・近居が女性の出産および就業を促進する。
・夫の通勤時間および保育所の定員数は第１子出産にのみ影響を及ぼしている。
・都道府県別有効求人倍率については、第１子出産における就業継続とのみ相関がみられる。

このように、出生率は地域のさまざまな要因と複雑に関連していることがわかる。

（1）国内における比較分析

2006 年 9 月に、「男女共同参画会議・少子化と男女共同参画に関する専門調査会」では、国内分析報告書を発行している。この中では、女性の就労・家事育児・両立支援環境などについて県別比較を行なっている。その結果、2002 年のデータでは、出生率が高い県ほど女性の有業率も高いという結果が示されている[3]。出生率がより高かった 1987 年の段階でも、これらの相関が示されている。

出生率と女性の有業率の関係によるタイプが、以下の表である。

表１　都道府県にみる出生率と女性有業率による分類

合計特殊出生率の減少率（1982-2002）	平均以下				平均より上		
合計特殊出生率の水準(2002)	平均以上		平均未満		平均以上		平均未満
女性有業率の水準(2002)	平均以上	平均未満	平均以上	平均未満	平均未満	平均以上	平均未満
タイプ名	タイプ1	タイプ2	タイプ3	タイプ4	タイプ5	タイプ6	タイプ7
都道府県名	熊本、山形、長野、佐賀、青森、山梨、福島、富山、鳥取、岩手、宮崎、福井、三重、島根、群馬、静岡	香川、大分、山口、長崎、鹿児島、岡山、沖縄	岐阜、高知	秋田、愛知	滋賀、栃木	新潟、石川	徳島、大阪、愛媛、北海道、和歌山、福岡、兵庫、茨城、広島、神奈川、東京、京都、宮城、埼玉、千葉、奈良

出所：男女共同参画会議・少子化と男女共同参画に関する専門調査会「少子化と男女共同参画に関する

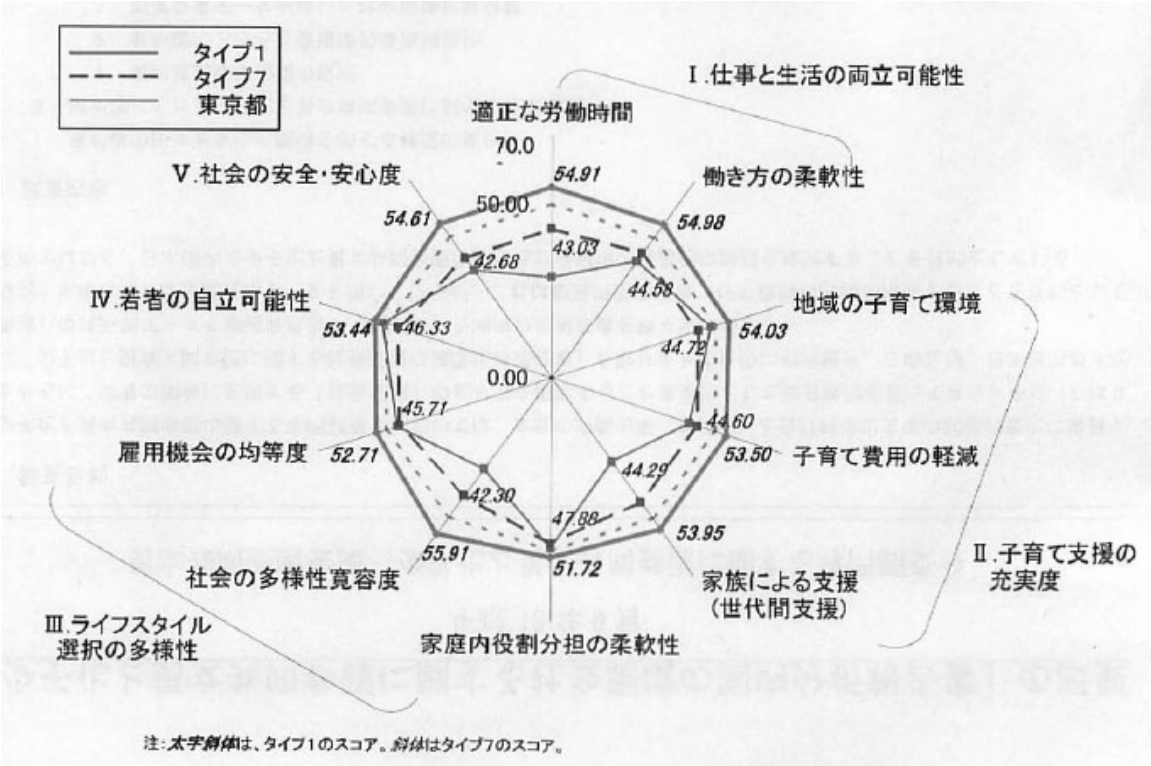
究『消費生活に関するパネル調査』による分析」RIETI Discussion Paper Series 07-J-012

[3] 男女共同参画会議・少子化と男女共同参画に関する専門調査会「少子化と男女共同参画に関する社会環境の国内分析報告書」

社会環境の国内分析報告書」より複製

これらはどのように異なるのだろうか。特に、タイプ１とタイプ７と東京都を比較したものが以下の図である。

図１　タイプ１とタイプ７および東京都の社会環境指標



出所：男女共同参画会議・少子化と男女共同参画に関する専門調査会「少子化と男女共同参画に関する社会環境の国内分析報告書」より転載

出生率も有業率も高い地域では、みごとにすべての項目が高く、逆に出生率も有業率も低い場合には、「家庭内役割分担の柔軟性」以外は、すべての項目で値が低いことがわかる。

そこで、こうした都道府県の間の差異をより詳細に検討するために、本章では、M 字型就労と労働時間の県別比較を行なう。比較を行なう前に、M 字型就労とは何かを確認しておこう。

2. M 字型就労とは

（1）M 字型就労の国際比較：欧米

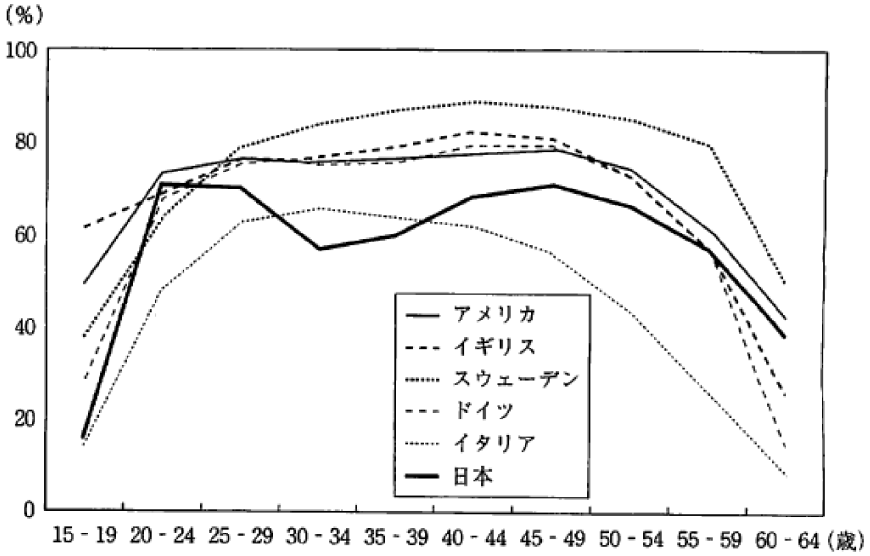
日本の女性就労の実態について論じるとき、極めて頻繁に持ち出されるグラフがある。それは、M 字型就労と呼ばれる女性の生涯就労率の変化である。高度成長期が終了して以降、既婚女性の就労率は、高まる傾向にあった。それは、もちろん、専業主婦と呼ばれる非就労女性が減少していることを意味している。

けれども、このような変化があるにもかかわらず、今日でも、結婚・出産は女性にとって、就労機会を失う大きなきっかけとなる。M 字と呼ばれるのは、結婚する人の

多い 20 代後半から 30 代前半にかけて就労率が減るが、出産や育児の負担が少なくなる学齢期からは、女性が再び就労し始めるため、就労率のカーブが M となるからである。実際には、左右対称な M 字カーブを描くわけではなく、30 代後半以降の上昇の方が 20 代後半からの下降に比べてなだらかになっており、20 代のピークほどには就労率は上がらない。また、女性の場合、結婚・出産以降の就労はパートによる就労が多く、休業制度を利用した場合を除き、正規職員として再就職するためにはさまざまな困難があることが指摘されている。

M 字型就労は、先進諸国との比較において引用されることが多い。たとえば、以下のような図が示される。

図 2　各国の年齢階級別女性の就労参加率



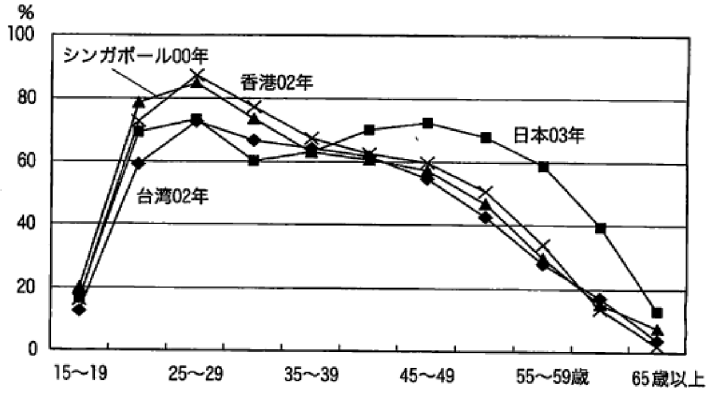
出所：社会保障・人口問題研究所『人口統計資料集 2004』（白波瀬佐和子「母親就労の位置づけに関する国際比較研究：男女ともに働きやすい社会を目指して」『現代女性の労働・結婚・子育て：少子化時代の女性活用政策』ミネルヴァ書房、p.103 より重引）より転載

出生率の比較的高いアメリカやイギリス・スウェーデンだけでなく、日本と同程度の出生率であるドイツやイギリスも、日本のような M 字曲線を描いてはいない。そこで、多くの論者に指摘されるのは、他の国のように、2 つのピークの間の谷間をなくすことの重要性である。

（2）M 字型就労の国際比較：アジア

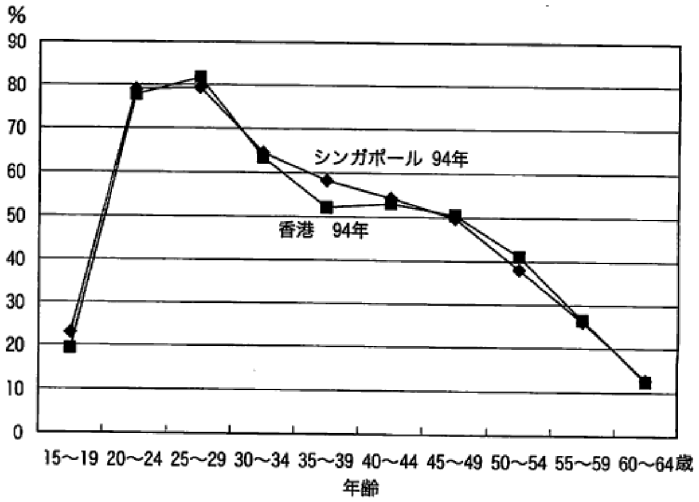
西欧と比較した場合、日本の M 字型就労は特異な形態のようにみえる。けれども、他の地域には、この見慣れた比較とは異なる就労のグラフがある。それは、アジアの先進国における女性の就労率の比較である。以下のグラフは、瀬地山角が作成したグラフである。

図 3　東アジア女性の労働力率の比較



出所：瀬地山角 2006「東アジアの家父長制、その後」『家族の変容とジェンダー：少子高齢化とグローバル化のなかで』日本評論社、p.153 より転載

図 4　シンガポールと香港の年齢別女子労働力率



出所：瀬地山角 2006「東アジアの家父長制、その後」『家族の変容とジェンダー：少子高齢化とグローバル化のなかで』日本評論社、p.153 より転載

女性の就労や少子化の話をする際には、多くの議論が欧米の先進国ばかりに目を向けている。しかし、アジアにはアジアの異なる就労の特徴があり、そこには欧米とは異なる共同参画に対する意識が存在していることがわかる。実は、上記の図のシンガポールと香港の形態は、日本の女性について、正規雇用者にしぼった場合の図と近似している。

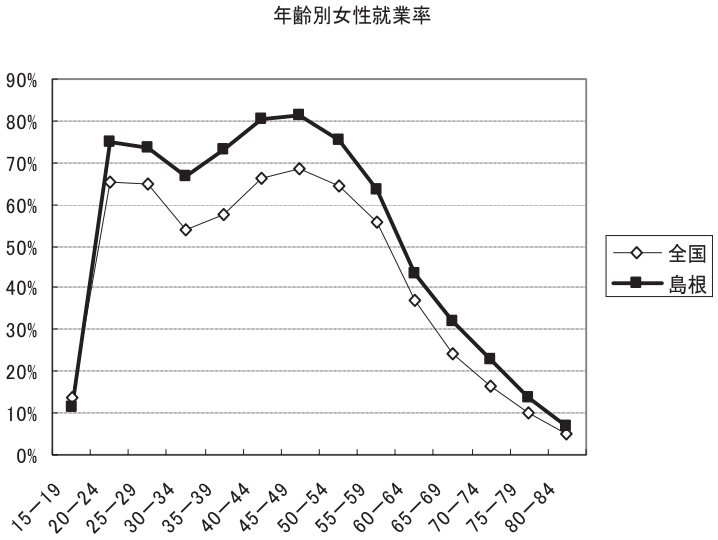
出生率の低下と女性の就労との関連については、これまで多くの議論が行なわれてきた。けれども、それらは、赤川が指摘するように、かなり恣意的に切り出された情報を、繰り返し上書きしていたに過ぎないという可能性がある。日本は M 字型就労＝少子化という現象の渦中にある、したがって、M のくぼみをなくして就労率を上げることが至上命題であるというような観念は、実は、それほど絶対的な根拠を有しているわけではないのである。

3. 県別にみた女性の就労のあり方

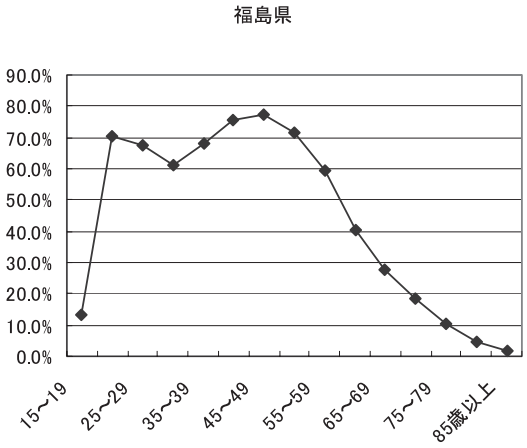
（1）年齢別女性就労率

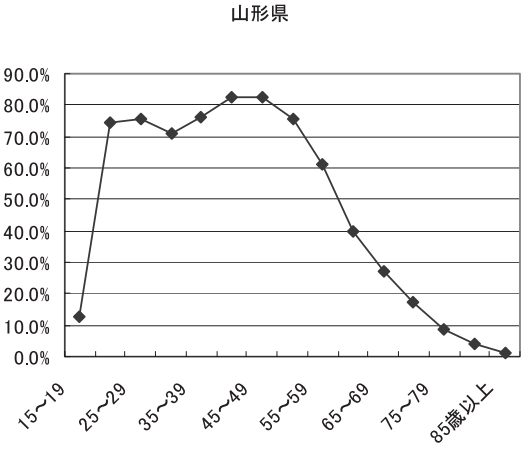
以下では平成 12 年に行なわれた国勢調査のデータをもとに、県別の女性就労率についてみていくことにする。県ごとに年齢別女性就労率をみると、実はどこの県も同じ M 字カーブを描いているわけではなく、いくつかのバリエーションがあることがわかる。M 字型をタイプ別に分類すると大まかにいって、以下の 6 つのタイプに分かれる。

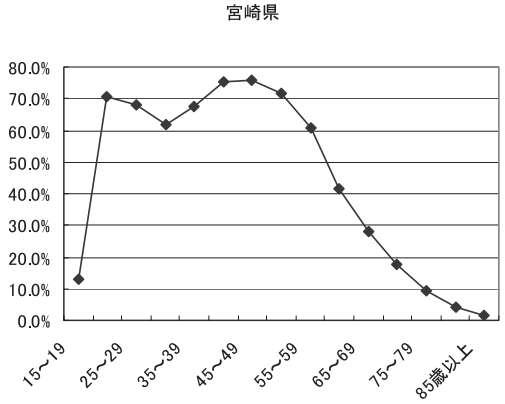
A：40 代後半の第二のピークが 75%以上

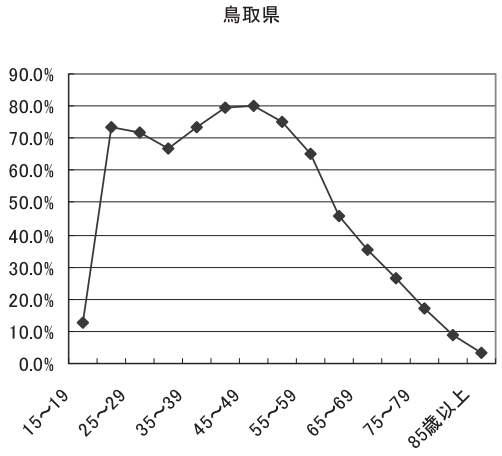


○他県の例

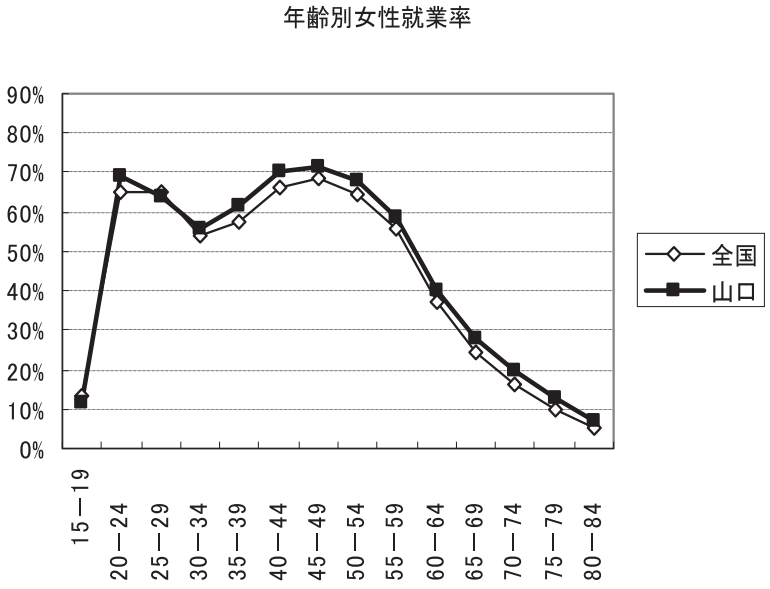




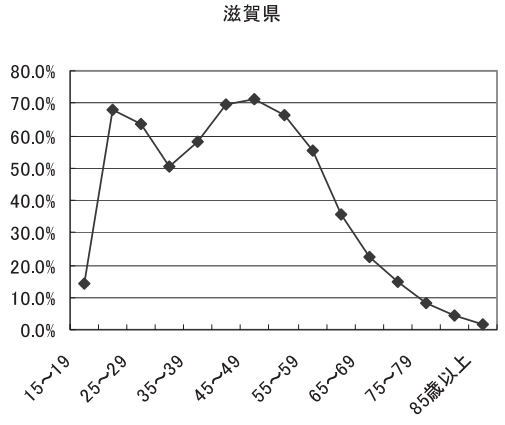


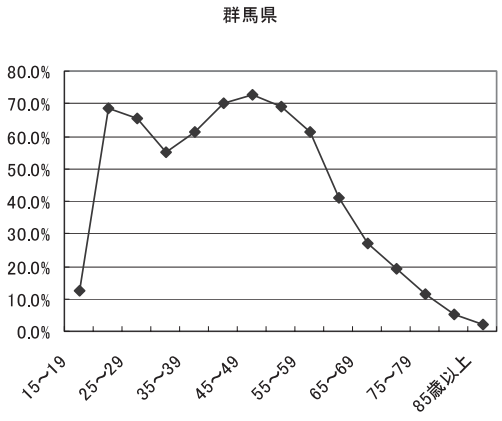


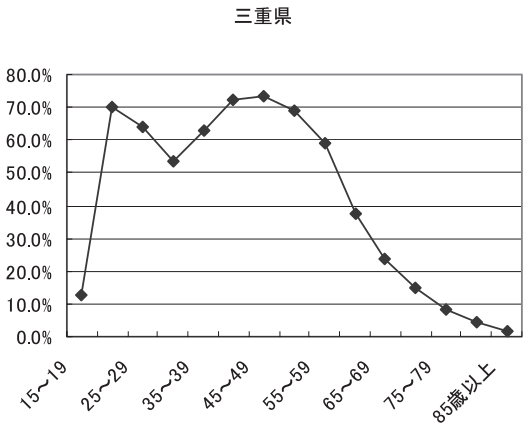
B：40 代後半の第二のピークが 65～75％未満で、20 代前半より 20 代後半が低い

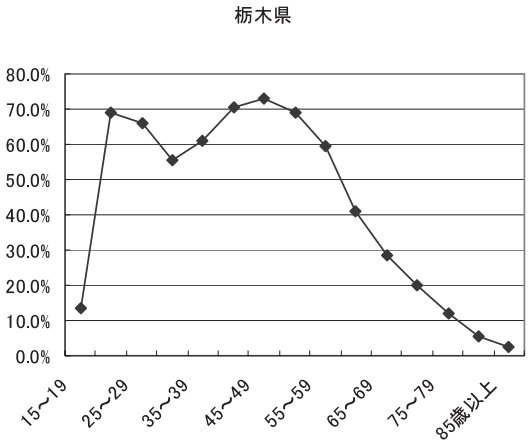


○他県の例

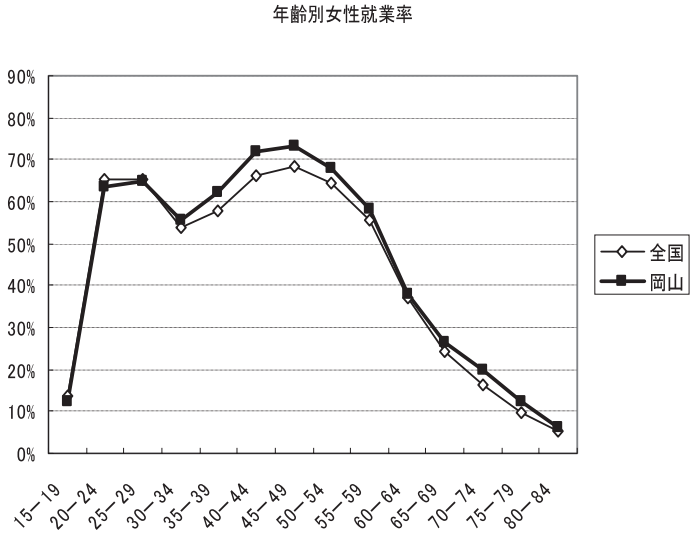




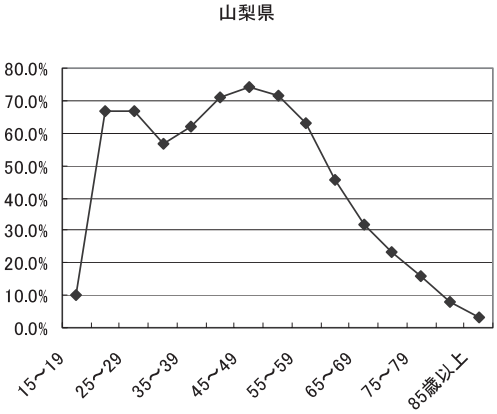


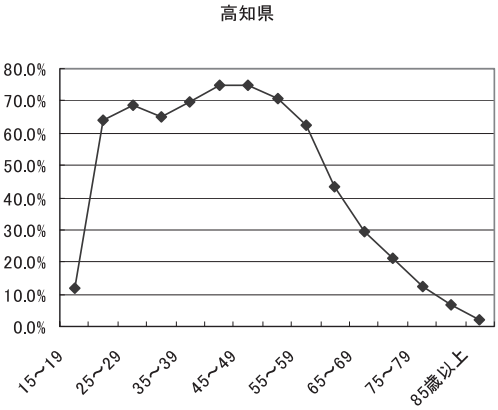


C：40 代後半の第二のピークが 65～75％未満で、20 代前半より 20 代後半が高い

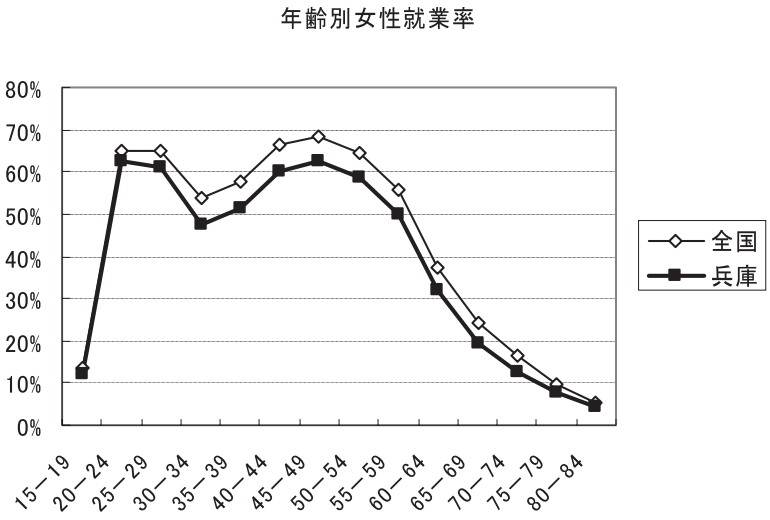


○他県の例

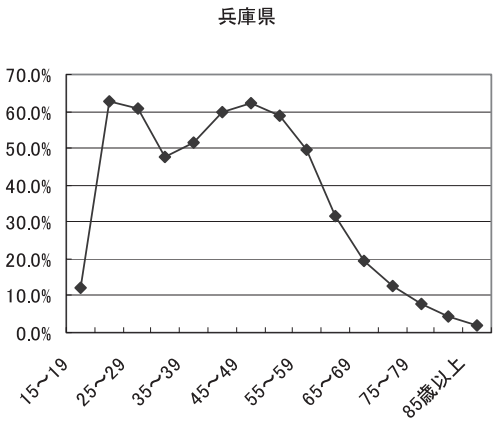


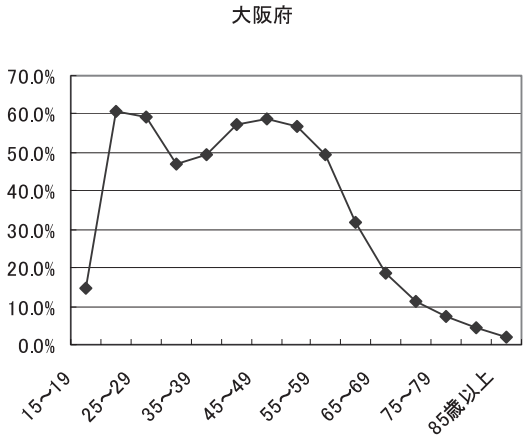


D：40 代後半の第二のピークが 65%未満で、20 代前半より 20 代後半が低い

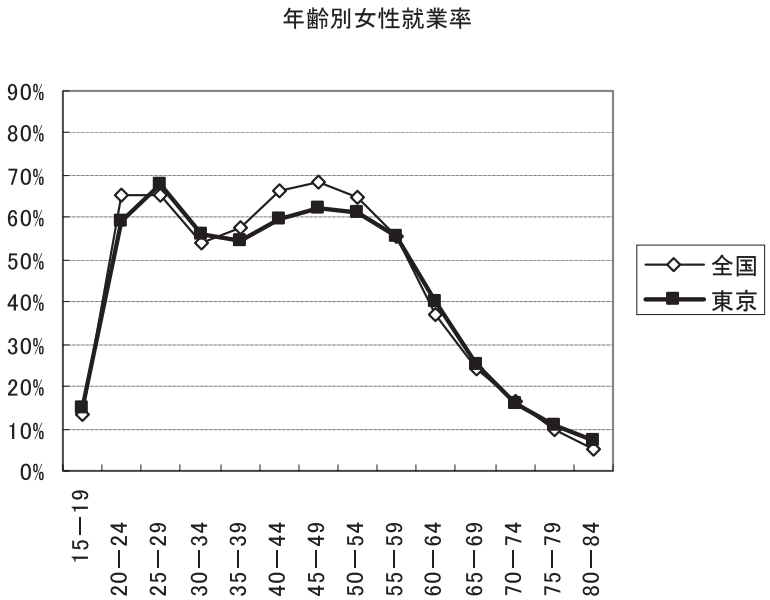


○他県の例

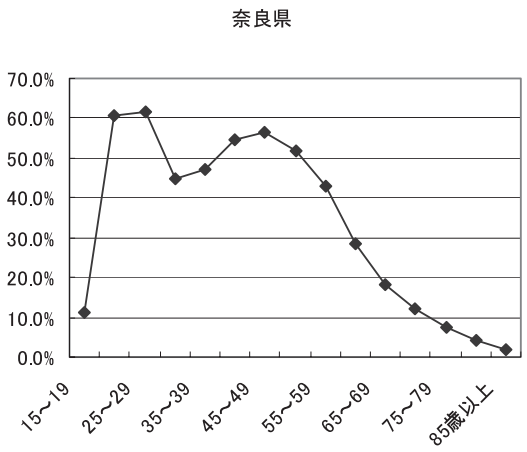


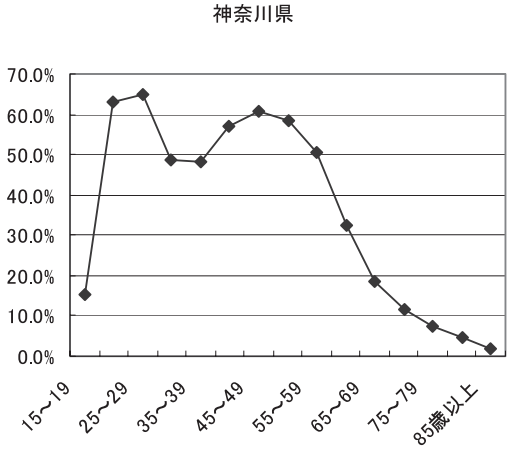


E：40 代後半の第二のピークが 65%未満で、20 代前半より 30 代前半が高い



○他県の例





A～E を分類すると以下の通りである。

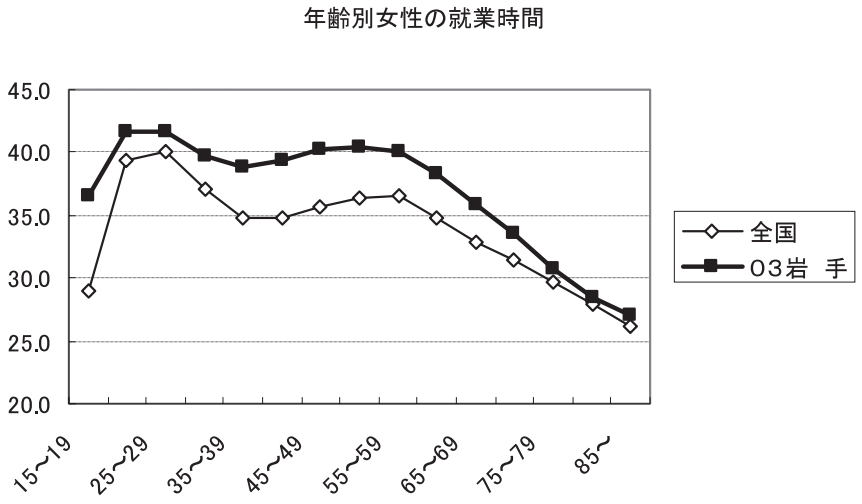
						合計特殊出生率(平均)	三世代同居世帯率(平均)
A	福島	島根	山形	鳥取	宮崎	1.59	20.19
	福井	長野	岩手	新潟	静岡		
	岐阜	富山	秋田	石川	佐賀		
	熊本						
B	滋賀	群馬	三重	栃木	山口	1.47	13.18
	茨城	愛媛	和歌山	愛知	広島		
	北海道	鹿児島	大分	香川	長崎		
C	山梨	岡山	青森	宮城	徳島	1.45	12.78
	福岡	高知					
D	兵庫	大阪	千葉	埼玉		1.32	7.63
E	奈良	神奈川	京都	東京	沖縄	1.35 （沖縄を除くと1.23）	6.00 （沖縄を除くと7.28）

合計特殊出生率と三世代同居世帯率は、あくまでも平均値であり、全ての県が例外なく平均値に近いわけではない。それぞれのグループにはずれ値のような県の数値もある。ただし、全体の傾向としては、女性の就労に関するライフコースと出生率は関連があり、そうしたライフコースを支える背景に、三世代同居という家族形態が存在しているようである。

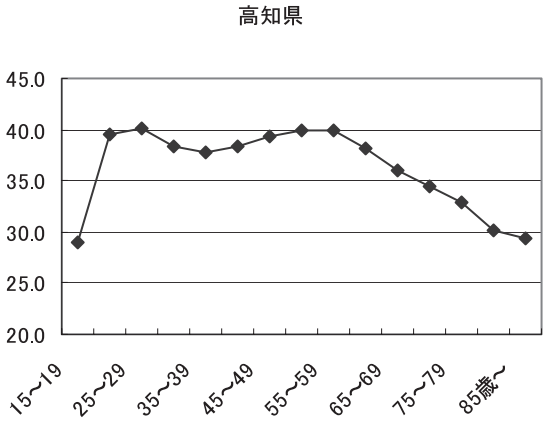
（2）年齢別女性就業時間

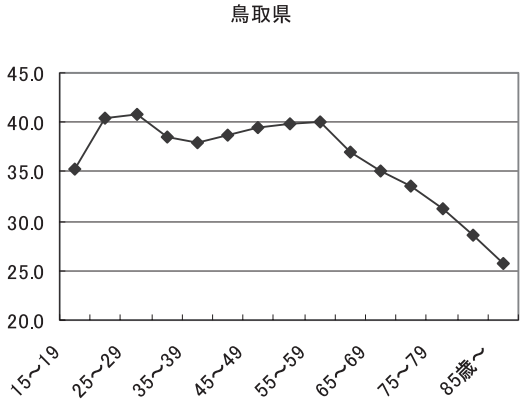
女性たちは一週間にどれぐらいの時間、労働に費やしているのだろうか。また、就業時間は地域のよって異なるのだろうか。そして、それが出生率に与える影響はどうだろう。以下では、県別に女性の年齢別の就業時間をみていくことにしよう。前項と同様に、時間の長さによって分類すると以下の結果となった。

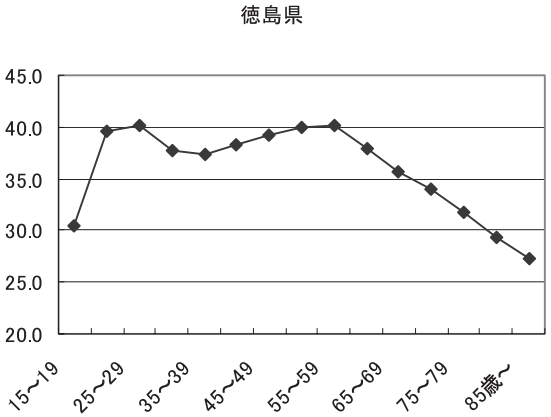
A：40 代以降のピークが週平均 40 時間を超える



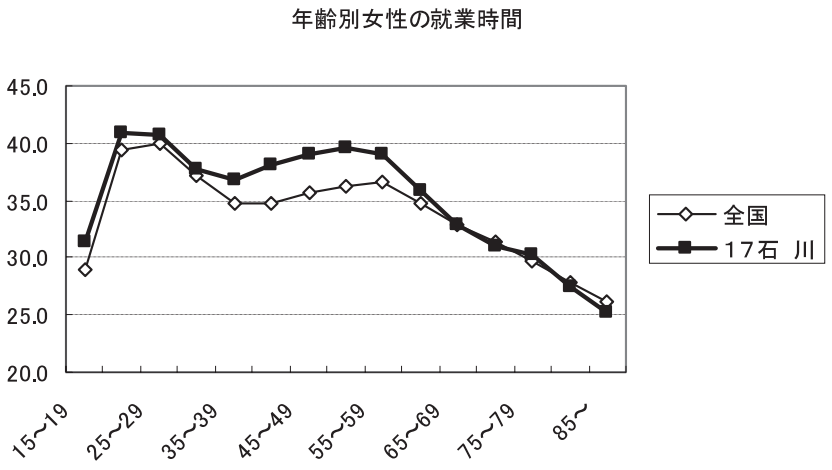
○他県の例



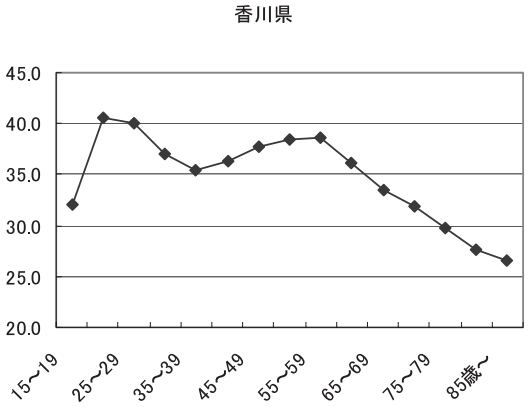


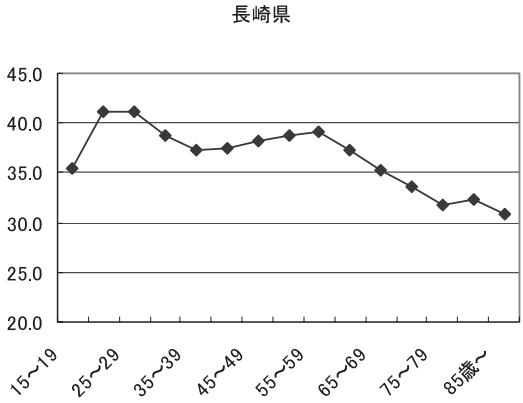


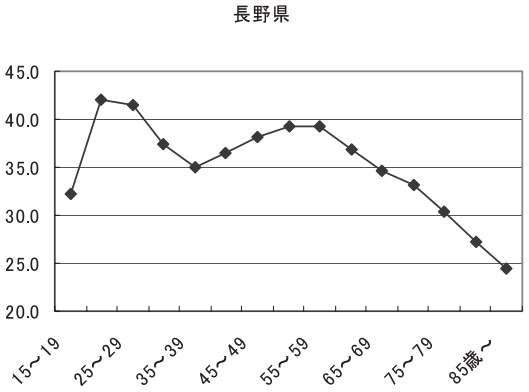
B：40 代以降のピークが週平均 38～40 時間未満

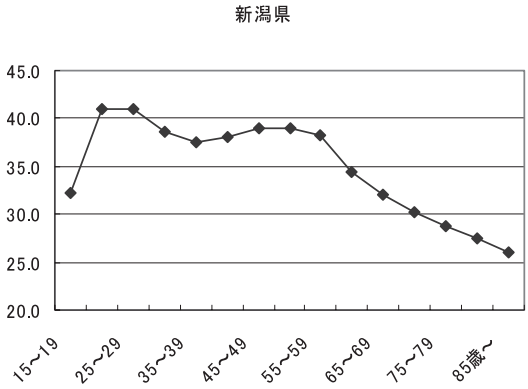


○他県の例

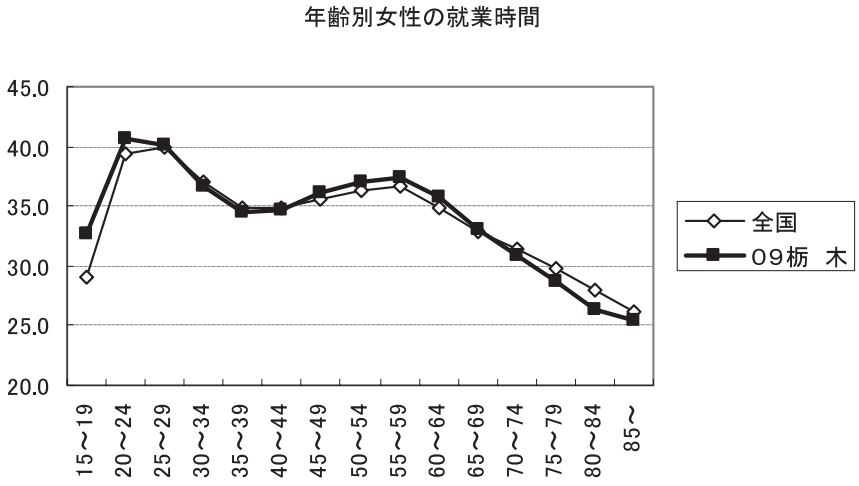




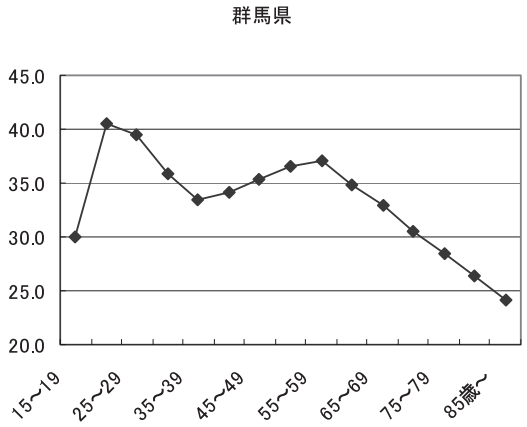


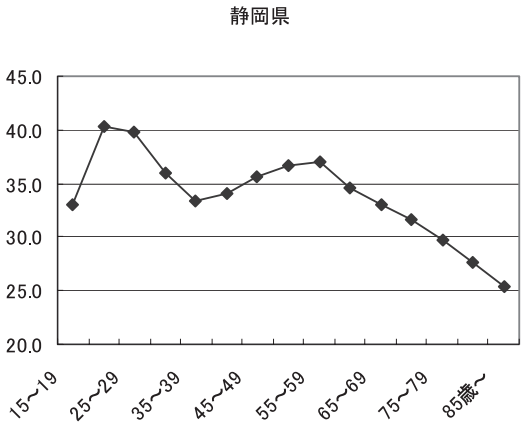


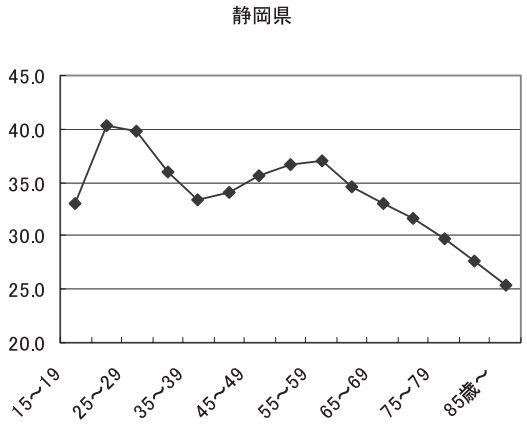
C：40 代以降のピークが週平均 36～38 時間未満

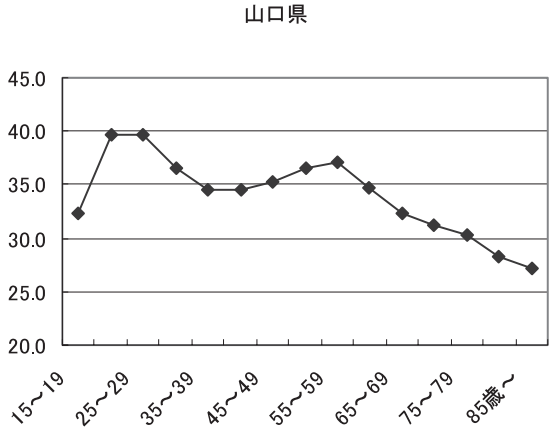


○他県の例

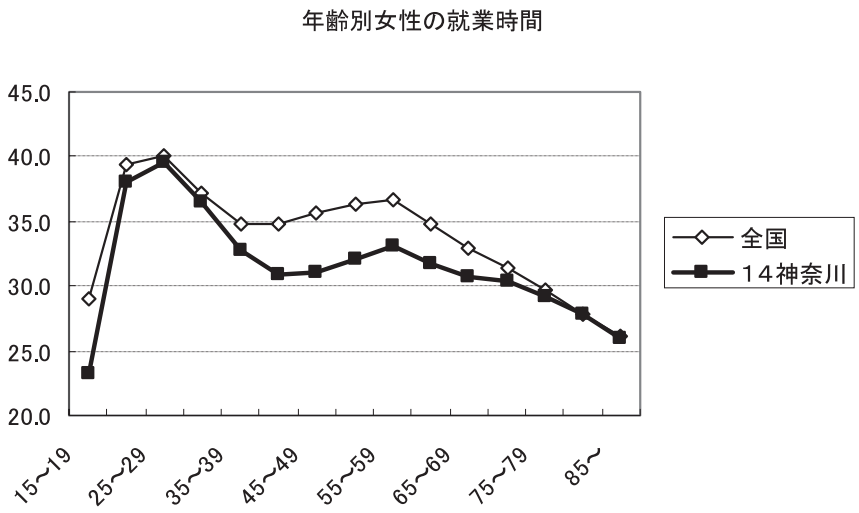




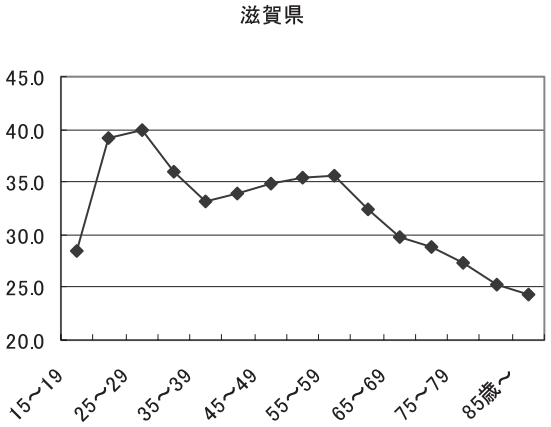


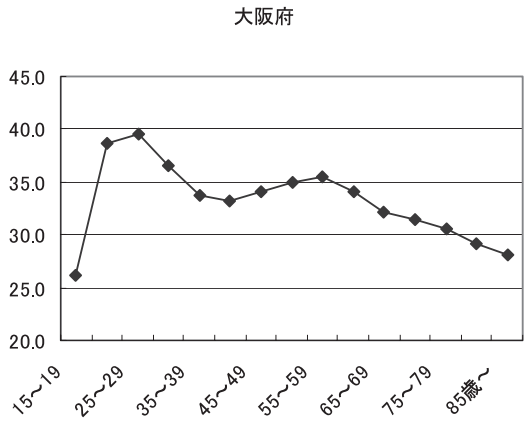


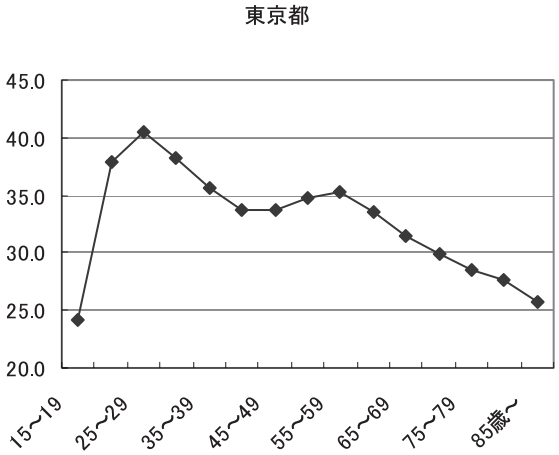
D：40 代以降のピークが週平均 36 時間未満



○他県の例







A～D を分類すると以下の通りである。

						合計特殊出生率(平均)
A	高知	徳島	鳥取	岩手	宮崎	1.59
	青森	福井	山形			
B	石川	長野	香川	鹿児島	大分	1.55
	山梨	秋田	熊本	富山	佐賀	（沖縄を除くと 1.53）
	福島	島根	新潟	長崎	北海道	
	沖縄					
C	群馬	静岡	三重	山口	栃木	1.44
	福岡	宮城	京都	広島	茨城	
	愛媛	岡山	岐阜	和歌山		
D	滋賀	愛知	大阪	東京	奈良	1.32
	兵庫	千葉	神奈川	埼玉		

女性の就業時間についてみてみると、40 代以降の女性の就業時間が長い地域ほど、出生率が高いということがいえる。

（3）女性の雇用形態

女性の年齢別就業率と一週間の就業時間について、県別に比較検討を行なった。その結果、概して就業率と就業時間が長いほど、出生率も高いことがわかった。それでは、実際に働き方には違いがあるのだろうか。女性の就労形態について、常勤雇用労働者、臨時雇用労働者、非雇用労働者の 3 種類に分けて比較すると、平成 12 年のデータでは、各県によって形態の比率が異なっていることがわかった。以下は、臨時雇用労働者、非雇用労働者の割合の多さによって分類した結果である。

女性の労働者総数のうちの臨時雇用労働者の割合

20%以上	沖縄	北海道	神奈川				
19%以上	千葉	埼玉	滋賀	兵庫			
18%以上	東京						
17%以上	福岡	鹿児島	山口	茨城	宮城	岩手	三重
16%以上	群馬	長野	広島	秋田	島根	愛知	青森
	大分						
15%以上	高知	宮崎	栃木	岡山	熊本	岐阜	香川
	新潟	山梨					
14%以上	鳥取	愛媛	石川	福島	富山	徳島	
14%未満	山形	福井					

女性の労働者総数のうちの非雇用労働者の割合

（非雇用労働者：役員、雇用のある業主、雇用のない業主、家族従業員、家族内職者）

27%以上	和歌山	山梨	徳島	青森	岩手	高知	
25%以上	長野 福島	宮崎 鹿児島	鳥取	熊本	愛媛	山形	佐賀
23%以上	島根 福井	秋田 香川	栃木	群馬	茨城	岐阜	大分
21%以上	静岡	長崎	新潟	岡山	京都	山口	広島
19%以上	石川 東京	愛知	奈良	三重	宮城	富山	北海道
19%未満	沖縄 神奈川	福岡	大阪	兵庫	滋賀	千葉	埼玉

これらの結果は、女性の就業率や就業時間とどのように関連するのだろうか。先に見た女性の就業率、一週間の就業時間によって分類した県について、臨時雇用労働者および非雇用労働者の割合の平均を算出した。結果は、以下のとおりである。

年齢別女性就業率による分類

						合計特殊出生率(平均)	臨時雇用労働者の割合（平均）	非雇用労働者の割合（平均）
A	福島 福井 岐阜 熊本	島根 長野 富山	山形 岩手 秋田	鳥取 新潟 石川	宮崎 静岡 佐賀	1.59	15.2%	24.4%
B	滋賀 茨城 北海道	群馬 愛媛 鹿児島	三重 和歌山 大分	栃木 愛知 香川	山口 広島 長崎	1.47	16.9%	23.0%
C	山梨 福岡	岡山 高知	青森	宮城	徳島	1.45	15.9%	24.5%
D	兵庫	大阪	千葉	埼玉		1.32	19.0%	17.7%
E	奈良	神奈川	京都	東京	沖縄	1.35 （沖縄を除くと1.23）	19.1% （沖縄を除くと18.3%）	19.7% （沖縄を除くと19.1%）

年齢別女性の就業時間による分類

						合計特殊出生率(平均)	臨時雇用労働者の割合（平均）	非雇用労働者の割合（平均）
A	高知	徳島	鳥取	岩手	宮崎	1.59	15.0%	26.4%
	青森	福井	山形					
B	石川	長野	香川	鹿児島	大分	1.55（沖縄を除くと1.53）	16.5%（沖縄を除くと16.1%）	23.5%（沖縄を除くと23.8%）
	山梨	秋田	熊本	富山	佐賀			
	福島	島根	新潟	長崎	北海道			
	沖縄							
C	群馬	静岡	三重	山口	栃木	1.44	16.3%	23.0%
	福岡	宮城	京都	広島	茨城			
	愛媛	岡山	岐阜	和歌山				
D	滋賀	愛知	大阪	東京	奈良	1.32	18.6%	18.2%
	兵庫	千葉	神奈川	埼玉				

「年齢別女性就業率による分類」についてみると、臨時雇用労働者の割合および非雇用労働者の割合は、A~C と D～E のグループに分かれる。前者は概して就業率が高いグループであるが、臨時雇用労働者の割合は低く、非雇用労働者の割合が高いことが、表の結果からわかる。

「年齢別女性の就業時間による分類」については、つぎの結果となっている。すなわち、A は、臨時雇用労働者の割合は低く、非雇用労働者の割合は高い。B と C は大差がなく、D は、臨時雇用労働者の割合が高く、非雇用労働者の割合が低い。

これらの結果から、以下のことがわかる。先に女性の就業率が高く、就業時間も長いほど出生率が高いということが示されていたが、その背景には、臨時雇用労働者の割合が低く、非雇用労働者の割合が高いことがある。すなわち、出生率の高い女性は、育児期も含めて比較的長時間働き続けているが、それが可能となっているのは、働き方に裁量の余地が高いと思われる従業上の地位（役員、雇用のある業主、雇用のない業主、家族従業員、家族内職者）についているためである。裏を返せば、出生率の低い地域（都市部が中心）では、女性は子どもを多くは持たず、就労する場合にも臨時雇用という形態を選択する傾向にあるということがわかる。

就業率・就業時間・雇用形態についてみると、女性の選択の中には、都市型の生活様式と地方型の生活様式がある。そして、それらによって、女性が子どもを産み育てる数もまた、異なっているのである。

第 2 章 女性の就労パターンにみる兵庫県下の地域特性

第 1 節 目的

前章でみたように、女性の年齢階級別就労率の推移パターンには地域特性があり、その特性に応じて合計特殊出生率や三世代同居率には違いがある。このことが、兵庫県下の市区町においても妥当すると仮定し、①兵庫県下の市区町における、女性の年齢階級別就労率の推移パターンは、どのように分類できるのか、②分類ごとの特徴はどのようなものか、③地理的な分布はどのようになるのか、④分類ごとで、合計特殊出生率や三世代同居率の平均値に差があるかどうかを確認することを目的として、分析をおこなった。

このことによって、兵庫県における女性の就労パターンが明らかとなり、女性や家族がどのような地域で、どのようなライフスタイルを選択しているのかが明らかとなり、少子化対策を実施するにあたっての手がかりを得ることができる。

第 2 節 方法

まず、年齢階級（5 歳刻み）別の女性の就労率について、兵庫県下の 49 市区町の階層クラスタ分析[4]による分類をおこなった。手法はグループ間平均連結法を用い、非類似度は平方ユークリッド距離で測定した。就労率は、2005 年に実施された国勢調査の結果を用いた。

次に、作成されたクラスタごとの合計特殊出生率ならびに、三世代同居率について、分散分析による平均値の比較をおこなった。合計特殊出生率および、三世代同居率は 2005 年実施の国勢調査の結果をそれぞれ用いた。

第 3 節 結果と考察

1. クラスタ分析

兵庫県の市区町は、女性の年齢階級別就労率の推移パターンから、4 つのクラスタに分類することが妥当である。デンドログラムを図 5 に示す。クラスタ 1 には、神戸市全区から尼崎市までの阪神地域と、姫路市などの播磨地域、伊丹市や三田市などの阪神北地域が含まれる。クラスタ 2 には、淡路島北部と、篠山市および香美町が含まれる。クラスタ 3 には、西脇市や丹波市などの内陸部から、豊岡市、新温泉町などの日本海側の市町が含まれている。クラスタ 4 は、南あわじ市 1 市からなっている。表 2 に、それぞれのクラスタに属する市区町の一覧を示した。

---

[4] 階層クラスタ分析とは、対象の非類似度にしたがって、段階的にクラスタ（集落）を形成する分析手法のことである。今回は、n 個の対象を n 個のクラスタとするところから始めて段階的に凝集していく手法をとった。詳しくは齋藤堯幸・宿久洋，2006,『関連性データの解析法』共立出版．を参照のこと。

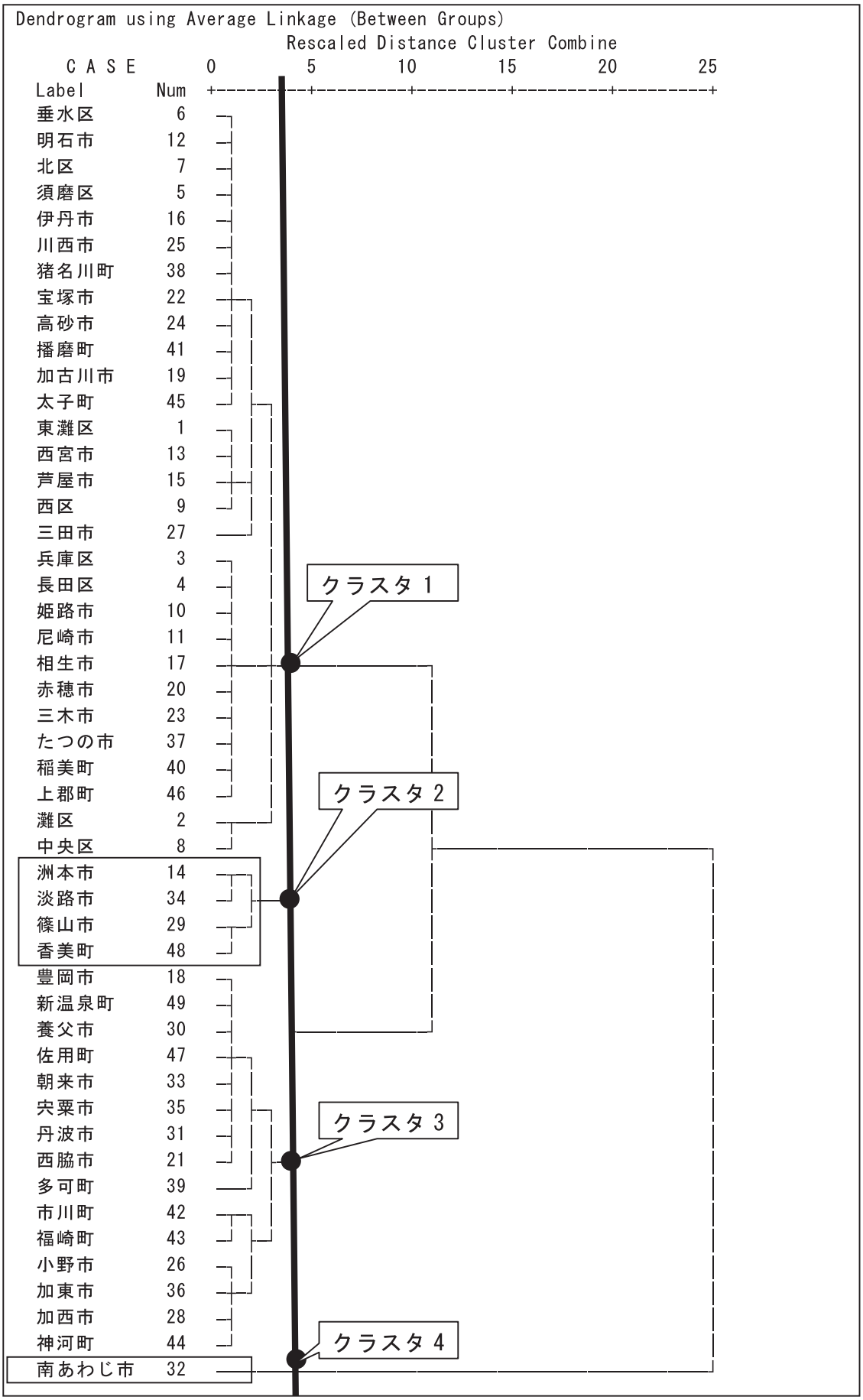


図 5 クラスタ作成過程（デンドログラム）

表 2 クラスター覧

クラスタ	所属市区町	解釈
クラスタ1	東灘区、灘区、中央区、兵庫区、長田区、須磨区、垂水区、北区、西区、姫路市、尼崎市、明石市、西宮市、芦屋市、伊丹市、相生市、加古川市、赤穂市、宝塚市、三木市、高砂市、川西市、三田市、たつの市、猪名川町、稲美町、播磨町、福崎町、太子町、上郡町	瀬戸内沿岸部
クラスタ2	洲本市、淡路市、篠山市、香美町	淡路島北部
クラスタ3	豊岡市、西脇市、小野市、加西市、養父市、丹波市、朝来市、宍粟市、加東市、多可町、市川町、神河町、佐用町、新温泉町	但馬、北播磨
クラスタ4	南あわじ市	淡路島南部

次に、クラスタごとの年齢階級別女性就労率の平均値を図 6 に示す。

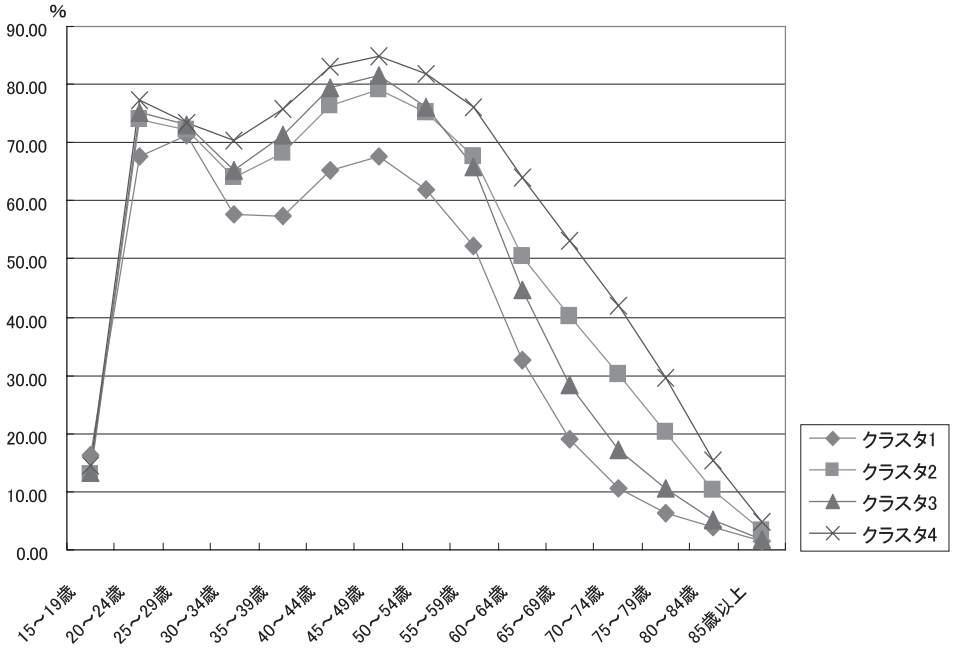


図 6 クラスタごとの女性就労率の平均値

前章で述べたように、日本における女性の就労率は一般に二峰性分布の形状をとる。ひとつめの山（就労率のピーク）は 20 代にあり、ふたつめのピークは 40 代に存在することが多い。形状がアルファベットの「M」の字に似ているところから、女性の年齢階級別就労率が描くカーブは「M 字カーブ」と呼ばれている。M 字を形成する要因としては、女性が出産や育児のために就労を中断することが指摘されており、M 字の深浅は、女性の社会参加の指標として使われることもある。

兵庫県に住む女性の就労率も M 字カーブを形成するが、次に述べるようにクラスタごとに特徴がある。クラスタ 1 に属する市区町は、瀬戸内沿岸地域である。この地域

の女性就労率の特徴は、以下の通りである。ひとつめのピークは20代後半の71%であり、M字の底は30代後半の58%である。クラスタ1では、20代後半の女性の就労率が最も高く、ふたつめのピークである40代後半では68%にとどまり、最終的に20代後半のピークの水準にまでは回復しない。つまりクラスタ1の地域では、女性は20代後半から30代後半までの10年間に就労を中断し、その後、20代後半ほどには就労しないといえる。

クラスタ2は、淡路島北部および、篠山市・香美町である。この地域では、ひとつめのピークは20代前半の74%であり、M字の底は30代前半の64%である。クラスタ1と比較すると、5年早く推移していることがわかる。またこのクラスタでは、40代後半の女性の就労率が最も高く、79%である。つまり、就労はいったん中断するが、再就労する人も多いといえる。60代以降の就労率減少も緩やかである。

クラスタ3は、但馬・北播磨地域である。この地域では、ひとつめのピークはクラスタ2と同じく、20代前半の75%であり、M字の底は30代前半の65%である。このクラスタでも40代後半の女性の就労率が最も高く、82%を示している。60代前半までは、クラスタ2とほぼ同様のカーブを描くが、その後60代後半からはクラスタ2に比べると、就労率は急落する。

クラスタ4は、淡路島南部である。この地域は、県内でもっとも高い就労率を示す地域である。ひとつめのピークは20代前半の77%であり、M字の底は30代前半の70%である。この値は、クラスタ1の最高就労率とそう変わらない値である。このクラスタでも40代後半の女性の就労率が最も高く、85%を示している。M字カーブは緩やかで、60代以降も高い就労率を保つのが特徴である。

以上のことから、兵庫県下の女性の就労パターンは、離職したあとの再就職が少ない「右下がり」のクラスタ1のパターンおよび、20代の就労率を40代の就労率が上回る「右上がり」のクラスタ2から4までの就労パターンとに2分されることが理解できる。この違いは、ひとつめのピークからM字の底までのパターンの相違としてもあらわれる。図7は、4つのクラスタについて、就労率のひとつめのピークからM字の底までを表現したものである。

クラスタ1では、20代後半にひとつめのピークがある。そして20代後半から30代前半の5年間に就労率は急激に下降し、30代後半にM字の底を形成する。これに対して、クラスタ2から4までの就労率は、20代前半からM字の底を形成する30代前半までの10年間をつかって緩やかに下降する。

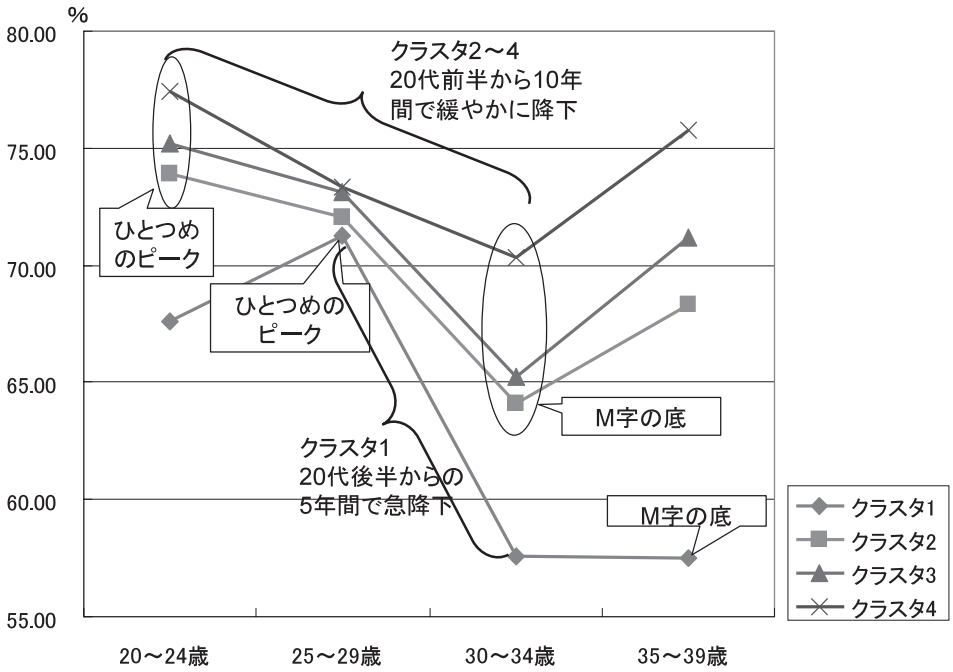


図 7 ひとつめのピークから M 字の底までの勾配の比較

以上のことから、各クラスタは、表 3 のように解釈できる。すなわち、クラスタ 1 は、阪神間および加古川市、姫路市等からなる瀬戸内沿岸地域で、全体的に女性の就労率は低く、若い女性がより就労している。これは、都市型就労を表すクラスタであると解釈できる。対して、クラスタ 2～4 は、都市郊外や中山間地域からなるクラスタである。その就労の特徴は、都市型就労と比較して、①全体的に就労率が高く、M 字カーブが緩やかであること、②20 代の就労率よりも子育てが一段落しているであろう 40 代の就労率が高いこと、である。より詳細には、クラスタ 2 およびクラスタ 4 は、60 代以降も高水準の就労率を維持するのに対し、クラスタ 3 は 60 代以降就労率が降下する。クラスタ 3 では、定年のある雇用が多いことが推測できる。また、クラスタ 4 では、どの年齢階級においても、就労率は高水準である。各クラスタの地理的な分布は、図 8 に示すとおりである。地理的な分布からも、クラスタ 1 が都市やその郊外からなるクラスタであること、クラスタ 2～4 は都市部以外の地域からなることが確認できる。

表 3 各クラスタの特徴

クラスタ	特徴	地理的な位置
クラスタ1	都市部・低い就労率・右下がりのM字・グラフの傾斜が急	瀬戸内沿岸部
クラスタ2	非都市部・高い就労率・右上がり・60代以降も緩やかな傾斜	淡路島北部・篠山・香美
クラスタ3	非都市部・高い就労率・右上がり・60代以降は就労率が下がる	但馬、北播磨
クラスタ4	非都市部・最も高い就労率・右上がり・60代以降も緩やかな傾斜	淡路島南部

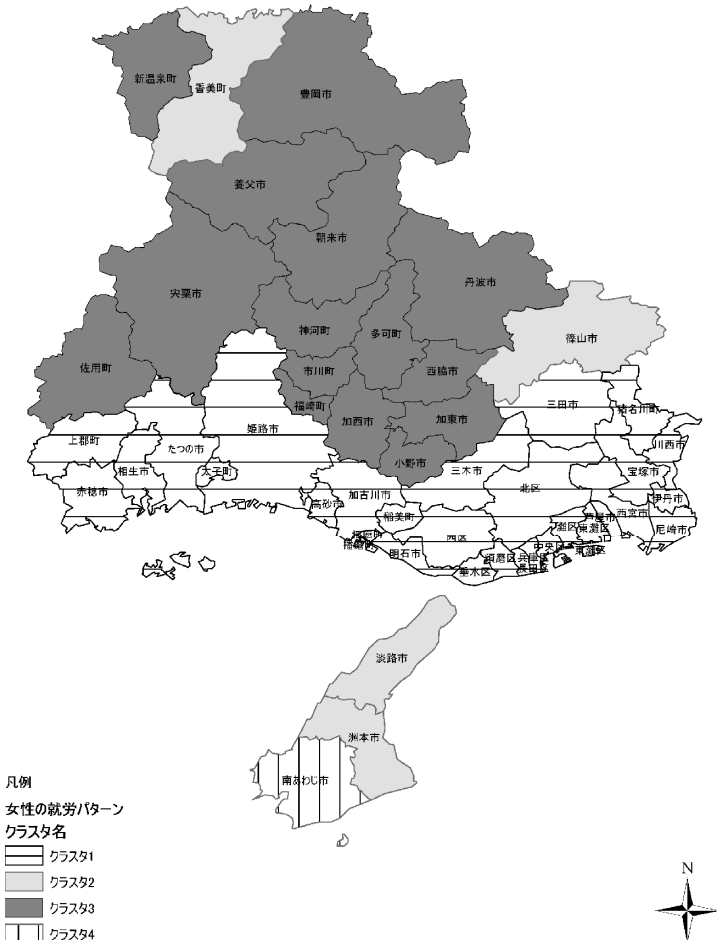


図 8 女性の年齢階級別就労パターン（4 クラスタ）

2. 平均値の比較

前項では、兵庫県下の市区町の特徴を、女性の就労率の変化からみた。ここでは、合計特殊出生率や三世代同居率との関連について検討する。前章で、女性の働き方と、合計特殊出生率や三世代同居率には相関があることを確認した。兵庫県下の市区町では、どうだろうか。クラスタごとの合計特殊出生率ならびに、三世代同居率の平均値の比較をおこなった結果を以下に報告する。

分散分析の結果、合計特殊出生率の平均値はクラスタによって差があるといえる（$F(3, 48)=11.42$, $p<0.01$）。クラスタごとの平均値は、図 9 に示すとおりである。

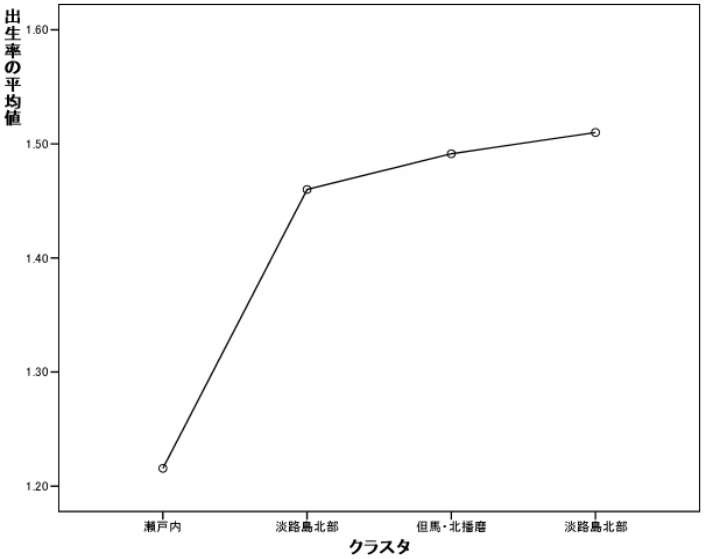


図 9 合計特殊出生率の平均値の比較

図 9 に示すように、瀬戸内地域であるクラスタ 1 の合計特殊出生率は、他のクラスタに比べて低い。一般に都市部では合計特殊出生率は低いとされているが、今回の結果もこのことを支持している。次いで淡路島北部であるクラスタ 2、但馬・北播磨地域であるクラスタ 3、最も合計特殊出生率が高いのは、クラスタ 4 の淡路島南部である。

次に、三世代同居率について同様に検討する。分散分析の結果、三世代同居率の平均値はクラスタによって差があるといえる（$F(3, 48)=36.97$, $p<0.01$）。クラスタごとの平均値は、図 10 に示すとおりである。

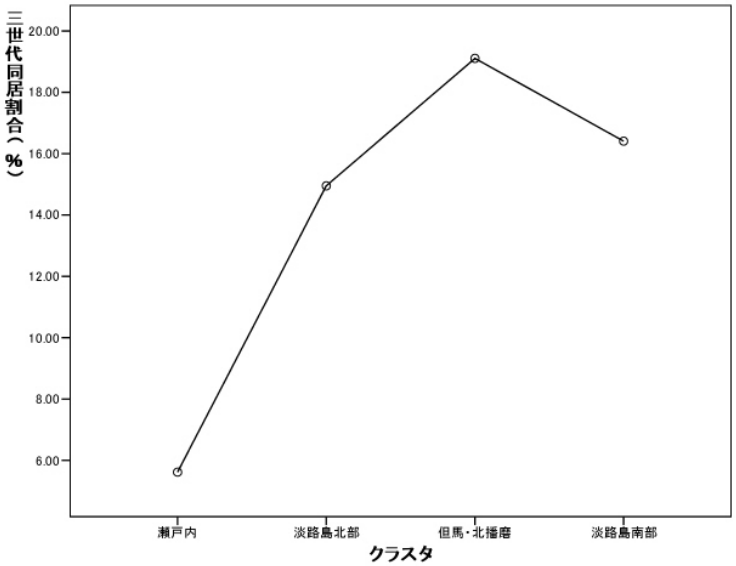


図 10 三世代同居率の平均値の比較

図 10 に示すように、都市部であって就労率の低いクラスタ 1 で、三世代同居率の平均値は低くなっている。三世代同居率が最も高いのは、クラスタ 3 の「但馬・北播磨地域」である。次いで、クラスタ 4 の「淡路島南部」の三世代同居率が高い。次に淡路島北部であるクラスタ 2 の順となる。

3. 考察

前項までの結果をまとめたものが、表 4 である。

表 4 女性の働き方にかかる兵庫県下市区町の地域特性

	クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3	クラスタ4
年齢階級別就労率の特徴	都市部 低い就労率 右下がりのM字 グラフの傾斜が急	非都市部 高い就労率 右上がりのM字 60代以降も緩やかな傾斜	非都市部 高い就労率 右上がりのM字 60代以降は就労率が下がる	非都市部 最も高い就労率 右上がりのM字 60代以降は就労率が下がる
地理的な位置	瀬戸内沿岸部	淡路島北部・篠山・香美	但馬、北播磨	淡路島南部
合計特殊出生率	低	高	高	高
三世代同居率	低	中	高	中

兵庫県下の市区町は、女性の働き方のタイプについて大きく 2 分できることが明らかとなった。ひとつは都市型就労のタイプ（クラスタ 1）であり、もうひとつは地方型就労のタイプ（クラスタ 2～4）である。地方型就労はさらに 3 つに分類される。まず、60 代以降も継続して就労する人が多いクラスタ 2 と、60 代まではクラスタ 2 とほぼ同じように推移するが、その後就労率が下がるクラスタ 3 である。そして、ほぼすべての年齢階級で最も高い就労率を維持するクラスタ 4 の 3 つである。

これらの 4 つのクラスタでは、合計特殊出生率ならびに、三世代同居率の平均値は異なっている。この背景には、働き方やこどもの生み方・育て方にかかる女性の、ひいては家族のライフスタイル選択があると考えられる。クラスタ 1 の地域では、都市型のライフスタイルが選択されており、クラスタ 2～4 の地域では、地方型のライフスタイルが選択されていると考えてよい。

具体的には、都市型のライフスタイルは、妊娠や出産を機に就労を中断した後、少ない子ども数を核家族で、専業主婦である女性が中心となって育てているというモデルであると推察できる。これに対して、地方型のライフスタイルは、妊娠や出産を機に就労を中断するのは同じだが、少し子どもが大きくなったころと考えられる 40 代には、再就労する人が多い。この要因のひとつは、三世代同居によって、親世代を子育ての人的資源として活用できることであると考えられる。また、今回は就労のタイプや産業比率等については考慮していないが、都市型ライフスタイルと地方型ライフスタイルで、正規雇用の割合や、自営業や家族従業員の割合等に差がある可能性がある。また、合計特殊出生率は都市型に比べて高いことから、生み育てる子ども数は都市部よりも多いであろうことが予測できる。

以上、兵庫県下の市区町について、女性の年齢階級別就労率の推移パターンによる分類から、地域特性やライフスタイル選択について考察した。兵庫県においては、女性の就労について、大別して 2 つの地域特性があることから、①人数的に大多数を占める都市型ライフスタイルを選択している女性や家族、②人数的には少数であるが、就労しながらより多くの子どもを生み育てている地方型のライフスタイルを選択している女性や家族、の少なくとも 2 つの型への政策的対応が求められるといえる。

クラスタ分析結果について、その規定要因を探るさらなる検討が必要であるが、今後の研究課題としたい。本研究では、上記の分析結果を、第 4 章で述べる質問紙調査における、調査地点選定に利用することとする。

第 3 章 妊娠や出産、子育てに関する女性の意識についての定性的把握

第 1 節 目的

ここでは、実際に子育てをおこなっている女性の、妊娠や出産、子育てについての意識を理解し、その規定因を探ることを目的として、グループインタビューならびに、個別インタビュー調査をおこなった。

グループインタビューによって、現在子育てに取り組んでいる女性たちが、自らの妊娠体験や出産体験、子育て体験をどのように受けとめているのか、また、体験の肯定的な解釈を支えるものはなにかを探ることができる。また、きわめて「ふつう」であると同時に、きわめて「特殊」でもある多胎育児についても紹介する。多胎育児については、方法として、多胎育児グループでのフィールドワークを併用した。

個別インタビュー調査では、比較的子ども数が多いと考えられる女性を対象とし、なぜ多くの子どもを持つことになったのかについてや、実際の妊娠や出産、子育てに対する思いを詳細に尋ねることで、肯定的な妊娠・出産・育児観を形成する規定因について考察した。

以上のことによって、子育て中の女性の意識が負担感やストレスばかりから構成されているわけではなく、楽しみ、喜びを含んでいることを示すことができる。調査結果は、質問紙調査の項目に利用するとともに、子育ての負担やストレスの軽減に着目するのではなく、妊娠、出産や子育ての楽しみの増幅という文脈で、政策を立案するために役立てることができる。

第 2 節 グループインタビュー：つらくも楽しい子育て生活

1. 方法

方法は、まちの子育てひろば等の育児サークル（以下、育児サークルと記す）に参加している母親たちへのグループインタビューおよび、育児サークルでの活動の参与観察である。調査対象は、表 5 に示す 6 箇所である。

表 5 グループインタビュー実施一覧

グループ	日にち	場所
グループA	5月23日	明石市内子育てひろば
グループB	5月24日	芦屋市内子育てひろば
グループC	6月5日	丹波市内子育てひろば
グループD	6月13日	芦屋市内子育てサークル
グループE	6月19日	多胎育児サークル
グループF	6月25日	高砂市内子育てひろば

いずれも、10名程度の方々へインタビューを実施した。

用いたのは、①妊娠中から現在に至る子育て期間中に、「自分の生活や自分自身が変化した」と感じるのはどんなことか、②妊娠、出産、育児で「つらいこと」逆に「楽しいこと」はどんなことか、③夫や両親との関係、等を中心的な質問項目とする、半

構造化インタビューである。記録は、対象者の同意を得て、IC レコーダによる録音によった。後日、録音記録から逐語的にテキストを作成し、分析に用いた。

2. 結果

6箇所でのグループインタビュー調査の結果は、おおむね8つの内容に分類できる。以下、項目ごとに述べる。

（1）妊娠・出産の経験の意味づけは、個人と子ども数によって違いがある

妊娠・出産体験は、個人による差が大きいことに加えて、同じ人でも、例えば第一子のときと第二子のときでは、違った体験としてとらえられている場合があることが分かった。どちらが楽は一概には言えず、個人差がある。代表的な発言は、以下のとおりである。

○待望の妊娠だった
○ずっと妊娠していたことに気がつかず、まったく予想外の妊娠だった
○つわりもなく、出産の直前まで走って通勤したりしていた
○つわりがひどく、まったく食べられずに点滴に通う日々だった
○第一子の妊娠期と第二子では全く違った（初回が楽・2回目が楽、等）
○納得できる出産をさせてくれる病院を探してあちこち電話した
○里帰り出産だったので、選ぶという感覚はなかった
○助産所のことは知ってはいたが、やはり病院が安心だと思っていた
○病院と助産所では、同じ「出産」でもまったく異なる体験（助産所での出産の満足度は大きい）

（2）「妊娠すること」は、案外コントロールできない

計画どおりに子どもを授かった、という人もいる一方で、「このくらいの時期に子どもがほしい」と考えたり、「結婚したらすぐに赤ちゃんが生まれる」と予想したりしていたにもかかわらず、実際には予想どおりにはいかなかった、という人も多かった。また、ほとんどの人は出産の時期についてのなんらかの希望を持っており、とくに子ども同士の「間隔」については、ほぼ全員が希望を持っていた。代表的な発言は、以下のとおりである。

○妊娠・出産は計画どおりだった
○妊娠・出産は計画どおりにはいかない
○不妊治療をおこなった
○なかなか妊娠しないと、早くしろと周りからいろいろ言われる（のがつらい）
○避妊しなければできると思いこんでいたが、案外できないものだとわかった
○妊娠することばかりを考えていると、意外と妊娠しない
○妊娠しない気晴らし（気をそらすため）に習い事をした
○あまりにも妊娠しないと思い詰めてしまいかえってよくないと思う

○すぐ（妊娠）できると思ったのにできなかった
○不妊治療を始める勇気はなかった
○次子の妊娠のタイミングについては希望を持っている（2・3歳あけたい）

（3）子育てについては、両義的な感情を抱いている

子育てについては、「孤独」や「しんどい」という発言が聞かれる一方で、「子どもはやっぱりかわいい」あるいは、「がんばっている自分をほめてあげたい」といった、楽しさ、うれしさに関する発言もあった。また、子育ての負担感については、第一子が「訳が分からないので、育児書を一生懸命読んで、大変」であるのに比べて、第二子以降は、「こんなものだ」という余裕が生まれて、いい意味での「手抜きができている」様子がうかがわれた。代表的な発言は、以下のとおりである。

○子育ては楽しい、つらくない
○第二子以降は手抜きする・余裕ができる
○第二子出産について、今までひとりに集中できていたのに今後どうなるのかと思ったが、産まれてしまえばなんとかなる
○第一子の妊娠、出産、子育ては、先がどうなるのかまったくわからない
○子どもとずっと自宅にいると息がつまる・疎外感がある
○子連れでの外出は難しい
○子育てはしんどい、誰にも代わってもらえない
○ちょっと子どもと離れる時間がほしい
○息抜きのためでなくても、ふつうの買い物でも子ども抜きで出かけられたら全然疲労感は違う
○多胎児の子育てのしんどさは、2倍じゃなくて2乗
○自分の限界に挑戦する感覚
○がんばっている自分が好き
○出産するまで自分は子どもが好きだと思わなかったが、育ててみるとやっぱり子どもはかわいいしおもしろい
○バリバリしごとをしていたときには想像しなかった世界、しあわせの形がある

（4）育児サークルに参加するのは自分のためでもある

育児サークルに参加しているのは、子ども同士の関わりをつくりたいという理由の他、自分と同じような年齢・月齢の子どもを育てている養育者と出会いたい、という理由からだとする発言が多く見られた。代表的な発言は、以下のとおりである。

○子育てひろば利用は、子どもよりむしろ、自分（の友だちづくり）のため
○ひろばで知り合って、個人的に会うようになった友だちがいる
○会に参加するのも結構エネルギーが必要
○子育てひろば利用で、保育所などの集団にはいるまでに、同じような年の子どもたち

と出会わせたい
○子どもどうしで「もませ」たい（大人の関わりだけでは甘えさせてしまう）
○（サークルにかかわらず）大きなお腹や子どもがきっかけで、知らない人が話しかけてくる体験をする（ふたごだととくに）

（5）夫との関係は、子どもができて変化した

夫に対して払う関心や、具体的な「世話」の量は、子どもが生まれることで減ってしまった、と受けとめられている。代表的な発言は、以下のとおりである。

○子どもにかまけて夫の世話ができなくなった
○赤ちゃんは構わないと死んでしまうから、夫には悪いけど自分で何とかしてもらいたい
○夫が手伝ってくれるからなんとかなるけど、一人だったらもうひとり出産することは考えられなかった
○家に大きな子どもがもう一人いると考えている
○もっと手伝ってほしいけど、喧嘩になりそうで言えない（イヤそうな顔をみたくない）
○専業主婦で「保育所に預けたい」というと、手抜きのように受け取られるのがつらい

（6）子育てについての相談は「ナナメ関係」にしたいと思っている

親の支援を計算のうちに入れている人もいるが、逆に親には頼れない、頼らない、とする人もいて、子育てにおける人的資源に対するとらえ方が多様化していることが推測される。子どもを預かってもらうといった物理的な支援について、両親に頼むという発言は多くきかれたが、一方で、育児方法等については親世代とは「やりかたや、価値観が違う」とする発言も多かった。親ではなく、同じような年齢・月齢の子どもを持つ友人等に相談している様子がうかがわれた。この際、子育ての両親といった世代として「タテ」の関係ではない、「少しだけ先輩」、すなわち「ナナメ関係」の人による忠告は、素直にきけるとして評価が高かった。その理由としては、的確なアドバイスに加えて、共感に基づく心理的サポートが得られるという点があげられている。代表的な発言は、以下のとおりである。

○自分の親には頼っている。一人ではお風呂に入れられない
○自分も「親としての自覚」が出てきて、あまり親には頼らなくなっている
○「なんでも言って」といわれるが、やはり夫の両親には気を遣うので、あまり頼まない
○実家が遠いので、両親には頼れない
○育児方法や価値観が違うので、あまり親には相談しない
○「自分のときはどうだったか？」と親に尋ねる
○以前の経験を尋ねても、あまり時間があきすぎると「忘れた」といわれてしまう
○子どもがいることで夫やまわりに迷惑をかけていると感じる

○ちょうど同じような年代の子どもを持つ友だちやきょうだいに相談する（うちはこうだけどそっちはどう？ときける）
○わかるわかると言ってもらいたい
○同じ年頃のこどもを持つ友だちは、同じようなことで悩んでいるので分かり合える
○自分より少し経験のある子育て経験者に相談したい
○自分より先に子育てしてる人の話は素直に聞ける
○子育て方法は10年も経てば古くなってしまう

（7）身近なモデルの存在が、子育てを気楽にする

既述のように、「ナナメ関係」の人の意見は、尊重される傾向にある。あわせて、そのような人のふるまいは、ロールモデルとなりうる。代表的な発言は、以下のとおりである。

○周りに3人生んで育てている人がいたら、自分もできるかなと思える
○周囲は3人が多いのでそんなものかと思っていた
○ひろばに来て、小さい子をみると自分もまた育ててみたくなる

（8）行政サービスについては、多胎児支援と保健医療・保育サービスに要望

「もっとお金があれば楽なのに」という、一般的なことをのぞけば、多胎児を育てている養育者からの要望が多く聞かれた。端的には、行政サービスは、多胎児については一切考慮しておらず、使いづらい制度となっている、ということである。多胎育児をめぐる状況については、後述する。

その他では、保健医療や、保育などの専門サービスの量が不足していることについての不安がきかれた。代表的な発言は、以下のとおりである。

○ふたごベビーカー（横型）がそのまま乗れるエレベーターはほとんどない
○ふたごベビーカー（横型）がそのまま通れる歩道はほとんどない
○多胎児用のサービスがほしい
○気軽に安価で預けられる先が近所にあったらいいのに
○専業主婦だって、保育所を利用したい
○子育てしながら勤められる都合のいい職場がなかなかみつからない
○夜間の小児救急体制が心配（遠くまで行かないといけない）
○産婦人科が減っているので、安心して妊娠出産に臨めない
○チャンスがあっても、ついでがなければわざわざ保健師などの専門家を利用しようとは思えない
○県のやっている不妊相談は知らなかった。結局は医者にかかるしかないのでは？

3. 考察

グループインタビューの結果から、以下のことがいえる。

すなわち、妊娠や出産、子育てについての意識は、個人によって、また同じ個人でも育てている子ども数によって大きく異なる。妊娠体験については、第一子が楽だったからといって第二子も楽だとは限らない。逆に、第一子妊娠時につわりがひどかったからといって、第二子の妊娠体験もつらいものであるとは限らない。妊娠期間中を楽しんで過ごすためには、もちろんつわり等がなく身体的に安定していることが重要であるが、その他には、自分の変化を積極的にとらえて適応していくことが挙げられる。出産体験については、どこで生むか、どのようにスタッフに関わってもらうかが影響を与える。「納得できるお産」を追求する人がいる一方で、大きな病院が一番安心、とする人もいる。出産体験を楽しむためには、「自分で納得のいく出産を計画する」ことが重要のようである。総じて助産師のかかわりは好評であった。

妊娠から出産までは、選択や決定について、産む性が主導権をにぎっていることが多く、家族で話し合って決める、といった発言はあまり見られなかった。

子育て体験であるが、第一子についてはわからないことばかりで手抜きができない、という発言が多く見られた。ただし、分からないことばかりだがなんとかなるものだ、という感想を持つ場合と、どうしていいか分からず不安でたまらない、という感想になる場合がある。もちろん、前者の感想を持てるほうが子育てを楽しむことができる。知らないこと、新しいことにいかに適応するかということが、楽しみと関わっているようである。第二子以降は、おおよその勝手がわかるとして、上手に手を抜くことができる、といった発言や、「完璧を求めてもできないと悟った」という、余裕が生まれると語られた。コントロールしようとしないことが、関連していると考えられる。

妊娠することの困難については、今回の調査で多くきかれた発言である。ほしいと思ったタイミングで簡単に妊娠する人がいる一方で、簡単に妊娠しない人や、「二人目不妊」の人もいた。妊娠したいのにできなかった人たちは、親戚や周囲の人からの圧力を感じたり、自分自身で思いつめてしまう場合があると語っている。これは、「妊娠することは自然で簡単なことだ」「避妊をやめれば妊娠する」という「常識」が、必ずしも成立しないことを示している。

育児サークルへの参加については、子ども同士の仲間づくりを意識しているという発言の他、子どものためというよりはむしろ、自分の仲間づくりのために参加している、という発言が多かった。子育てについての悩みを分かち合ったり、相談したりする仲間、それも少し先輩が求められているといえる。しかし実際には、育児サークルや子育てひろばには当事者が集まっている。少し子どもに手がかからなくなったら、サークルに行かなくなるのが一般的である。そこで、現状では「ナナメ関係」が自然に発生する素地には乏しいといってよい。

第 3 節 個別インタビュー :「脱コントロール」という方法

1. 方法

グループインタビューで得られた知見をふまえ、とくに、多くの子どもを生み育てることを肯定的にとらえている女性に対して、個別インタビューを実施した。対象は、

3 人以上の子どもを生み育てている女性 2 名であり、1 名はグループインタビュー実施時に、個別インタビューへの協力について承諾いただいた。もう 1 名は、「肯定的な子育て観で複数の子どもを育てている女性で、個別インタビューに応じてくれる人」として、雪だるま式にインフォーマントを得た。具体的な質問項目は、自らの妊娠経験や出産経験、子育て経験についての意識や考えについて、対象者に自由に語ってもらう半構造化インタビューをおこなった。インタビュー実施日や場所、対象者の属性は、表 6 に示すとおりである。なお、記録は対象者の同意を得て IC レコーダに録音し、後日テキストデータの作成をおこなった。作成したテキストデータは対象者に確認を依頼し、引用の許可を得た。

表 6 個別インタビュー調査対象者一覧

対象者	年齢	訪問日	訪問先	子ども数	職業	その他
Aさん	30代	7月3日	自宅	インタビュー時点で4人目を妊娠中	専業主婦	子育てサークルに参加
Bさん	30代	9月19日	自宅	4人	自宅でアロマテラピー	子育てサークルを主催

2. 結果と考察

(1)「出産」のリアリティはいかにして構築されるか：A さんの場合

ア 産む人にとっての「出産のリアリティ」ーA さんの語りから

A さんは、兵庫県下に夫と子ども 3 人で住む女性である。第一子から、女児・男児・男児の 3 人の母である。インタビュー実施時点で第 4 子を妊娠中であった。第 2 子までは、病院の産婦人科で出産し、第 3 子は助産所で出産した。なお、後述のとおり、第 4 子も助産所での出産を選択している。

妊娠体験については、結婚前、一般論としては

> 結婚すれば（筆者注：子どもは）できるんだろうなとか、本当に単純に結婚して子どもがいないっていうことが考えられなかった。結婚すればもう子どもがいて当たり前

と、漠然と考えていた。一方で、自分自身については

> 結構不妊の話を聞いていたから、もしできなかったらどうしよう、わたしが一生子どもができない体だったらどうしようというのも、すごく悩んだんですよ。

ということである。しかし実際には、希望するタイミングで妊娠できた。第 1 子と第 2 子との妊娠の間隔も、避妊とタイミング法の併用で希望どおりだったという。第 2 子までは里帰り出産をしたため、両親がすすめる総合病院での出産となった。そのときは、「どの病院、施設で」「どんなお産を」といった選択権が、自分にあるとは思わなかったという。

第 3 子の出産のときには、上の子どもたちの学校の都合等があり、里帰りするわけにはいかない事情があった。そこで、「自分で選択する」お産となったのである。助産

所での出産を選択することになったのは、助産所での出産を経験した友人から話を聞いて関心をもったことによる。助産所は通常の分娩しか扱うことができないので、それまでの 2 回の出産が、安産だったこともちろん、決断の要因となっている。

病院での出産について、A さんは「可もなく不可もなく」と評価し、次のように語っている。

> 病院は非常に安全をうたってますよね。特にわたしなんかは総合病院で産んだんで、何かあっても小児科が併設してありますと。ですので、万が一何かあっても大丈夫ですよと。

> いわゆる陣痛促進剤を打たされて、ある意味、ちょっと機械的に…（中略）…「はい、陣痛がきました。はい、じゃあ次は 201 号室の A さん。はい、次この人」というか、本当に機械的に、「はい、産まれました。はい、おしまい。次です」みたいなね。だから、出産って本当にこんなもんね、と。すごい感動みたいなものもなかったし。

比較して、助産所での出産はまったく違っていた、という。

> 助産所で産むと、何ていうのか、もう一回ここでお産を経験したい…わたしはまさにそれだったんですよね。3 人産んで、子どもが欲しいというよりもここでお産がしたい、ここの生活をもう一回味わいたいっていう気持ちにすごいなったんですよね。

A さんに「もう一度ここで出産したい」と思わせた助産所での体験とは、具体的にどのようなものなのだろうか。まず、妊婦健診についてであるが、A さんは、病院の産科診療について、病気ではないはずなのに、診察台や患者用の椅子などの装置をとおして、医師－患者関係になってしまう、と指摘している。

> 病気じゃないわけですよね。でも、どうしてもあのスタイル（筆者注：いすに座って先生に相対する）。…（中略）…そういう状況ってどうしても、何か「患者です」みたいな気持ちになってしまうんです。

医師－患者関係は、背後に存在しているはずの「家族」から、個人を分断する。病院での対象はあくまでも「患者である妊婦本人」であり、その付き添いとしての子どもは対象とはなっていない。産科医療の枠組み内では、「どこそこに住んでいる、誰それのお母さんの A さん」という「個人」ではなく、「患者」という、いわば「個体ないし母体」として扱われる。

> 上の子を連れていくっていうのは、やっぱり病院は大変。走り回ったり何だっていうのが。…（中略）…やっぱり「なに子どもを走らせているの」みたいにキッと、それこそ外科の人もおれば、気分が悪くて来ている内科の人もいるわけでしょう、総合病院なら。

だからそうね、やっぱり上の子を連れていくっていうのも大変、病院は。

…（前略）病院だと本当にもう何百人の中の一人のお産、そうなるのもしようがないんだろうけど、「あなた、だれでしたっけ」みたいな…（後略）

比較して、助産所の健診では、子どものいる母という役割を持った個人であることが保たれる。

助産所だと暗黙のルールじゃないけど、次の人がその子（筆者注：お母さんの健診についてきた上の子）を見るみたいな雰囲気が。だからわたしも、じゃあ見てもらったからわたしが待っている間は相手してあげるよ、じゃないけど、何となくそんな雰囲気が。待合室におもちゃとかがあるから、何となくそんな雰囲気になるんですよね。自分もそうやって、自分が診察してもらったときは見てもらったし、それが何か、見ていていてもみんな普通にやっている。本当に何となくです。そう書いてあるわけでもなく。（筆者注：病院だとそんな雰囲気には）ならない。

助産所だと「A 市に住んでるAさんで、上にだれだれちゃんがいたよね」みたいなところまでもうわかってくれている…（中略）…家族ぐるみみたいなその暖かい雰囲気がわたしは好き

また、助産所での健診は、正常か異常かをチェックする意味だけでなく、出産を「イベント」として位置づけることで、健診に「イベントの準備」としての意味を与える。

病院っていうのは…（中略）…選べるとしても立ち会いますか、立ち会いませんかぐらいの、選択肢なんだけど、（筆者注：助産所だと）紙をもらって、ここに自分がしたいお産のことを全部書いてください、と。自分がどういう気持ちなのかというのを全部書いて、その中でそれを実現させていきましょう、と。例えば、わたしはすごく怖がりですとか、ほめてほしいとかね…（中略）…とにかく自分がこんなイメージで産みたいな、例えば音楽、このテープを聞きながら産みたいなとか、友だちを呼んで一緒に産みたいなとか、自分がこう産みたいということを。例えば病院なんかでは…（中略）…考える必要がなかった。

…（前略）何月何日イベント開催、じゃあ、どうするか予定を決めていくみたいな、本当そんな感じなんですよね。

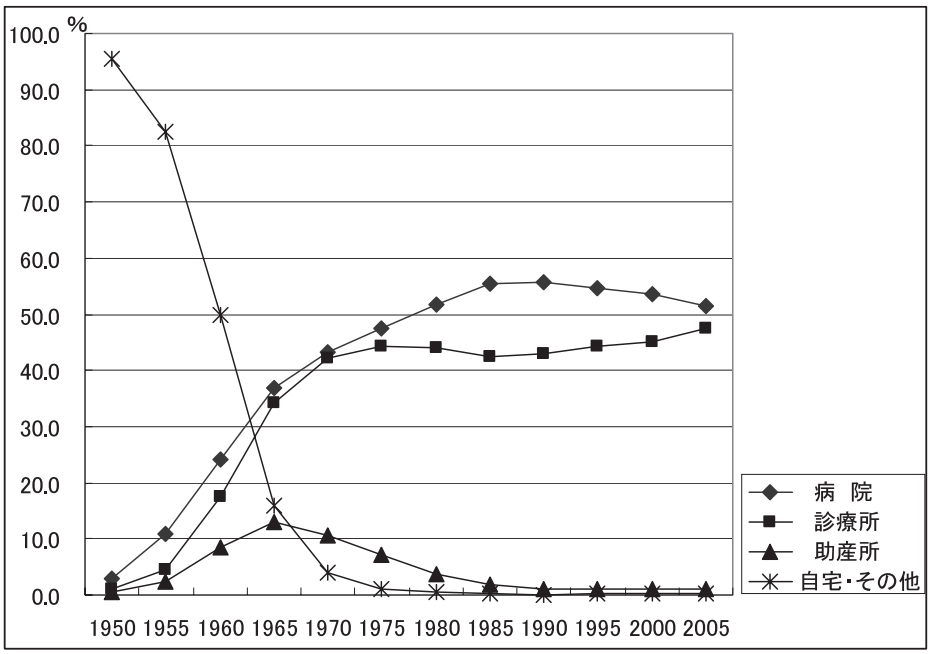
病院では、出産のスタイルは医師の決定事項であり、妊婦にとっては、身体的な条件によって決定される所与の前提である。しかし、助産所では、ひとつひとつ丁寧に希望が尋ねられる。産む人が意思決定できるかたちになっているのである。このことによって、産む人にとっての「出産のリアリティ」が形成されていく。

例えば…（中略）…もう本当に細かい話、「暗くしたいですか」とか、もうそこまで聞いてくれる。…（中略）…だから本当に助産師さんといろいろつくり上げていく、一つのほんとイベントですよね。健診のたびにどんな出産にしようかみたいな感じで…（中略）…何か本当に旅行に行くみたいですよね。…（中略）…それこそ本当一生にそんなに何回もあることじゃないから、いろいろなことを考えて組み立てて、はい、当日ですっていうのは、すごく自分でもわかりやすい。

病院では初めてのお産というのは、テレビの印象しかないんですよね。ウーン、ウーンって苦しんでいる…（後略）

日本では、出産の場所で、病院、診療所などの施設が自宅等を上回ったのは 1960 年である。図 11 に、出産の場所の変化の内訳を示す。この時期以降、出産は医学的管理の対象としての意味を強め、家族や友人知人の出産シーンに立ち会うということは、ほとんどなくなったと考えられる。このために、産む性である女性たちも、子どもを産むということは具体的にどのようなことなのか、「出産のリアリティ」を持つことが難しくなっているのではないか。

助産所での出産は一般に、病院と異なって家庭的な雰囲気の中でおこなわれるとされるが、2005 年時点で、助産所での出産は、全出産の 1%を占めるにすぎない。



出所：「人口動態統計」より作図

図 11 出産の場所の変化

「出産のリアリティ」を持ちえなくなっていることで、妊娠・出産は大変なこと、子育てはつらいもの、というマイナスのイメージばかりが先行している可能性もある。助産所における出産準備と出産を、「出産のリアリティ」を得るための方法のひとつとしてとらえることが可能だと考えられる。

イ 家族にとっての「出産のリアリティ」ー健診場面から

先に語られたような助産所での健診について、実際に同席をさせてもらった。フィールドワークは 2007 年 9 月 22 日に、A さんの定期健診に「助産所に興味のある友人」として同行するかたちでおこなわれた。以下、フィールドノートから様子を詳述する。

訪問した B 市内の助産所は、閑静な住宅街の中に溶け込んでいた。一見、ごく普通の住宅に見える、3 階建てのたてものである。玄関先には犬小屋があり、中に大きな犬が眠っている。助産所で飼われている犬のようだ。

木製の大きな玄関ドアを開け、靴を脱いで入ると、左手の部屋が待合室である。待合室といっても、木製のベンチがひとつ窓際に置かれているだけで、あとは座卓と座布団がおいてある普通の部屋である。たくさんのおもちゃと絵本や妊娠出産に関する図書が並べてある。児童館のようでもあり、家庭の居間のようでもある。A さんの子どもたち、長男の P くんと次男の Q くんは、喜んではしゃいでいる。この部屋は、妊婦だけを対象としてつくられているのではなく、妊婦に同行するであろう子どもをも対象としてつくられている。

まず、1 階で体重測定と尿検査をする。その後、診察室がふさがっていたため 2 階の入院室に案内される。助産師は「お友だちも、おにいちゃんたちも一緒にどうぞ」と言ってくれる。P くん Q くんは、待合室からおもちゃを選んで持ってあがった。

入院室はこぢんまりとした部屋で、足のついていない低いベッドと電話が置いてある。扉は引き戸で、のれんがかかっている。水回りが共同になっている下宿の一部屋のような雰囲気でもある。ことさらに生活感があるわけではないが、ベッドは医療用のものではなく、一般の家庭で使われているようなものである。シーツも、「真っ白」ではなく、落ち着いた柄のものであり、機能性が追求されているわけではないことがみてとれる。

健診を担当した助産師は実習生を連れて、竹のかごに入った血圧計と巻き尺、心音を聞くための小型の機械を持ってきた。A さんは、ベッドに横たわる。どうですか？との問いかけに A さんは、少しお腹が張っているように思う、と答える。助産師は大潮だからかな…と受けながら、腹部に触れてみたりする。その間、P くんと Q くんは大はしゃぎで部屋中を走り回っている。前回の健診は、病院でおこなわれており、その結果が助産所に届いていた。助産師は表を見せながら、A さんに結果の説明をおこなう。ほとんど問題はなかったが、1 点だけ注意を要するところがあり、説明がなされる。心配はないと思うけれど、念のため、産婦人科で再度検査を受けませんか、と提案がなされ、A さんがそうします、と応えたため、後ほど紹介状を作成することになった。

走り回っている P くん Q くんに、A さんは「こら！！走り回らない！！静かにして！！」と注意する。助産師は、これに呼応するように、彼らに話しかける。「おにいちゃんたち、赤ちゃんに話しかけてくれてる？きこえてるんだよ…」。腹部を少し押すように触り、あっここがおしりですね…ここが足の裏…と示してみせる。赤ちゃんの人形を持ってきて A さんのお腹の上に置き、今、ちょうどこんな姿勢でお母さんのお腹の中にいるよ…わかる？さわってみて…と、子どもたちを巻きこんでいく。

続いて「心音を聞いてみましょう」と言い、小型のゲーム機くらいの大きさの機械をA さんの腹部にあてる。羊水の流れる音にまじって、はっきりと心音が聞き取れる。PくんもQくんも、じっときいている。「赤ちゃんの心臓の音だよ…元気ですね。おにいちゃんのも聞いてみようか」と、P くんの服をめくって機械を胸にあてる。全員で、しずまりかえって心音を聞く。PくんもQくんも、神妙な様子である。

ついで、実習生に触診や計測をさせたいのですがよろしいでしょうか、とAさんに許可を求め、Aさんが快諾すると、胸に写真入りの学生証をつけた実習生が腹部を触診し、胴囲、子宮長、血圧を丁寧に計測する。その間、助産師はAさんに「他に気になることはありますか」と尋ねる。確かにお腹が張っていること、身体に負担がかかっていると思われることを説明する。そのときに使うことばは、断定や指示ではなく、あくまで提案である。「少し無理されているかもしれないね…」「少し動いたあとは、横になれたらいいかな」「無理しないでといっても、元気なおにいちゃんたちがいたら難しいでしょうから、できるだけ、ね」と、3人の子育てをしている母親としての具体的な生活を念頭においたアドバイスであった。さらにOくん、Pくんにも、お願いをする。「おにいちゃんたちね、お母さんは今、赤ちゃんのために少しゆっくりしたほうがいいの。できるだけ、お母さんを休ませてあげて、お手伝いをしてあげてね」。

目の前で紹介状を作成し、「こんなふうに書いてますからね」と、Aさんに確認してもらったうえで、封をする。またOくんPくんに話しかけ、「前のときは、おにいちゃんたちは赤ちゃんが生まれてくるのに立ち会ってくれたんだっけ？間に合わなかったんだったっけ。じゃあ今回は、ぜひ赤ちゃんに会ってあげられるといいね」。

健診が終わり、1階の待合室に戻ると、生まれて間もない赤ちゃんを抱いた男性がいて、その場で赤ちゃんの体重測定がおこなわれていた。Q くんは赤ちゃんをのぞきこみに行く。そこにいた人やスタッフで、お茶を飲みながらゆっくりとした雑談となる。いろいろなかたちの湯飲みが置いてあって、自由にポットからお茶を飲むことができる。

雑談の内容は、ことさらに出産に関係することではなく、A さんが子どもたちの髪を自分で切っている（バリカンを使っている）ことや、それがとても上手であること、虫歯予防についてなどであった。この雰囲気の中で次回の健診予約もとり、終了となった。助産所到着から終了までの所要時間は、45分間であった。

当初想像していたよりも、施設としてのしつらえは「家庭的」だった。まるで個人の家のような（実際に、3階部分は施設管理者の自宅であるらしい）、病院の産科を想像しているとまったくその想像を裏切られる。これと対比するように、助産師のしごと内容は、当初想像していたよりも「医療的」「専門職的」だった。検査結果の説明や、今後の方針の提案は医療関係者そのものであったし、竹のかごに入ってはいたが、医療機器は医療機器だった。しかし、確かにAさんが言うように、病院で医師－患者という、ある種固定化された役割関係とは異なって、かなり対称的な関係がつくられていると感じた。それは、紹介状の内容を本人が確認できることにも表されている。

以上の様子から、助産所の機能について、次の2点が明らかとなる。

まず第一に、助産所は、産む性としての女性を家族から切り離すのではなく、むし

ろ出産とその準備期間を「家族にとってのライフイベント」として位置づける。病院では関係者として扱われにくい「きょうだいたち」は、助産所では重要な家族員として扱われる。A さんによると、A さん自身はこどもたちが走り回ることから、できれば連れて来たくない、少しはゆっくりと健診を受けたいと思うこともある、という。しかし、助産所のスタッフからは「今日はおにいちゃんたちどうしたの？連れてきたらいいのに」と声をかけてもらうという。これは、受診記録に、同行者を記入する欄があって、きょうだいや夫が何回来たかがわかるようになっているためであるという。例えば、長男は毎回来てはいること、しかし、なんとなく不安そうに見えること、などが書いてあって、健診当日の声かけにつながっているとのことである。

実際の健診場面でも、助産師がたくみにきょうだいたちを巻きこんでいく様子が確認できた。自分たちのあずかり知らぬところで物事が進んでいるのではなく、母親の変化を様々なかたちで確認することが可能となっているのである。

第二に、妊娠期間を必然的に当事者として過ごす妊婦以外の家族に対して、もうすぐ赤ちゃんが自分の家族に加わるのだ、という「出産のリアリティ」を与える。健診に同行した家族は、赤ちゃんの心音を聞くことで、確かにそこに新しい生命が存在していることを知る。さらに、自分の心音と比較することで、新しい生命が自分と共通点を持ったいのちであることを知る。助産師が示す人形や、「触ってごらん」という促しによって、お母さんのお腹の中にいる赤ちゃんがどのような姿勢でいるのかを知る。

このようにして、直接出産するわけではない家族員も、「ある日突然家族の一員として現れる侵略者」としてではなく、体験に裏打ちされたイメージと期待をもって、新しい生命を迎えることが可能となる。このとき、新しい生命は、準備期間をともに過ごした結果となる。このようなとらえ方は、現在の産科医療の枠組みの中では実現が困難なことである。

もちろん、全員が助産所を選択できるわけではない。助産所で扱うことのできる出産は単胎の正常分娩のみであり、産科医療との密接な連携が必要不可欠である。しかし、産科医療の地域偏在が指摘され、産科医不足が社会問題となりつつある昨今では、産科医療の枠組みのなかでの「院内助産所」の設置がすすむなど、助産師への期待が高まっている。産科医療を補完するものとしての助産という位置づけは、消極的に過ぎる。補完としての助産を越えて、社会とつながりを持った個人としての出産が可能な助産、あるいは、産む当事者だけでなく、家族にも「出産のリアリティ」を与えることのできる助産という、積極的な位置づけを検討する余地は大きいと考えられる。

ウ 家族のライフイベントとしての出産ー出産場面から

ここでは、A さんの第 4 子出産場面について、フィールドノートから詳述する。フィールドワークおよびフィールドノート作成は、少子・家庭政策研究所の主任研究員である二階堂裕子が担当した。なおフィールドワークは 2007 年 11 月 2 日に、「出産立ち会いを希望した友人」としておこなわれた。

午前 9 時頃、A さんの陣痛が始まる。近所に住む友人の車で助産所へ向かう。友人 B

さんがAさんの夫、妹（隣接の市に在住）、友人らに連絡する。午前10時7分、Aさんから「陣痛来ました」メールが届く。二階堂が助産所へ向かう。

午前11時頃、助産所に到着すると、2階へ案内される。浴槽を備えた小さな部屋で、Aさんは陣痛の苦しみの真っ最中だった。助産婦さんがかわるがわる部屋に入ってきて、Aさんに「もう少しですよ」と声をかけながら、てきぱきと出産の準備を進める。「暑い！」というAさんをうちわであおぎながら、「がんばれ～！」と励ます。午前11時32分、Aさんが破水する。陣痛がますます強くなり、Aさんの苦しみもさらに増したもよう。一番ベテランの助産婦さんが、「もう少しお尻を下げて」と優しくアドバイスする。

午前11時38分、赤ちゃんの頭が見えてきたかと思うと、あっという間に全身が出てきた。助産婦さん4人、Bさんと一緒に拍手する。元気な女の赤ちゃんの誕生。赤ちゃんのへその緒をめくって、女の子であることを確かめたAさんが、「よかったぁ～。Oが喜ぶわ～」。Aさんは出産まで、赤ちゃんの性別をきいていなかった。出産後、自分の目で女の子であることを確かめたのだった。長女のOちゃんは、女の子の誕生を切望していて、「今度、また男の子が生まれたら、家出する！」と宣言していたそうである。

Aさんが、「へその緒を切るのは、少し待ってもらえませんか」と、助産婦さんに声をかける。以前から、Oちゃんがへその緒を切ることになっていたそうで、もう少し、Oちゃんの到着を待つことになった。

しばらく経った午前11時50分頃、Aさんの次男であるQくんを保育園に迎えに行ったAさんの友人Cさんが到着。Qくんは、ニコニコしながらAさんと赤ちゃんが待つ部屋へ向かうが、部屋に入る直前で急に尻込みする。いざ、赤ちゃんと対面するとなると、恥ずかしくなったのか、こわくなったのか…。続いて、Aさんの妹が、Oちゃんと長男のPくんを連れて到着。二人とも、赤ちゃんの誕生に大喜び。特にOちゃんは、女の子誕生と聞き、嬉しくてたまらない様子。Aさんの実家の両親（R県S市在住）に、「赤ちゃんが産まれたよ」と、喜びの報告をする。

最後に、Aさんの夫が到着。隣接県での仕事の途中で連絡を受け、急遽、助産所へ駆けつけたとのこと。出産には間に合わなかったものの、無事に産まれたことがわかって、一安心した様子。明日から東京出張に出かける予定なので、「今日、産まれてよかった」と嬉しそう。

Aさんの夫が、すでに考えてあった名前を発表すると、子どもたちは「いいね～！アサちゃん（仮名）と呼ぼう！」と賛同した。

BさんとCさんは、「もうこれで、赤ちゃん（誕生）はおしまいだね～」「早くまた、Aさんと遊びたい～！」と口々に話す。普段から、何かにつけてAさんと助け合っており、他にも親しい友人仲間が、「いざ」というときに「動員」されるそうである。

たまたま今日から、Aさんの実母がR県S市から手伝いのためにやってくることになっていた。Aさんは、これから赤ちゃんとともに1週間の入院生活に入るが、Oちゃんたちの世話はお母さんが担当する。

出産に立ち会うのも、助産所に入るのも今回が初めてであったが、病院での出産よりもリラックスできるような気がした。分娩台ではなく、畳の上で自由な姿勢をとり（水中出産も可能）、家族や友人に囲まれてみんなで赤ちゃんの誕生を迎えることができるた

めだろうか。建物が一般の住宅のようなつくりになっており、友人宅で出産に臨んでいるように感じられる。ここなら、出産後の入院生活も、リラックスできそうだ。「病院側に管理された出産」とは程遠い印象を受けた。

それから、A さんのもつ「社会関係」が、4 人目の出産を支えていると感じた。A さんの夫の実家は、A さんたちの自宅のすぐ裏にあるが、A さん自身の実家は R 県 S 市である。夫の母親には、日常的に協力してもらう機会が多い。しかし、しごとをもっているので、全面的に頼るというわけにもいかない。前回の出産はたまたま夜だったから容易に立ち会ってもらえたが、今回はしごとの時間中だったので、立ち会ってもらえなかった。また、出産などの場合は自分の母親に頼りたくなるものでもある。A さんは、性質の異なる親族資源を持っていると考えられる。実母の居住地が遠方であるため、いざというときは近くに住む妹の精神的実質的支援も貴重となっている。

また、A さんの友人関係も注目に値する。A さんは日頃から、子どもの幼稚園や学校、育児サークルなどを通じて、親密な相互扶助関係を数多く築き上げている。今回の出産の際にも、友人らが子どもたちを学校や保育園へ迎えに行くなど、重要な役割を担っていた。A さん夫婦が 4 人目の妊娠・出産を決意するにあたって、これらの豊富な「社会資源」の存在が与えた影響は小さくないように思われる。

以上のことから、A さんの出産と子育てが、大変に開放的なものであることがわかる。健診場面から家族や友人知人が関わることができ、出産場面にも、家族や希望する人が立ち会うことができる。子どもたちは、出産の瞬間にこそ間に合わなかったものの、出産に至るまでのプロセスに参加することができた。このような方法を通じて、妊娠や出産は、妊産婦個人のものではなく、すぐれて社会的なことがらとして存在しうる。

A さんのような出産のスタイルが可能となるためには、日頃から A さんがつくりあげてきた互恵的な社会関係の豊かさに加えて、A さんの希望をできるだけ叶えようという基本姿勢をもっているスタッフのもとでの出産が不可欠である。助産所とは、このような出産の可能性を持っている機関である。

A さんにとっての助産所は、母体にとってだけでなく、家族にとっても、「出産のリアリティ」を構築するのに必要な装置だったと考えられる。あわせて、家族全員にとっての重要なライフイベントとして、出産を位置づける役割を果たしたといえる。

A さんは、出産後に、きょうだいたちに対して助産師が「いのちの教育」をすることを重要視している。具体的には、胎盤やへその緒をさわらせ、どういうふうに赤ちゃんが入っていたのか、破水でどこが破れたのか、どうやって産まれてきたのか等、きちんと説明をしてくれるという。A さんは、この体験は小学生くらいの子どもなら、先行する出産シーンとともに、はっきりと記憶されるだろうし、いのちの誕生について頭だけでなく体験として「知っている」ということは、将来にわたって子どもに与える影響がきわめて大きい、と考えているそうだ。

以上のように、一見いいことずくめのように思える助産所での出産であるが、もちろん、全員が選択できる出産方法なのではない。医学的にリスクの高い出産は、助産

所では対応できない。しかし、病院での出産と同様の選択肢として、一般に助産所が考えられているわけでもない。既述のように助産所での出産は、出産全体の 1%程度にとどまっている。医学的に、助産所では対応できない出産が多く存在することも事実だが、それ以上に「なんとなく大きい病院のほうが安心」といった、当事者や周囲の人たちの意向の存在も大きい[5]。

産科医療の地域偏在や産科医の減少により、産科医療は現在、貴重な資源となっている。中村正雄他（2006）は、産科領域における医療事故の予防をおこなうため、産科医療の機能分化と緊急母胎搬送システムの確立を提案している。具体的には、ハイリスク分娩の集約、医学的な妊娠リスク評価の普及である。

単に「なんとなく」専門家に任せることでリスクを回避することを考えるだけではなく、出産ライフスタイルのひとつとして、リスクを含めて検討し、出産場所や方法を選択する、役割やリスクを引き受ける、という選好がもっとあってよいのではないだろうか。そのために、正しい知識や様々な出産ライフスタイルの存在とその特徴についての啓発や広報等、行政の果たす役割は大きいと考える。

最後に、A さんの、4 人目の出産を終えてからの「4 人きょうだい」の子育てについての感想[6]を紹介する。

> 「4 人きょうだい」になって、子どもたちは昔ながらの「上の子が下の子の面倒をみる」という関係を実行しているなぁ、と感じます。親が「どうしても手が回らない」という状況は、子どもなりに考えて行動するものです。子どもの数が少なくてきょうだいが少ないか、あるいはいないと、親が全てやってしまったり、「この子には無理だろう」と最初から決めつけてしまったり、子どもたちの「考え」を実行するチャンスがないです。
>
> 「4」という偶数も、まとまりがあってよいと思っています。「2」も偶数だけど、子ども同士 1 対 1 だから広がりがない。とくにうちの場合、女の子 2，男の子 2 だから、とてもいい。
>
> 知らない人にいっぱい話しかけてもらえるし（「お子さん 4 人？すごいわ～、がんばってね～」とか）、色々な人と交流するチャンスをもらえたことは、本当にとてもしあわせ。となりに誰が住んでいるかわからないような近所づきあいの多い今、これだけ周りの人にやさしい言葉をかけてもらえることはすごいと思う。子どもを通じての友だちも、4 倍になります。忙しいけど、これはお金では買えないものです。

A さんにとって、妊娠期間や出産とは、自分だけの体験ではない。子どもたちにとっての、新しい家族を迎える準備の教育であり、新しいいのちを育む教育である。同時に、A さんにとっての子育てとは、自分だけ、家族だけで完結するものではない。

---

[5] 前節のグループインタビューにおいても、出産場所についての選択意向を尋ねたところ、どの病院を選ぶかという選択肢はあっても、病院か助産所かという選択肢は頭になかったという発言が多かった。「出産は病院ですることが当然だと思っていた」「親の世代の価値観が大病院指向だったので、病院しか考えられなかった」といった具合である。

[6] 2008 年 3 月に、筆者が 4 人きょうだいの子育てについて尋ねたことへの、文章による A さんの回答。

A さんももちろん、子育てについて楽しいとのみ感じているわけではない。しかし、ここにあるのは「孤独な子育て」では決してない。すでにいる友人や知人との関係を強化する一方で新しいつながりを得る、きわめて社会的なものとして「子育て」は認識されている。このような認識のもとでの子育てが、多くの子どもを肯定的に生み育てることを可能にしているのではないだろうか。

（2）社会的な存在としての家族：Bさんの場合

ア 家族という社会

B さんは現在、大阪府下に夫と子ども 4 人で住む女性である。第一子から、男児・女児・女児・男児の 4 人の母である。育児サークルを主催し、自宅で託児つきのアロマテラピーをおこなっている。

B さん自身、4 人きょうだいで育ったため、子ども数は「3 人くらいは」と自然に思っていたという。結果的に 4 人の子どもを持つことになったが、3 人目を妊娠するときに、次のように考えたのだという。

> 3 人いることによって、もめ事も起こるけど、それがまた一つの家庭、社会になって、いろんなことを学べるん違うかなってね。2 人やったら分けあいせんでもこう…ね、うまくぱーんて割れるところが､3 人いると奇数になる｡ものすごい割り切られへんものがね、あると。ここでちょっとあんたが我慢せなあかんねんって、我慢を覚えるかなとわたしは思ってて。3 人をつくると。そういう我慢はやっぱり覚えさせたいと思ってたから、わたしは。それをあえて社会に出る前に家庭の中で覚えられたらと思ってて。だから 3 人目もう絶対つくる気でおったからね。

B さんは、第 2 子と第 3 子の年齢差がさほど開かないようにと考えて、第 3 子妊娠の計画を立てた。そう考えるようになったのは、B さん自身の経験によるところが大きい。B さんは、4 人きょうだいの末子で、すぐ上のきょうだいとは、7 歳離れている。一番上のきょうだいとは 16 歳の年齢差があって、きょうだいでけんかをするという経験は持たなかったのだという。

> …（前略）全然けんかとかがなくって、すごい打たれ弱い自分になってたからね。だから傷つきやすいというんかな…（後略）。

B さんが、このような自己像をもつきっかけとなったのは、子育て体験だった。B さんのつわりはかなりつらいもので、ものを食べたら嘔吐してしまうという生活が 10 ヶ月にわたって続いたという。さらに、第一子出産後 3 ヶ月で、夫のしごとの都合により、関西から横浜市に転居する。誰ひとり知りあいのいない、見知らぬ土地での、初めての子育てが始まった。

> …（前略）全然寝えへん子で、夜中 10 回以上ね、おっぱいで起きるような子やったん

ですよ。ママしかあかんくて、だれに預けても「ママ、ママ」って泣くしね、長男は。だからもうしんどくて、あまり寝えへんからもうノイローゼみたいにもなってきたから、生後７カ月ぐらいでおっぱいはもう断乳したりとかね、もう無理やと思ってね。何かこう当たり散らす自分が嫌になってきて、その子に、寝えへんことに対して。

子育ての物理的な困難に加えて、近隣との距離のとりかたにも悩んでいた。

何か自分も第一子で、近所の人とどうつき合っていったらええかというのも全くわからなくって。言われるがままに断られへん自分もやっぱりあったりとかね。近所の人に誘われたら、断りたいけど、断ってしまったら、もう誘ってもらわれへんのんと違うかな、みたいな感じで、こう断りきられへん自分がやっぱりいてて…（後略）。

…（前略）仲よくなろうと思ってやってたけど、何かこうね、笑っててもー（筆者注：心の中では）しょうもないと思う自分があったり…（後略）。

第一子が１歳を過ぎるころから、物理的な困難は急速に解消され（よく眠るようになったため）、Ｂさんは第二子を妊娠する。すると今度は、つわりのつらさに加えて、社会関係でのトラブルが持ち上がってきた。

一人同じマンションにすごい仲のいい人ができて、もう毎日、それこそお昼御飯には毎日、その人のところに通ってね、同じマンションの隣の隣やったからね、もうほんまに毎日、毎日いうぐらい会ってて。でも結局その人とも、一人の人が原因でめっちゃ根も葉もないこと言われて、仲壊されて。その後、そんなこと言ってないのにってね、弁明したけど、もうすごい「わたしは無理、つき合うの」とか言われて。

このような体験をとおしてＢさんは、自分が「打たれ弱い」と考えるようになったという。

…（前略）人の目が気になったりとか、わたし何と言われてるんやろうとか、あの輪の中に入りたいけど、入れてもらえないのはなんでやろうとか。すごい気にし過ぎてしまって、人の目線とか、人の行動が。それでまたしんどくなる。…（中略）…いい子、と思われたいから無理して何かしちゃうとかね。

気にしいやっていうのは、やっぱり独身のときはあんまり思わへんかったね。…（中略）…人づきあいの難しさというのは、結婚してから気づいたね。…（中略）…自分とはまた違うところで子どもが何かやらかしたり何かするからね、そのへんの気配りというか、気疲れみたいなんがやっぱりすごいあった。

自身の「打たれ弱さ」への対応としてＢさんは、ふたつのことを実践している。ひ

とつは、家族をひとつの社会であると見なして、子ども数の多いことを多様性の確保ととらえることである。そしてもうひとつは、育児サークルの立ち上げと、自宅でのアロマテラピーサロン開業により、子育て中の家族と外の社会を架橋することである。

ここではまず、家族という社会について考えたい。B さんは、家族員が多く、多様であることから起こってくるもめごとについて、避けるのではなくて、人間形成に積極的に活用しようという姿勢を持っている。

> できることなら、その家族やきょうだいとかでもまれて、きついこと言われたらこれだけ傷つくんやでとか、そういうことをやっぱり学んでほしいというのをすごい思ったから。だからやっぱり自分の家庭の中で、そういう社会ができた方が子どもも楽かな、みたいな。人に傷つくことを言われても、家でもめっちゃ言われてるし、そんなに気にせえへんわみたいな、よっぽどお姉ちゃんの方がきついわみたいなね、打たれ強い子になるん違うか。子どもはやっぱり多い方が、ましてや年は近い方が余計もめるん違うかと。

B さんの考えでは、家族と社会は連続している。家族のなかで「自分たちだけ」の、外の社会と切り離された世界をつくっているのではない。社会を見越したふるまいを、自分自身の行動も含めて、家族の中で求めている。この姿勢は、以下のような発言にもあらわれている。

> （前略）自分のことばっかりじゃなくて、自分の家のことばっかりじゃなくて…（中略）…、まず親が変わらへんことには、親がそういう背中をみせていけへんことには。…（中略）…やっぱり何ぼ親が口で言うてても、親の背中を見て子どもは育つから…（後略）。

> （前略）自分のことばかり考えているうちは、やっぱりあかんね。やっぱりこう大きな目ですべてのことを見ていくようにならへんかったら、子どももそんな子になって、余計もっと回らなくなる（筆者注：物事がうまくいかなくなる）と思うし。

以上のことは、社会関係上のさまざまなリスクを避けるのではなくて、むしろ積極的にリスクを引き受けて意味づけていくという、体験に基づく実践である。B さんにとっての子育ては、自分の手の中で子どもをコントロールしていくというよりは、不確定な要素を自ら引き寄せ、そのうえで手を離していくことであり、社会に対して開かれたものになっている。この考えの延長線上に、育児サークルとアロマテラピーサロンの立ち上げがある。

イ 家族と社会を架橋する

B さんは「自分のことだけでなく」という思いから、自宅を開放して育児サークルを主催し、アロマテラピーのサロンを開業する。ここでは、B さんがそのような行動

をとるに至ったきっかけや、仲間づくりのありようについて考察する。

既述のように、B さんには妊娠中のつわりや、子育てに苦しんでいた時期があった。関西から横浜に転居してしまったので、両親に手伝いに来てもらうことも難しく、つわりのときには「ひたすら家で、倒れてた（B さん）」。そのとき、支えてくれたのは、育児サークルをとおして知り合った友人だったという。

> …（前略）すごい孤独になって、毎日、ひとりぼっちになって。でも何かね、上の子のためにも下の子のためにも、やっぱり何か友だちが欲しいよなとかって…（中略）…あまりにも孤独やったから…（後略）。

> 横浜市ってすごい公園、わたしの地域は特に多くて、近所に第 1 公園、第 2 公園、第 3 公園とかいって、第 5 公園ぐらいまであったん違うかな、すごいあんねんね、家の裏にも大きい公園があって、ちょっとまた車で 1 分ほど下ったら、遊具がある公園があってとか、地域に児童館みたいなんがあって、そこへ行ったら、ちゃんと車がとめれて、子ども用の小さい本棚の図書館があって、その横は、じゅうたん敷きの遊べるおもちゃが置いてあって、遊べるスペースがある地域公民館みたいなんがあって。そこで毎月、1 回か 2 回、サークルを開いてはる人がいてはって、個人的にね。このサークルに行ってるよという人たちに、偶然、公園で遊んでいるときに、声かけてもらってんね。「歳一緒違います？子どもさん」って、2 人ぐらいの子がね、女の子やって、「ああ一緒です」とか言ってしゃべってたら、「あのうちらサークルで、みんな知り合いになってて」とか言って、何かよかったらサークルの方に来ませんかとか言ってくれて。その 1 人の子が、みんな同じ年やよとか言って、（筆者注：第一子は男児だが、第二子は）女の子やしね、女の子ばっかりのお母さんやったから。そこへ誘われて行くようになったときに、やっぱりすごい仲よくなった子が 6、7 人いてるんやけど、すごいいい人たちばっかりで。嫌なことがあった後から余計やったかもしれへんけど、すごい気があって、あっさりつき合えたというかな、いろんな話できたというんかな。だから、すごいその子らに助けてもらった感じやね。

サークルの友だちたちには、子育ての悩みや分からないことを相談することができた。また、話を聞くだけでなく、実際によその子どものふるまいや成長を見ることで、納得できるところもある。

> 同じような年の子と話して、自分とこもこう思ってたけど、そこもそうなんやって聞いたら、すごいちょっとしたことも楽になることっていっぱいあるから、育児していて。
>
> 自分とこ、よう泣くと思ってたけど、この子もよう泣くねんやとか、自分とこも暴力的やなと思ったけど、ここもめっちゃたたく子やんとか、かむのん嫌やなと思ったら、この時期ってかむねんやとかね、この時期っていやいやばっかりいう時期なんやとかね、人を見て初めて納得できるというかね。

みんなは1人目さん（筆者注：ひとりめの子育て中、の意）で、わたしが2人目さんで。わたしが2人目で先輩やってんけど、その子らは1人目さんやっんやけど、それでも結構（筆者注：女児の子育ての）情報とか知っているから、わたしもこんなんやったよとか言って。保健師さんも、ほんますごいかかわっているんよね。

Bさんは、サークル活動を支える行政の役割も大きいと考えている。横浜市のつぎに転居した、関東の別の都市や、現在住んでいる関西の都市では、横浜市に比較すると行政のサポートが少ないという。

…（前略）もともとそういう横浜市って、何か行政がしっかりしているのかして、地域で公民館でサークルをしてくれたりとか、そういう活動がすごい活発な地域で…（後略）。

呼んだら（筆者注：保健師が）来てくれたと思うのね、要請とかしたら。
（筆者注：サークルは主催者が）個人的にやってて、お菓子持ってくる人はこの人でとかいうのが当番で決まってて、あとは自由に遊ばせようみたいな感じで。ござ敷いてみんなで遊ばせてるだけやったけど、結構なんかそういうサークルとか、催しやすい場が、簡単にそうやって借りれて。地域にそういうきれいなサロンみたいな感じのところがあるから、そこにみんなが行ってるみたいな…（後略）。

この体験は、子育てサークルを、子どもにとっての仲間づくりという以上に、養育者を孤独にさせない、情報交換の場、仲間づくりの場としてBさんに印象づけたと考えられる。この体験に加えてBさんは、親しくしていた友人の急死を体験する。
Bさんにとって、親友が幼い3人の子どもを残して突然いなくなってしまったことは、非常にインパクトのあるできごとだった。友人の死後2ヶ月で、Bさんの生活は激変する。

3番目の子が1歳4カ月のときに、仲いい幼なじみの親友がね、3番目の子どもを生んで半年で、うつ病から心筋梗塞で突然死してるから。わあすごいことを聞いたって、衝撃を受けて、すごいショックで。その年の、その子死んだ2カ月後かな、もう行き始めてるからね、アロマテラピーのスクールに。

何か学校と育児サークルを同時にやってんねん。育児サークルも、もうつくろうと思ってんやんか。その友だちがすごい明るくて、すごいまめな人で、お友だちともすごい上手につき合うし、前向きやし、くよくよせえへんし。いつも一緒にいるのは、その幼なじみの子やってんけど、（筆者注：Bさん側が）励まされてるぐらいの立場の子やったのに、その3番目の子を生んで半年で亡くなったのを知って、自分の中で「ああ、うつ病って、だれでもなる病気なんや」ってすごい思ってんね。
顔で「大丈夫」とか言って笑っててても、実は心の奥底にすごいしんどいものをみんな

持ってて、それを出されへんのん違うか、今の人って、すごい思って。だから、そういうふうな自分が出せる場というのをつくっていけへんことには、どんどんどんどん、こういうしんどい子が出てくるん違うかな、せめて自分の身近な中からは、もうこれ以上、うつ病になる人は出てほしくないという思いはすごいあって。１歳児の育児サークルとアロマテラピーの教室に同時に通い始めたみたいなね。

B さんにとって育児サークルは、養育者の仲間づくりの場であるだけでなく、息抜きの場でもある。

集まって、（筆者注：子どもの様子を）見せてもらったりとかした方が、やっぱりめっちゃわかりやすいというかね。

それから、やっぱりお母さんの息抜きの場があった方がいいのと違うかなというのが、一番大きかったしね。だからちょっと自分がね、お茶飲みに行きたいと思っても、すごいもめたことがあったでしょう、一番初めのときにね（筆者注：実母と同居していたときの話）。お茶飲みに行くことって、ずうずうしかったりするかなとかね、すごい気をつかうようになってしまって。用事がないとすごい出かけにくいなみたいなんがあって、お茶のみに行きたいよとかさ、言うても、毎回かいと思われるんと違うかとかね。気軽にお茶を飲みに行きにくくなっている自分があったから、要するにサークルとかつくってしまったら、これね、毎週金曜日ここやでとか言われたら、行きやすいじゃないですか。

子どもにとっては、家族以外の人とも関係をつくる場である。その関係は、とおりいっぺんのものではなく、ときに本音も入っている。

…（前略）いろんな人にもまれて、いろんな人に意見言ってもらえる場を、やっぱりつくっていった方が、子どももね、家族以外の人から言ってもらうのは、すごいいいことやし。だからわたしがやっているサークルにしても、みんなが意見してくれるから。本音で言ってきてくれるから。子どもなんか特にやけどね。わたしの子どもとか、わたしに対してもはっきり意見いうてきはるから、打たれ強くはなるやんね…（後略）。

サークル活動の機能のうち、「息抜き」の部分をより単純化し、個別化したのが、アロマテラピーサロンである。子ども連れで来ても、託児があるので、ゆっくりとした時間を過ごすことができる。契約の時間が終わったあと、B さんとゆっくりお茶を飲みながら話し込むことも多いという。お金のために開業をしているわけではなく、むしろ持ち出していると B さんはいう。このような方法をとっている背景には、「せめて自分の身近な中からは、もうこれ以上」という、B さんの思いがあると考えられる。

前節でみたグループインタビューの結果とあわせて、子連れで外出することについての心理的・物理的コストの高さがうかがえる。まして、用事があって出かけるのではなくて「気晴らしに」外出することの心理的コストはかなり高いことが推察される。

乳幼児を養育している、とくに母親たちに向けられる「母親なら、一生懸命、自己犠牲して当然」といったまなざしは、実際以上に養育者たちに内面化されているのかもしれない。

B さんの育児サークルは、以上のように「1 歳児を持つ親のための」として、子育てを仲間同士で助け合うために始められた。それから 5、6 年経つ現在は、「親同士のつながりの形成」に、主たる目的を変更して、活動を続けている。活動を続けている理由について、B さんは次のように語っている。

> …（前略）主婦で働いてなくて、専業主婦している子とかね、結構幼稚園上がってしまって、小学校になったら、つき合いがみんな薄くなるねんね、みんな働きだすから。結構会う場がなくなったという子がすごい多くて。小学校にかわったら、みんなばらばらになるし。幼稚園の時は、密に会えてたけどみたいな。それで何か会う場を設けておこうと思って、サークルをずっと続けてる感じやってん。だから昼御飯をみんなでつくって食べたりとか、それこそクリスマス会も大人のためにしてるし、今週は晩御飯をつくってみんなで家で持ちよって食べようよみたいなことも…（後略）。

子育てのためのサークル活動は、中心になって活動している世代が就園就学すると、自然消滅をするか、世代交代に悩まされることがある。B さんの視点は、「専業主婦」という、自宅中心で生活を組み立てている人たちに向けられている。活動の目的を変えて、サークルを存続させたのは、自分も含めた、自宅中心で生活している人たちの社会関係を保とうという試みである。現在の子育てサークルは、乳幼児期の子育てを卒業した先輩ママたちをいかに巻きこめるか、という課題に直面しており、B さんのとっている方法は、この視点から参考になる点が多いと考えられる。

以上のように、B さんは子育て体験をとおして得た、自分自身に対する気づき―打たれ弱さ―から、社会と子ども、社会と家族との関係を重視するようになった。関係を重視するがゆえに発生するもめごとや、コスト、労力は、B さんにとっては回避すべきものではなく、積極的に引き受けていくべきものとしてとらえられているのである。

（3）まとめ

4 人の子どもを育てているふたりの女性に対するインタビューから、共通点として次のことが挙げられる。すなわち、ふたりとも、出産や子どもを育てることを、自分だけのものだと考えてはいない。A さんは、家族はもちろん親族や、友人たちと出産の体験を共有する。B さんは、子どもの社会関係を、母親である自分とのものだけでなく、きょうだい同士や家族以外の人たちとの関係へと拡張することを目指している。とくに、上のきょうだいたちに与える、妊娠や出産、子育ての教育的な効果について重要だと考えていることが、共通項として挙げられる。

> うちの子どもらにとって、大きくなったところから、一から子育てを見せることによ

って、自分らはこんなふうにして産まれてきたんやなというのをまた勉強をさせる、いいきっかけになるん違うかなというのもあって。子どもにも相談したし。「お母さん子どもをつくろうかな。もう１人と思ってるけど、みんなどう思う？１人でももうそんなんつくられたら時間なくなるし、大変やわと思うんやったら、つくらへんから」っていうのを何回も聞いて、主人にも聞いて。もしもつくったときには、何やかんやとやっぱりパパの手も借りなあかんし、パパの今までの自由な時間もやっぱりなくなっちゃうから、それでも手伝いしてもらえますかみたいなことをやっぱり聞いて。パパはいいよと言って、すごい子どもらにもいいことやと思うし、R ちゃんも変わるきっかけになる（筆者注：3 番目の子は、少しわがままだという文脈）かもしれへんなと言うて。子どもらも欲しいとみんなが言ってくれてね、３番目の子も欲しいと言ってくれたから、じゃあつくろうかなという条件がそろって、もう、すぐつくってできた感じですよね、４番目の子が。（B さん）

第二の共通点は、コントロールすることを重視せずに、予測のつかない状況や、コントロールがそもそも不能であることを「見守る」姿勢をもっていることである。言い換えると、何らかのリスクを引き受けることを、主体的に選択している。A さんは、産科医療での妊娠経過の管理と分娩が安心だと考えられ、90%以上選択される現在に、あえて助産所での出産を選択した。既述のように、助産所での出産を選択したことで、A さんと A さんの家族をはじめとする周囲の人たちは、新しい生命の誕生のリアリティを持ちえた。これは、A さんが助産所スタッフとの話し合いをとおして、多くの選択を重ねてきた結果である。

B さんは、家族員が増えることや、サークルのメンバー等家族以外の人たちとのかかわりが増えることによって、子どもたちが体験するであろうもめごとや、我慢しなければならないこと等をあえて選び取っている。このことによって、B さんがそうであったように、自分の弱さを知り、そのことによって他者の痛みを想像することができるようになる。

もちろん、しなくてもよい苦労はしないに越したことはないのかもしれない。しかし、リスクを回避するばかりではなく、ときにあえて選び取ることで見えてくる世界があることを、ここでわたしたちは学ぶことができるのではないだろうか。

第４節 先行する事例としての多胎育児ー現状と課題

女性が生涯に出産すると考えられる子ども数である合計特殊出生率が 2 を下回り、理想の子ども数も 3 人には届かない[7]現代日本にあって、4 人の子どもを生み育てることを選択している女性について、その妊娠から子育てまでを「脱コントロール」「リスクの引き受け」という鍵語を用いて、ここまで考察してきた。4 人の子育てについての語りは、妊娠や出産、子育ての積極的な意味づけを探るのにきわめて示唆的であった。しかし、ここには当然「子どもはひとりずつ産まれてくる」という暗黙の前提が

[7] 第 13 回出生動向基本調査（http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou13/point13.asp）

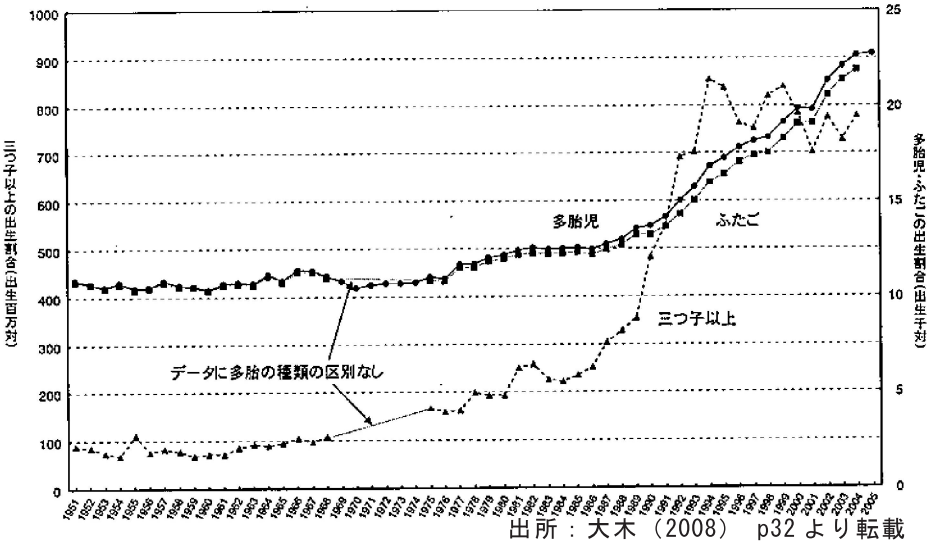
存在した。

この節では、この前提とは異なって、「2 人以上の子どもを同時に育てる」ことを余儀なくされる、多胎育児について若干の考察をおこなう。多胎児は、その数こそ少ないものの、母体が妊娠期間から医学的に高リスクな状況におかれることにはじまって、単胎児の妊娠や出産、育児に比較して、過酷な状況が起こりがちである。このため、多胎育児においては、単胎育児と比較して、育児の阻害要因となりうる物理的・社会的事象に敏感である。たとえば、多胎児の被虐待リスクは、単胎児よりもかなり高いといわれている。つまり、多胎育児について考察することは、単に特殊事例について考察することではなく、一般的な育児課題を先取りすることとなりうる。ここに、多胎育児について検討することの意義のひとつがある。

検討は、既存資料の解読に加えて、多胎育児サークル出席者へのグループインタビューおよび、多胎育児サポートに関わる当事者や専門職集団への参与観察をつうじて得た知見を用いておこなう。

1. 多胎出産の動向

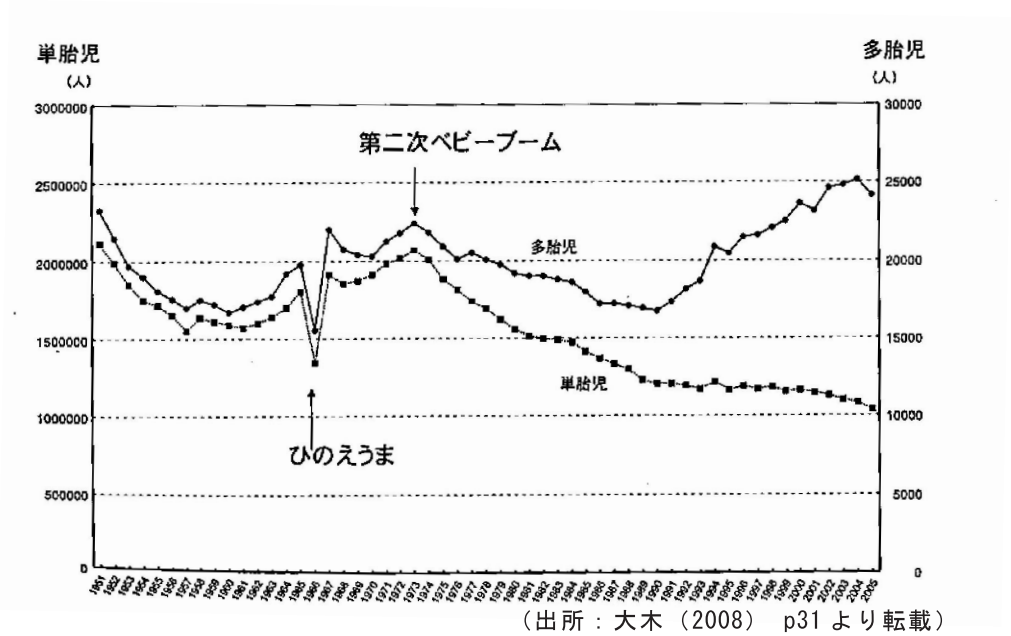
まず、多胎出産の疫学的動向を確認しよう。大木秀一（2008）によれば、現在の日本における多胎出産は、出生 1000 対 23 である（図 12)。つまり、多胎出産のうちほとんどがふたごであることから、母親の 100 人にひとりは多胎児の母親であると考えられる。



出所：大木（2008） p32 より転載

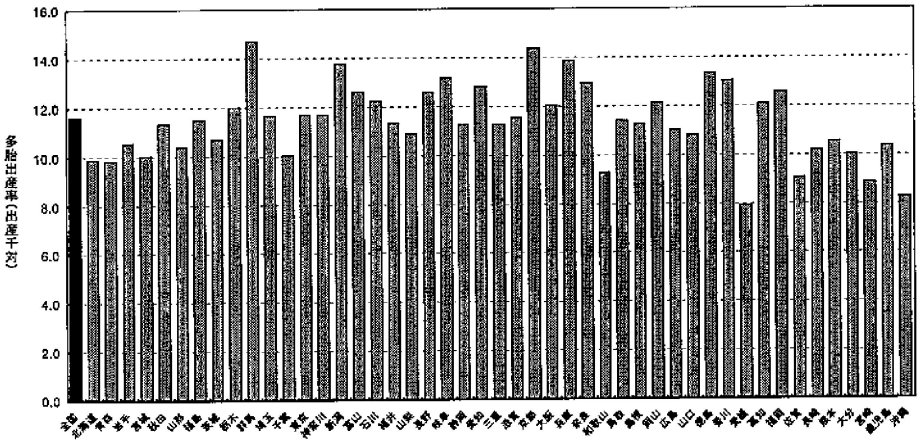
図 12 多胎児の出生割合（出生 1000 対の人数）

出生を、単胎児と多胎児とに区別して表現したものが図 13 である。これをみると、単胎児の出生数は減少しているが、多胎児の出生数は増加していることがわかる。また、自然の多胎児の出生率は、一卵性児の出生率は世界的にほぼ一定であるが、二卵性児については人種による差異がみられ、黄色人種は多胎妊娠の出現率の最も低い人種である（大木 2008)。同様に、日本国内の地域格差も存在している（図 14)。そのなかで、兵庫県は全国的に多胎出生率が高く、2005 年は 13.8‰で、新潟県と並んで全国第 3 位の値である。最近 10 年間の多胎出生率の推移を図 15 に示す。



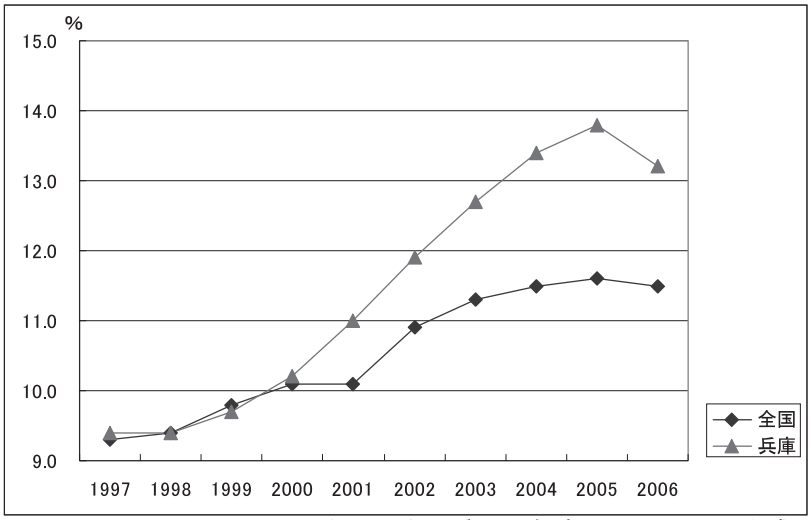
（出所：大木（2008） p31 より転載）

図 13 単胎出生児と多胎出生児の実数の推移



（出所：大木（2008） p31 より転載）

図 14 都道府県別多胎出生率（出産 1000 対の分娩数，2005 年）



（出所：大木秀一の報告（2007）より作成）

図 15 多胎出生率の推移（全国と兵庫県の比較）

2. 多胎育児をめぐる状況：インタビューおよび参与観察から

つぎに、多胎育児の具体的な状況について検討する。今回の調査では、グループインタビューを6箇所でおこなったが、多胎育児グループがほかのグループと明らかに異なっているのは、その子ども数の多さである。多胎児なのだから単純にふたごだと考えても、養育者ひとりにつき子ども数は2倍になるため、当然といえば当然である。しかし、その当然であることが、グループ運営上の制約となりがちであることも事実である。同じようにサークル活動をしようとするとき、おもちゃ数や会場の広さ、見守り保育が必要な子ども数が異なってくるからである。

グループインタビューでは、単胎児のサークルと比較して、子育ての具体的な困難や、行政に対する具体的な要望も多く語られた。子育ての具体的な困難については、次のようなことが挙げられていた。

①お下がりがきかず、なんでも一度に複数個必要になるため、経済的負担が大きい
②物品は同時に必要になるが、個別のケア（食べる・寝るなど）はタイミングがずれる
③「ふたり（以上）を同時ケア」には技術が必要であり、負担に対する遠慮もあって、簡単に親族等の人的資源を使いづらい
④③の結果として、母子の密着が高くなり、母親以外の人のケアについて、母子ともに不安を持ってしまう
⑤④の結果、「誰にも代わってもらえない」という孤独感が強くなる
⑥外出にかかる物理的コストと心理的コストが高い
⑦外出の物理的コストには、荷物が多い、ケアが大変といった多胎児側の要因に加えて、ふたごベビーカーで通れない幅の歩道がある、エレベーターに乗れないといった、社会側の要因もある
⑧外出の心理的コストには、⑦のコストに対応できないのではないかという不安感や、「同じ配慮が個別のタイミングで必要となる」多胎児へひとりで対応するのは難しいというものがある

外出が極端に制限されることは、次の発言からも明らかである。わたしたちが通常外出をするときに、道順がわかっていながら「目的地にたどり着けないかもしれない」と不安に思うことが果たしてあるだろうか。

> 2人乗りだと、心配だから。あそこ（筆者注：目的地の途中、の意）まで行って、もしその先行けなかったらっていうちゅうちょがあって。行ったことがあるところしか行けなかったりする。

行政に対する要望では、上記の多胎児がとおれるような「きょうだい割引」だけでなく「多胎児割引」等をもうけるなどの、多胎育児の特徴に対する理解を深めてほしいという意見が多く聞かれた。

また、次のような切実な発言もあった。

（筆者注：子どもと）離れたら全然（筆者注：違う）。見てくれる人がおったら、全然違うだろうし。安らぎの場がほしい。

「誰かみてくれる人がいれば」という願いは現在、主として当事者同士の支え合いというかたちで実現されていることがほとんどである。多胎育児サークルもそのひとつの形態であるといえる。

サークルでは、子どもを遊ばせながら養育者同士がくつろいで話をすることができる。場合によっては、見守り保育のボランティアが入ることもある。こうなると、養育者はいっそう安心して会話を楽しむことができる。

兵庫県には「ひろばアドバイザー」制度があり、「まちの子育てひろば」に登録している団体は、「ひろばで遊びの指導をしたり、お母さんたちが抱える心配や悩み事の相談[8]」に応じるアドバイザーの派遣を要請することができる。ふだんは、仲間同士で「うちも同じ」と励まし合ったり悩みを相談したりしている多胎育児サークルだが、アドバイザー派遣を受けることで、「子育ての先輩」と話をすることができる。

2008 年 2 月に、阪神北地域の多胎育児サークルへ、ひろばアドバイザーが来たときの様子を、フィールドノートから紹介する。なお、ひろばアドバイザーは、長年多胎育児サークルのスタッフを経験してきた、多胎児の母親である。

あいにくの雨模様だったが、会場には 10 組を越える多胎児とその養育者が集まった。会場は、財団法人が運営しているボランティア団体の活動拠点の一室である。サークルリーダーからメンバーへ、アドバイザーへの質問や相談を事前に準備するようにとの連絡がいっていたようで、紙が集められてアドバイザーに渡された。じゅうたん敷きの会場にシートを敷いたうえに車座になって、アドバイザーはひとつひとつ紙を読み上げながら、悩みや質問にこたえていく。この間、養育者と離れられる子どもは、おもちゃを置いたシートの上で、見守りボランティアと一緒に遊んでいる。どうしても「お母さん」のそばがいい子どもは、おもちゃを持ってきて養育者にくっついたり膝の上にのっていたりする。眠っている子どももいる。

質問の内容は多岐にわたっており、多胎育児の具体的な技術のことから、子どもからみた祖父母世代や親族との接し方などが含まれていた。アドバイザーは、ひとつの質問を読み上げるごとに、「同じようなことを感じている人はいらっしゃいますか？」「似たようなことで、こんなことはどうですか？」と全体に対して呼びかけていた。この作業をすることで、個人だけの課題であったものが、集団内で共有され、集団のものに変質する。このことによって、集団内に共感が生まれる。この作業の後アドバイザーは、全体に対して、ときに個人に対する語りかけも交えながら回答をしていた。

回答は、「わたしもそうでした。心配ですよね」「そんなふうに思っておられるお母さ

[8] http://web.pref.hyogo.jp/hw09/st03#h04

ん、多いんですよね」という共感から始まり、一般的な話に、アドバイザーがこれまで蓄積してきた専門家の知見を交えながら、提案をするかたちでおこなわれていた。メンバーたちは大きく頷きながらきいており、ときに追加の質問も出ていた。

なかでも、多胎児の養育者にとって「平等」という概念がとても重要視されていることがわかった。具体的には「一方の子ばかりが寄ってくるが、それでいいのか」「親戚から、『男の子だから』と特別扱いされるのが気になる（異性ペア）」「どちらが『おにいちゃん』か、決めなければならないのか」等である。これらは、年齢にはっきりと違いのある単胎児では考慮しなくてよい問題を含んでいる。しかし同時に、単胎の育児では見過ごされている問題提起をも含んでいると考えられる。規範により役割が固定される状況ではなくなっている現代、多胎育児関係者が懸命に取り組んでいる「平等」や「個の尊重」について、単胎の育児にも応用できることがあるのではないかと考える。

3. 先行する育児支援の方法

多胎児の増加や、当事者の働きかけにより、多胎育児に対する支援の必要性の社会的認知が高まってきている。多胎育児に関する全国的な支援組織「多胎育児サポートネットワーク」は、地域の特性に応じた多胎育児支援をおこなうための 2 本柱を「地域多胎ネット[9]構築による、当事者の組織化支援」および、「妊娠中からの、多胎育児経験者によるアウトリーチによる個別相談支援（＝ピアサポート）」とし（多胎育児サポートネットワーク 2008）、2007 年度に、ピアサポート活動をモデル事業としておこなっている。

兵庫県でも、当事者団体同士をつなぐ中間支援組織「ひょうご多胎ネット」が、全国で 2 番目の地域多胎ネットとして 2005 年に発足し、モデル事業は「ひょうご多胎ネット」をふくんだ 3 つの地域で展開された。

以下、「多胎育児支援地域ネットワーク構築事業第 2 年次報告書」より、ピアサポートを受けた人たちの感想を紹介し、若干の考察をおこなう。これは、2007 年度にモデル事業としておこなわれたピアサポートの訪問時に、対象者へ自記式調査票を留置して、後日郵送を依頼したものである。回答は、34 人から得られたと報告されている。以下に、感想意見の自由記述欄に書かれた内容を分類して、代表的なものを紹介する[10]。

（1）「先輩」は身近なモデルを提供する

「頑張っているのは私だけじゃないし、その先にはいっぱい楽しいこともあるんだという心の支えができた」

「双子ならではの悩みを分かってもらえたのが嬉しかった」

「自分ができる範囲で楽しんで育児をすればよいと思わせてもらいました」

---

[9] 多胎児の妊娠・出産・育児を、市民グループ・行政・医療・研究者などが連携して支援するための、ゆるやかなネットワーク（多胎育児サポートネットワーク 2008）

[10] 引用は、多胎育児サポートネットワーク（2008）87-89 による。

「具体的な経験を聞かせてもらえてとても参考になりました」
「(筆者注：訪問者は) 三つ子の子育てを楽しくされている様子がすごくわかり」
「気持ちが一緒な分、分かってもらえ、お話ができたので嬉しかった」
「実際に多胎を育てた経験者ということで、話に説得力があり、素直な気持ちで話が聞けた」
「実体験からの意見が聞けてとても参考になりました」
「同じ多胎ママの目線からのアドバイスや体験談は、単胎の人からは聞けません」
「実態多胎のお子さんを育児された方の生の声を聞くことができてとても参考になった。ありきたりの育児書よりもすごく参考になる。それに同じ悩みも共有できて、自分だけ大変ではない、みなさんいろいろ乗り越えていらっしゃったんだと感じた」

単胎児のサークルでも聞かれたことであるが、ここでも、専門家ではない、また世代の違う育児体験者ではない「少し先輩の」助言者が求められている。とくに、多胎育児に関しては、単胎児の妊娠・出産・育児よりも医学的にリスク高い場合がほとんどで、専門家とのかかわりが、単胎児に比較して多い場合がある。このときに、「こんな細かいことを保健師さんには聞きづらい」内容を、ピアサポーターには話せる、といった内容もあり、「使い分け」が有効であることが示唆される。もちろん、サポートを受ける対象者からみれば使い分けであるが、サポートをする側からみれば、このことは専門職と当事者との連携の必要性を意味している。

(2) 外出のコストと訪問のありがたさ

「日中 1 人での双子育児。家にひきこもり、2 人を連れての外出する勇気もない中」
「普段はなかなか子どもたちを連れて出かけることも難しく、他の双子ママさんたちの話を聞く機会もないので、こちらの都合に合わせて家に来てもらい、子どもたちをみながら話も聞けて本当に助かりました」
「小さい双子をつれてすぐにはサークルなど、先輩ママのいるサークルに行くのはとても無理。」
「多胎サークルに入会するのはとても勇気が必要で抵抗があるがこのピアサポート事業なら訪問型なので第一段階のステップとして利用しやすく」

単胎育児においても、現代の子育てが孤独なものとなりがちで、とくに母親に負担が集中しがちであること、その場合に仲間づくりが有効であることが指摘されてきた。
多胎育児では、とくに外出のコストが高いことから、その孤独感はいっそう強い。訪問型でおこなわれるピアサポート事業は、この孤独感を緩和し、社会と養育者をつなぐ橋渡し役となり、情報を手渡すことができるものである。その意義は大きく、また単胎育児にも広く応用できるものであるといえよう。

（3）こんにちはふたご（みつご）ちゃん

厚生労働省は、2007 年度に「生後 4 ヶ月までの全戸訪問（こんにちは赤ちゃん）事業」を創設した。これは、「生後 4 ヶ月までの乳児のいるすべての過程を訪問し、様々な不安や悩みを聞き、子育て支援に関する情報提供等を行うとともに、母子の心身の状況や養育環境等の把握及び助言を行い、支援が必要な家庭に対し適切なサービス提供につなげる。このようにして、乳児のいる家庭の孤立化を防ぎ、乳児の健全な育成環境の確保を図る[11]」ことを目的として創設された事業であり、実施主体は市町村である。訪問スタッフには、子育ての経験者を広く登用することが想定されており、この意味では、多胎育児でおこなわれ始めた「ピアサポート事業」も、同様の枠組みのものであるといえる。

ピアサポート事業では、支援者側の訓練の定式化をおこなったり、介入が専門職からの紹介であることも多いことから、相談後の専門職へのフィードバック経験も少なくないなど、相談を受けた後のフォローアップ等に、一定の蓄積があると考えられる。今後は、「こんにちは赤ちゃん事業」においては、全戸訪問後のフォローアップや、高リスク対象者への対応等で多胎育児のピアサポート活動から学ぶことができるだろう。このことによって、「特殊事例」として扱いがちな多胎育児について、「育児一般の課題に対して繊細な対象」として位置づけることが可能となり、多胎育児への周囲の理解を求めていくことができる。

第 5 節 本章のまとめ

本章では、妊娠・出産・育児について、実際に経験している女性たちへのインタビュー調査と、サークル活動や出産場面等でのフィールドワークを通じて、定性的に把握することを試みた。結果、以下のことが明らかとなった。

①妊娠・出産の経験の意味づけは、個人と子ども数によって違いがある
②「妊娠すること」は、案外コントロールできない
③子育てについては、両義的な感情を抱いている
④育児サークルに参加するのは自分のためでもある
⑤夫との関係は、子どもができて変化した
⑥子育てについての相談は「ナナメ関係」にしたいと思っている
⑦身近なモデルの存在が、子育てを気楽にする
⑧子育てを楽しむひとつの方法は「コントロールしないこと」である
⑨子連れでの外出は、物理的・心理的コストが高い。多胎児であればより高くなる

子育ての孤独やつらさももちろんきかれたが、それ以上に、イキイキとした女性たちの発言も多くみられた。たとえば、お腹の中で赤ちゃんが動くのがわかるとすごくうれしい、であったり、子どもを育てるのは確かに自分のペースを乱されるけど、いろんな人から話しかけてもらえてうれしい、といった発言である。その規定要因には、

[11] http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/kosodate12/dl/12-01.pdf

「子育ての先輩を具体例とするような『社会』とつながることにどのような価値を置くか」「妊娠から始まる子育て過程を、いかに周囲に開放するか」といったことがあると考えられる。次章ではこの結果をふまえて、質問紙調査による分析をおこなうこととする。

第 4 章 妊娠や出産、子育てに関する女性の意識に関する定量的把握

第 1 節 目的と調査仮説

グループインタビューならびに、個別インタビュー調査の結果をふまえ、実際に妊娠、出産を経験し、現在子育て中である女性の「楽しみを中心とする、妊娠・出産・育児に関する意識（以下、「子育て意識」と記す)」を定量的に把握し、その規定要因を明らかにすることを目的として、質問紙調査をおこなった。

前章までの議論をふまえて、図 16 に示すとおり調査仮説を立てた。

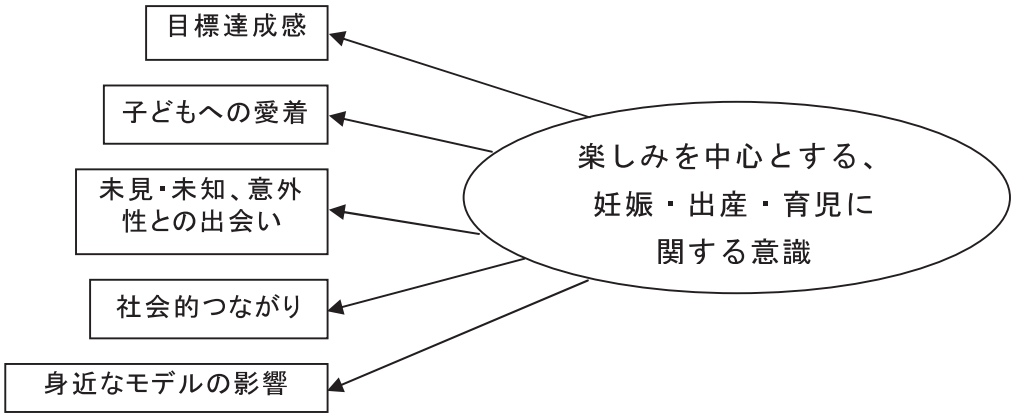


図 16 楽しみを中心とする、妊娠・出産・育児に関する意識の構成要素の仮説

第 2 節 方法

1. 対象

兵庫県に住む、幼児の母親を調査対象とした。具体的な対象者の選定は、以下のとおりである。

まず「幼児」については、1 歳半健診の対象となる児とした。これは、前章で述べた定性的調査が、主として就園前の子どもを持つ母親への調査であったことと、妊娠体験や出産体験がまだそれほど過去のことになっておらず、乳児の子育てが一段落した母親の意識を知ることを目的としたためである。2006 年の兵庫県の出生数は 48,771 人だったことから、調査対象者はおよそ 50,000 人程度と考えてよい。

50,000 人全員に調査協力を依頼するのは現実的でないため、対象者の絞り込みをおこなった。その方法は、次のとおりである。実査への協力を依頼するのは、2007 年 11 月から 12 月に 1 歳半健診の対象となる児の母親とした。この段階で対象となる幼児は、48,771 人を 12 ヶ月で除して、およそ 4,000 人程度となる。その母親をほぼ同数と見なすと、具体的な調査対象者数も 4,000 人程度となる。

次に、調査地点の選定をおこなった。第 2 章で明らかとなった女性の就労パターンの 4 地域に含まれるそれぞれの市町に対して、クラスタごとに出生数の多い順で調査

への協力を依頼した。協力が得られた市町で、1 歳半健診の受付時に、調査票を手渡しし、記入後に返信用封筒を利用した、回答者個人からの郵送を依頼した。配布と回収に関する情報を、表 7 に示す。

表 7 配布数と有効回収数（率）

クラスタ名	配布数	有効回収数	回収率
クラスタ1	1713	430	25.10%
クラスタ2	61	41	67.21%
クラスタ3	199	53	26.63%
クラスタ4	27	7	25.93%
不明	−	1	−
合計	2000	532	26.60%

2. 用具

従属変数に、今回の調査で作成した「子育て意識」を用いた。下位概念は、「子どもへの愛着」「変化への適応性」「自分の成長」「つながりの増加」「コントロール願望（不全）感」「身近なモデルの影響」である。また、家族システムの機能性を「きずな（家族成員が互いに対して持つ情緒的結合）」と「かじとり（状況に応じて権力構造等を変化させる能力）」で測る尺度である FACES-KGⅣ-16（version2）[12]を用いた。

3. 手続き

分析の手順は、次のとおりである。まず、第 3 章で既述のグループインタビュー調査結果および、育児ストレスや育児負担感尺度に関する先行研究をふまえ、問 2 および、問 3 の計 34 項目を作成した。次に、問 2 および、問 3 の 34 項目を用いて因子分析をおこなった。結果、子育ての楽しさを中心とする女性の意識について、6 因子が抽出された。それぞれの因子について、因子得点を用いて得点化した。この得点を従属変数とし、社会とのかかわりに関する項目を中心として、平均値の比較をおこなった。さらに、第 2 章で明らかとなった都市型／地方型のライフスタイル地域について、その特性を視覚的に理解できるようにした。

[12] このモデルでは、きずな・かじとりともに中庸であるとき、家族システムはもっとも健康的に昨日すると考えられている。きずなについては、「バラバラ」「サラリ」「ピッタリ」「ベッタリ」の 4 タイプが考えられ、「サラリ」「ピッタリ」のときに、最もよく機能すると考えられる。同様にかじとりについては、「融通なし」「キッチリ」「柔軟」「てんやわんや」の 4 タイプに分類され、このうち「キッチリ」「柔軟」のときに、最もよく機能すると考えられる。きずなとかじとりの双方が中庸であるとき、その家族システムは「バランス型」に分類される。どちらか一方が極端である場合は「中間型」両方が極端な場合は「極端型」となる。
詳細は、同志社大学社会学部立木茂雄研究室
（http://tatsuki-lab.doshisha.ac.jp/~statsuki/FACESKG/FACESindex.html）および、立木茂雄, 1999,『家族システムの理論的・実証的研究』川島書店．を参照のこと。

第 3 節 結果と考察

1. 属性

回答者の基本属性は、以下のとおりである。

回答者の年代は、25 歳未満が 18 人で 3.4%、25 歳以上 30 歳未満が 113 人で 21.2%、30 歳以上 35 歳未満がもっとも多く、259 人で 48.7%と半数近くを占めた。35 歳以上 40 歳未満は 116 人で 21.8%、40 歳以上が 25 人で 4.7%、無回答が 1 人で 0.2%であった（図 17）。

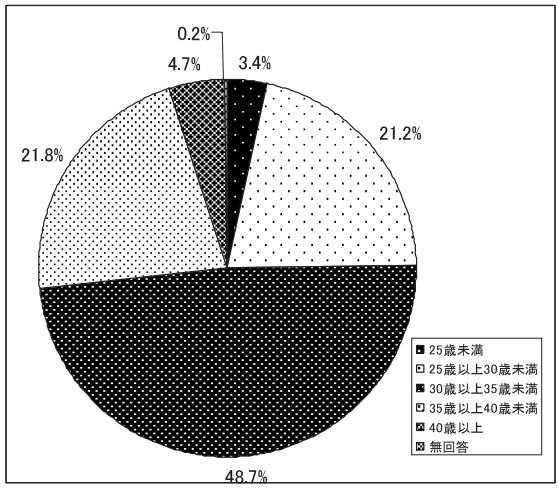


図 17 回答者の年代

回答者の最終学歴（中退を含む）は、中学校が 6 人で 1.1%、高等学校が 132 人で 24.8%、短期大学・専門学校がもっとも多く、245 人で 46.1%を占める。大学は 136 人で 25.6%、大学院は 12 人で 2.3%、その他が 1 人で 0.2%であった（図 18）。

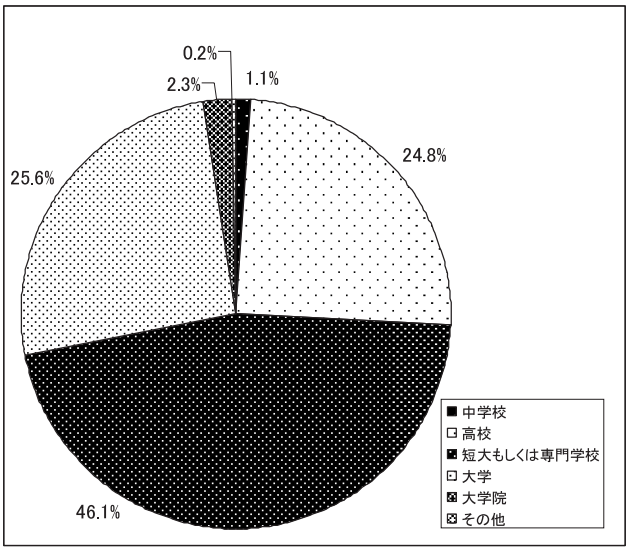


図 18 回答者の学歴

回答者の現在の職業（以下現職）は、経営者、役員が 6 人で 1.1%、常時雇用されている一般従業者が 72 人で 13.5%、臨時雇用・パート・アルバイトが 50 人で 9.4%、自営業主、自由業者は 15 人で 2.8%、家族従業者は 12 人で 2.3%、内職は 3 人で 0.6%、専業主婦は最も多く、361 人で 67.9%と、7 割弱を占める（図 19）。

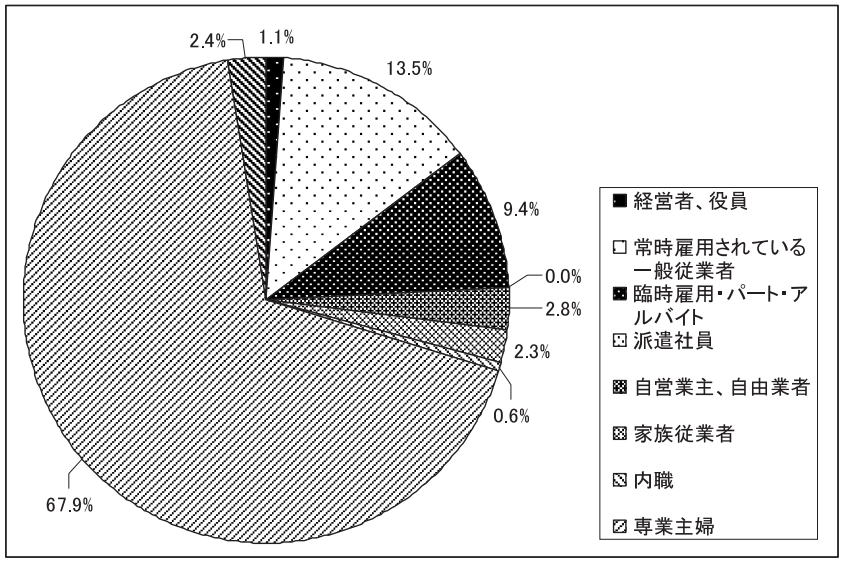


図 19 回答者の現職

前の職業（以下、前職）と現職との職業移動については、図 20 に示すとおりである。妊娠を機に、およそ半数の人が退職を経験している。職業を持つ女性の大部分を占める常時雇用と臨時雇用等では、今回の調査によると、構成比はほぼ変わらない。

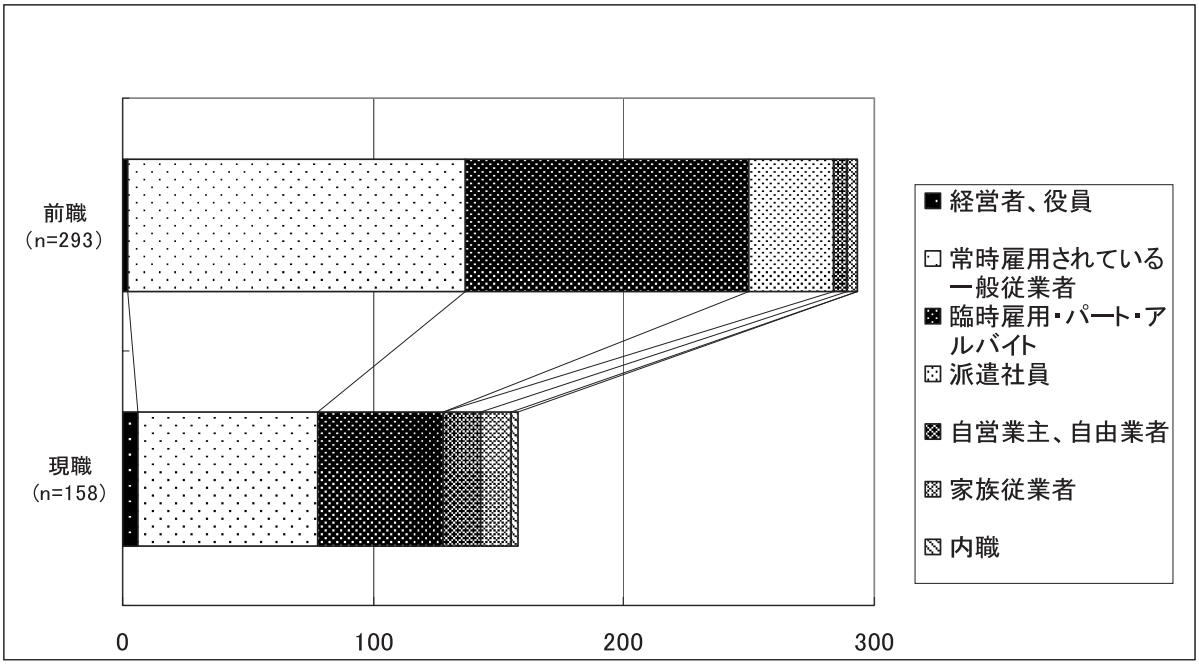


図 20 前職と現職の比較

回答者の同居家族規模は、1 人が 1 人で 0.2%、2 人が 8 人で 1.5%、3 人が最多の 247 人で 46.4%とほぼ半数を占める。4 人は 169 人で 31.8%、5 人以上は 102 人で 19.2%であった（図 21）。

世帯類型は、核家族がほとんどを占め、474 人でおよそ 9 割である。三世代以上同居は 52 人で、9.8%である。その他の世帯は、5 人で 1%である（図 22）。

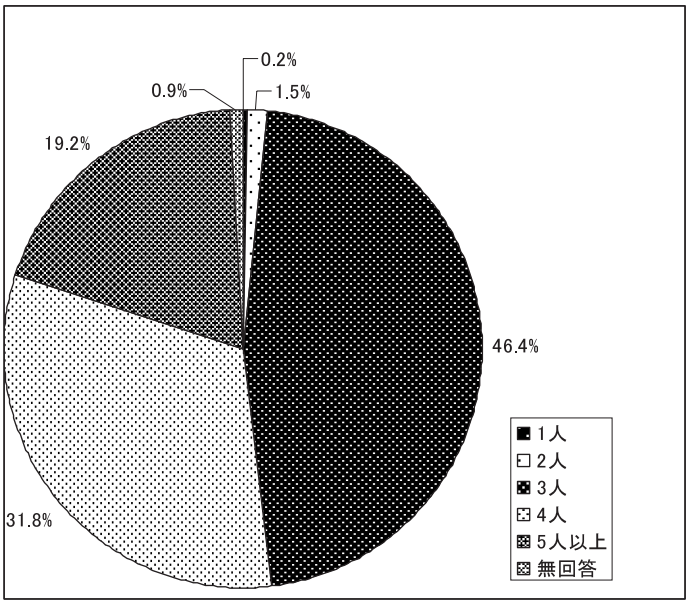


図 21 同居家族規模

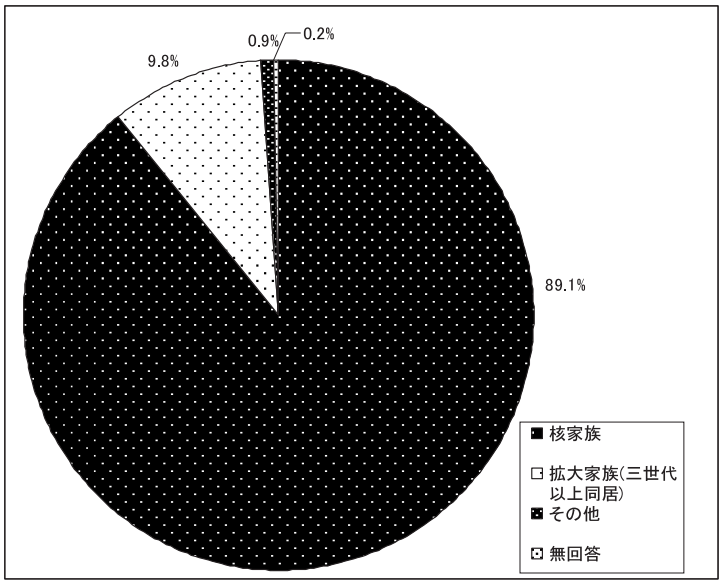


図 22 世帯類型

子ども数は、図 23 に示すとおり 1 人が 266 人、2 人が 191 人、3 人が 63 人、4 人が 5 人、5 人が 1 人となっている。

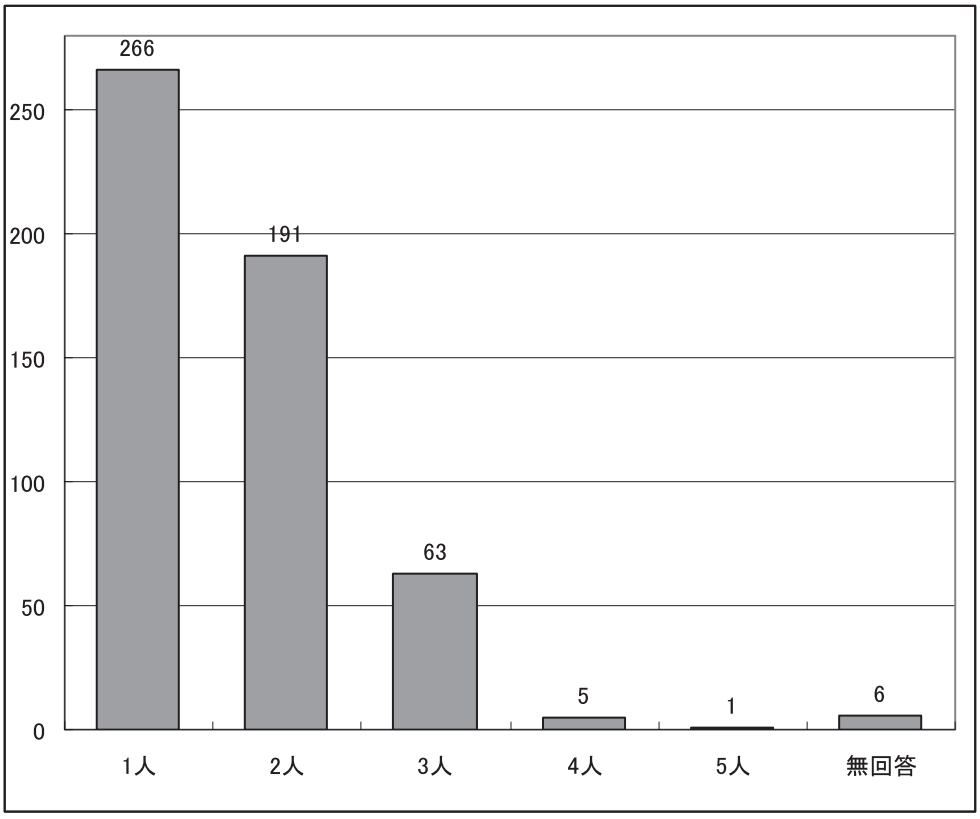


図 23 子ども数

居住地域は、図 24 に示すとおりである。

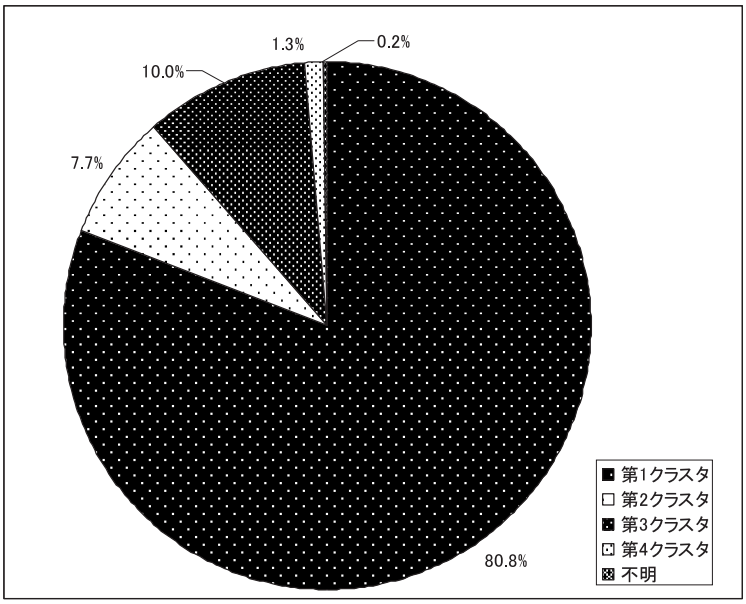


図 24 回答者の居住地域

都市型のライフスタイル選択をしている地域であると考えられるクラスタ 1 に居住している人は 81%、地方型のライフスタイル選択の地域であるクラスタ 2～4 に居住している人は 19%で、その内訳は淡路島北部・篠山・香美からなるクラスタ 2 が 8%、但馬・北播磨地域であるクラスタ 3 が 10%、南あわじであるクラスタ 4 は 1%である。

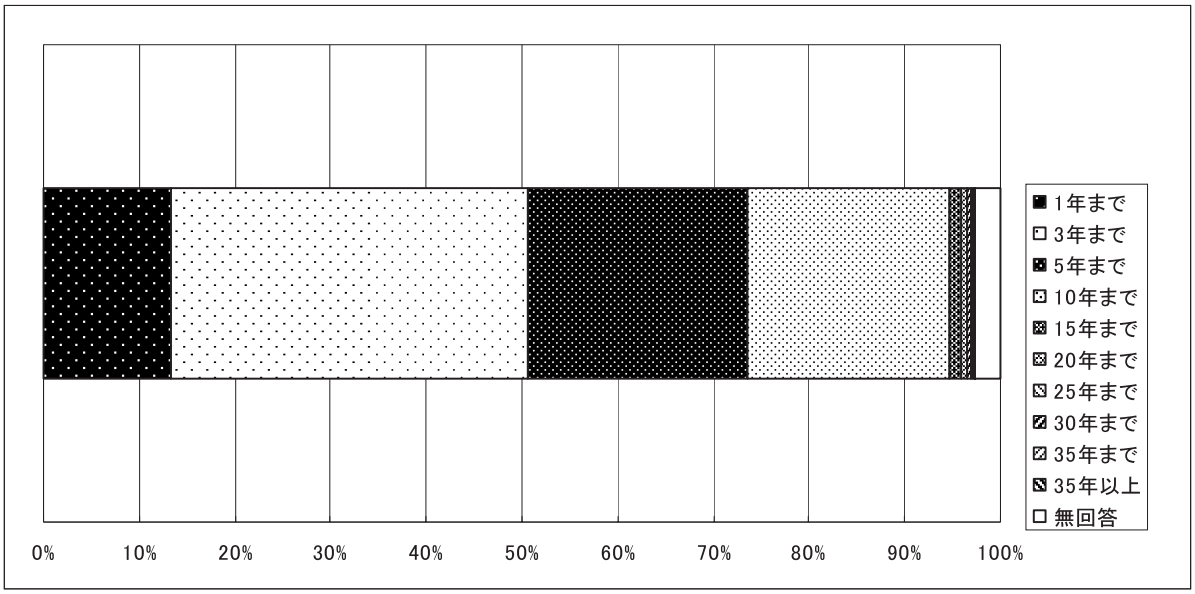


図 25 居住年数

居住年数は平均 4 年程度であり、9 割以上の人は 10 年までの居住年数である（図 25）。

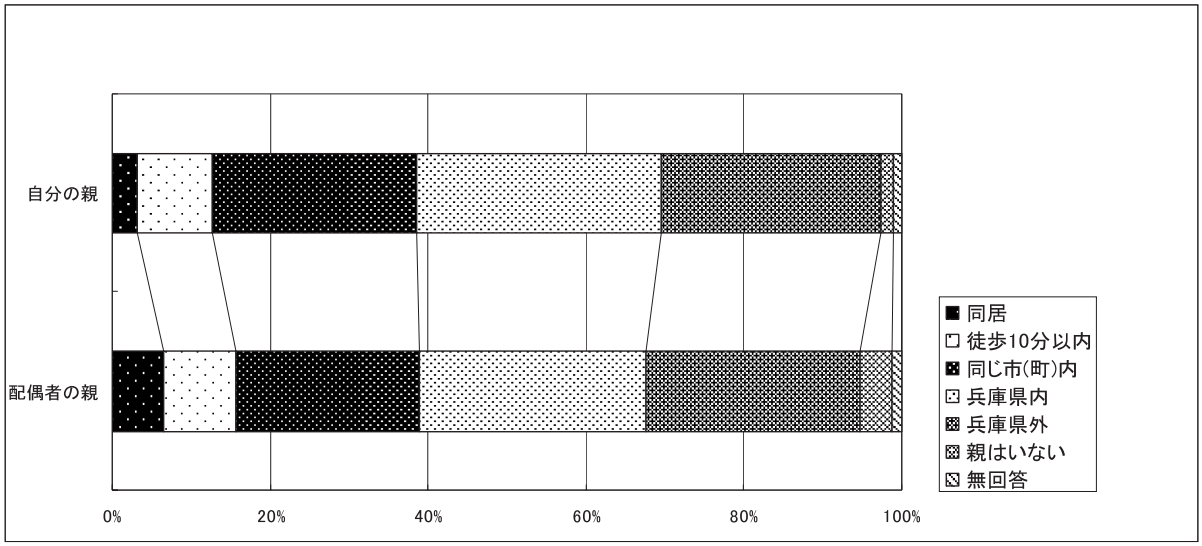


図 26 親の住まいとの地理的関係

同居しているのは、自分の親、配偶者の親とも 5%程度であるが、4 割程度の人は、親と同じ市町内に住んでいる。同居ではなくても、日常的に、親の支援を受けられる近居のスタイルが選択されていると考えられる（図 26）。

回答者世帯の年収は、図 27 に示すとおりである。無回答や、「答えたくない」と回答した人が 204 人存在する。図では、その人たちを除外して、回答があったものの分布のみを示している。なお、中央値は 550 万円である。

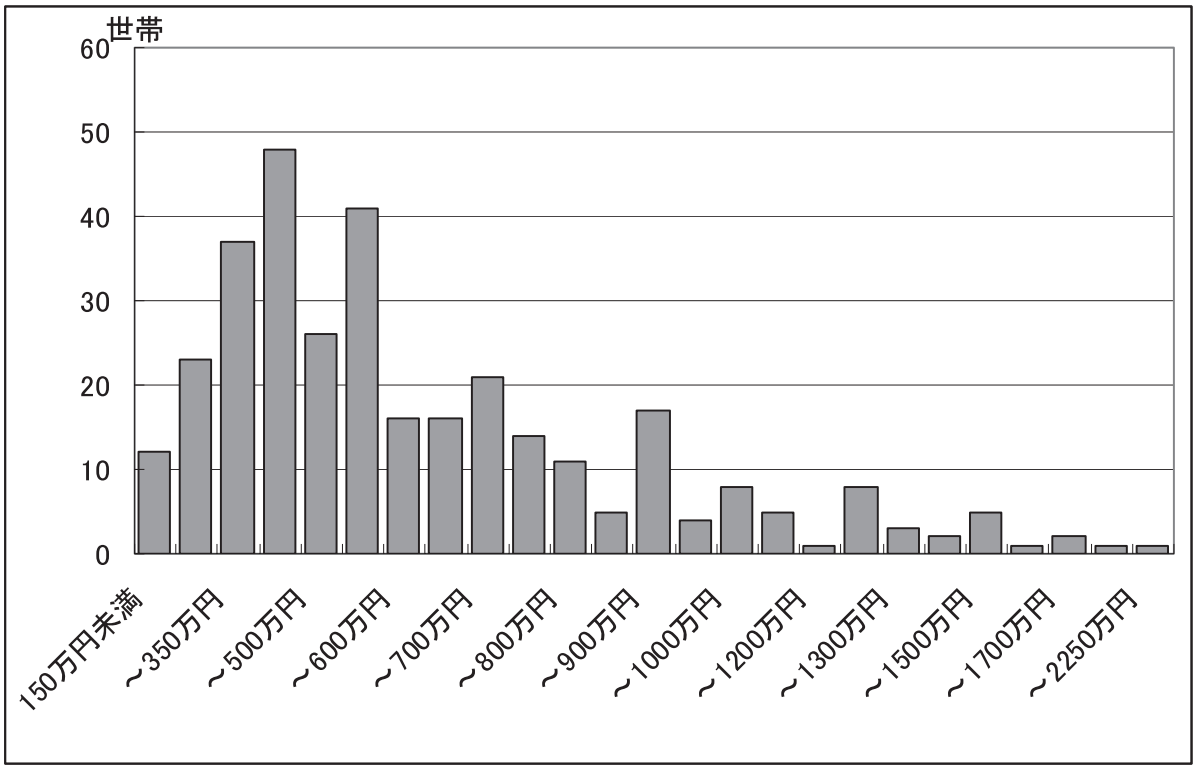


図 27 世帯年収

回答者の属する家族の機能は、表 8 および表 9 のとおりである。

表 8 きずなの分布

	度数	パーセント
バラバラ	15	2.82
サラリ	6	1.13
ピッタリ	39	7.33
ベッタリ	426	80.08
無回答	46	8.65
合計	532	100.00

表 9 かじとりの分布

	度数	パーセント
融通なし	140	26.32
キッチリ	78	14.66
柔軟	268	50.38
てんやわんや	28	5.26
無回答	18	3.38
合計	532	100.00

今回の調査結果からは、子育て中の家族のきずなは、「ベッタリ」が 8 割と、極端なものになっていることがわかる。かじとりについては、7 割弱の回答者の家族で「キッチリ」か「柔軟」であると回答していて、中庸なものとなっている。この、きずなが極端に強いという結果は、妊娠や出産が、家族にとってかなりのインパクトのあるイベントであったことを示している。家族は、これらの大きなイベントを、きずなを極端なものにして対処しているのだと考えられる。

2.「子育て意識」の構成要素

ここでは、実際に 1 歳半の幼児を育てている女性の「子育て意識」がどのような概念から成立しているのか、探索的に因子分析をおこなう。

第 3 章で既述のグループインタビュー調査結果および、育児ストレスや育児負担感尺度に関する先行研究をふまえ、問 2 および、問 3 の計 34 項目を作成した。主として、妊娠や出産、子育てに関する肯定的な評価や意識について把握できるように、設問を作成した。この 34 項目について、主成分法によって因子抽出をおこなった。固有値 1 以上の因子のうち、スクリー基準により因子数を 6 と決定して、主成分法・バリマックス回転により、因子分析をおこなった。つぎに十分な因子負荷量を示さなかった「子どもの名前をあれこれ考えるのは楽しい（問 2 の設問 e)」、「子育てについて知らないことが多くても何とかなるものだ（問 3 の設問 k)」、「子どもは仲間同士の遊びを通じて成長する（問 3 の設問 o)」の 3 項目を除外して、3 度目の因子分析をおこなった。結果を表 10 に示す。第 1 因子は、子どもがかわいい、いとおしいといった、子どもそのものについての項目が含まれる「子どもへの愛着」因子である。第 2 因子は、妊娠した自分や環境の変化に対して「調べるのは楽しい」「計画を立てるのは楽しい」といった項目を含む「変化への適応性」因子である。第 3 因子は、養育者自身について、「今までの自分とは違う」「誇らしい」といった「自分の成長」因子である。第 4 因子は、「友人が増える楽しみ」「知らない人からでも話しかけられる」といった項目を含む「つながりの増加」についての因子である。第 5 因子は、「思ったとおりにはいかない」一方で「思い通りにしたい」という、「コントロール願望（不全）感」因子と解釈できる。これは、コントロールしたいと感じているが実際にはそう上手くコントロールできない、という意味である。最後に第 6 因子は、身近に「赤ちゃんをみると」「子だくさんの人がいると」自分ももうひとり育ててみようかと思えるという「身近なモデルの存在」因子である。

以上の結果から、「子育て意識」にはつらいことばかりではなく、多くの楽しみが含まれていることが確認できる(図 28)。しかし同時に、コントロールしたいがなかなかできないという、不全感についての因子が抽出されたことから、「つらくもあれば楽しくもある」子育ての実態も浮かび上がってくる。これらの 6 因子についてそれぞれ因子得点を求め、以降の分析では、この結果を従属変数として用いることとする。

表 10 「子育て意識」についての因子分析結果（主成分法、バリマックス回転）

項 目	回転後の因子負荷量						共通性
	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	
＜因子1:子どもへの愛着＞							
子どもをみていると飽きない	0.687	0.069	0.078	0.245	−0.155	0.121	0.582
子どもをあやすことは楽しい	0.664	0.129	0.081	0.196	−0.100	0.109	0.524
この子さえいなければと考えることがある	−0.582	−0.061	0.013	0.060	0.347	−0.163	0.493
お腹の中で赤ちゃんが動くと、いとおしい	0.574	0.426	0.047	0.072	0.125	−0.113	0.547
子どもがそばにいないと正直ほっとする	−0.572	0.000	0.036	0.038	0.193	−0.158	0.392
赤ちゃんをみていると、ついほおずりをしたくなる	0.563	0.177	0.105	0.111	0.192	−0.091	0.417
お腹が大きくなるにつれ、赤ちゃんへの愛情がわく	0.551	0.434	0.087	0.055	0.167	−0.086	0.538
子育てには、日々新たな発見がある	0.492	0.035	0.280	0.117	−0.117	0.131	0.366
成長した子どもを想像すると楽しい	0.480	0.154	0.201	0.231	0.016	0.136	0.366
＜因子2:変化への適応性＞							
どこで出産しようか、人に聞いたり調べたりするのは楽しい	0.095	0.793	0.075	0.173	0.024	0.094	0.683
どの出産方法を選ぼうか、人に聞いたり調べたりするのは楽しい	0.061	0.754	0.099	0.143	0.039	0.108	0.615
いつ子どもをつくろうか、計画を立てるのは楽しい	0.159	0.643	0.054	0.084	0.033	0.292	0.536
妊娠期間中、自分なりに生活を工夫するのは楽しい	0.181	0.639	0.123	0.166	−0.242	0.047	0.545
妊娠中の生活は、先の予測のつかないところが楽しい	0.133	0.464	0.208	0.294	−0.178	0.072	0.400
出産を経験した自分は、それまでの自分とはまるで違う	0.073	0.036	0.860	0.087	0.009	−0.008	0.754
＜因子3:自分の成長＞							
母親になった自分は、それまでの自分とはまるで違う	−0.053	0.013	0.854	0.132	−0.023	−0.038	0.752
出産を乗り越えた自分を、誇らしく思う	0.182	0.216	0.708	0.100	0.124	0.098	0.616
子どもを育てることで、新しい自分自身を発見できた	0.227	0.144	0.666	0.207	−0.100	0.042	0.570
子育てをがんばっている自分を、ほめてあげたい	0.074	0.092	0.561	0.053	0.326	0.135	0.456
＜因子4:つながりの増加＞							
子育てには、自分の友人が増える楽しみがある	0.135	0.074	0.161	0.752	0.011	0.064	0.619
赤ちゃんをきっかけにして、知り合いができてうれしい	0.271	0.049	0.085	0.729	0.141	−0.054	0.638
子どもを連れていると、知らない人からでも話しかけられてうれしい	0.116	0.237	0.196	0.670	−0.086	0.039	0.566
健診等には、友人知人をつくる楽しみがある	−0.025	0.172	0.047	0.631	0.006	0.160	0.457
妊娠中は、知らない人からでも話しかけられてうれしい	0.184	0.433	0.096	0.518	−0.025	−0.041	0.500
＜因子5:コントロール願望(不全)＞							
子育ては、思ったとおりにはいかず、つらい	−0.358	0.017	0.099	−0.062	0.625	−0.067	0.538
子どもがいることで、自分の世界は狭くなったと感じる	−0.259	−0.045	−0.064	−0.145	0.622	−0.158	0.506
妊娠中は、制限ばかりでうんざりする	−0.186	−0.390	0.097	0.043	0.540	−0.033	0.491
妊娠中の生活は、自分の思いどおりにしたい	0.049	−0.075	−0.024	0.067	0.523	0.029	0.287
子育ての目標(おむつはずしの時期など)が思いどおりだと、達成感を感じ	0.125	0.151	0.106	0.041	0.517	0.118	0.333
＜因子6:身近なモデルの存在＞							
よその赤ちゃんをみると、自分ももうひとりほしくなる	0.159	0.185	0.058	0.061	0.022	0.867	0.818
子だくさんの人が身近にいると、自分ももうひとり育ててみようかと思える	0.173	0.178	0.098	0.124	−0.039	0.863	0.833
初期の固有値	7.205	2.910	1.975	1.631	1.590	1.429	
回転後の累積寄与率(%)	11.713	22.336	32.308	41.045	47.987	53.999	

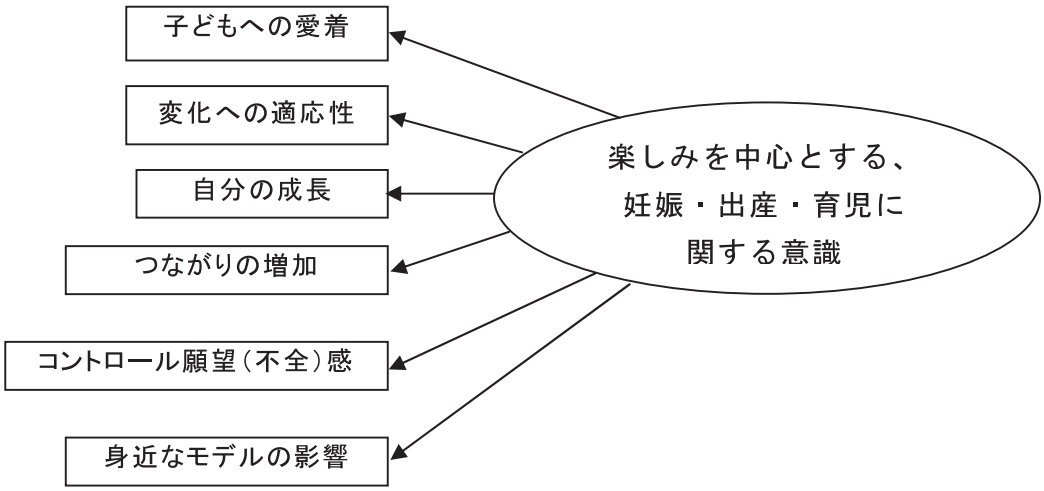


図 28 確認された「子育て意識」の構成要素

3.「子育て意識」に影響を与える要因

ここでは、次の 2 点について確認をする。まず、前項で明らかとなった「子育て意識」について、地域によってどのような違いがあるか、第 2 章で述べた、県下の女性のライフスタイル類型を用いて確認する。具体的には、都市型のライフスタイルおよび、地方型のライフスタイルである。さらに「子育て意識」について、どのような要因が影響を与えているのか、平均値を比較することにより明らかにする。

（1）ライフスタイル選択による特徴

まず、都市型および、地方型のライフスタイルによる回答パターンの違いを比率の差の検定によって確認する。地方型のライフスタイル選択になっている地域に注目すると、その特徴はまず、子どもの発達の主観的な見積もりについて不安に思っている人が、都市型のライフスタイル選択をしている地域に居住している人よりも多いということである（表 11）。

表 11 ライフスタイルと子どもの発達の主観的見積もりのクロス表

			子どもの発達の主観的見積もり		合計
			不安ではない	不安である	
ライフスタイル	都市型	度数	353	74	427
		%	82.67	17.33	100.00
	地方型	度数	65	34	99
		%	65.66	34.34	100.00
	合計	度数	418	108	526
		%	79.47	20.53	100.00

χ^2=14.257, d.f.=1, p<0.01

また、都市型と地方型では自分の親の住まいとの地理的距離に、統計的に有意な差はみられないが、配偶者の親との地理的な距離については、地方型ライフスタイルのほうが、近隣に住んでいることが明らかとなった（表 12）。

表 12 ライフスタイルと配偶者の親との地理的な距離のクロス表

			配偶者の親との地理的な距離		合計
			徒歩10分以内	徒歩10分以上	
ライフスタイル	都市型	度数	59	346	405
		%	14.57	85.43	100.00
	地方型	度数	24	74	98
		%	24.49	75.51	100.00
	合計	度数	83	420	503
		%	16.50	83.50	100.00

χ^2=5.638, d.f.=1, p<0.05

同様に、地方型ライフスタイルにおける三世代同居率は高い（表 13）。

表 13 ライフスタイルと三世代同居のクロス表

			三世代家族かどうか		合計
			三世代家族ではない	三世代家族	
ライフスタイル	都市型	度数	402	27	429
		%	93.71	6.29	100.00
	地方型	度数	76	25	101
		%	75.25	24.75	100.00
	合計	度数	478	52	530
		%	90.19	9.81	100.00

$\chi 2=31.480$, d.f.=1, $p<0.01$

つぎに、都市型および、地方型のライフスタイルを選択していると考えられる 2 地域で、「子育て意識」がどのように異なるのか確認する。

図 29 は、都市型のライフスタイルの地域と、地方型のライフスタイルの地域との、「子育て意識」の平均値の比較である。これをみると、都市型ライフスタイルの地域では、子どもへの愛着、変化への適応性、そして自分の成長という 3 因子の平均点が高いことがわかる。逆に、地方型ライフスタイルの地域では、つながりの増加、コントロール願望（不全）感、そして身近なモデルの影響という 3 因子の平均点が高いことがわかる。このことは、核家族で少ない子どもを育てている都市型ライフスタイルでは、家族内で自分自身や子ども自身についての楽しみを大切にできると同時に、ときに社会との接点への関心が低く、孤独に陥りがちであることを示している。逆に、三世代同居や子ども数の多い地方型ライフスタイルでは、つながりの増加を重視したり、身近なモデルの影響を受けやすく、他者との関係で子育ての楽しみや不全感をもつ傾向にあることを示している。

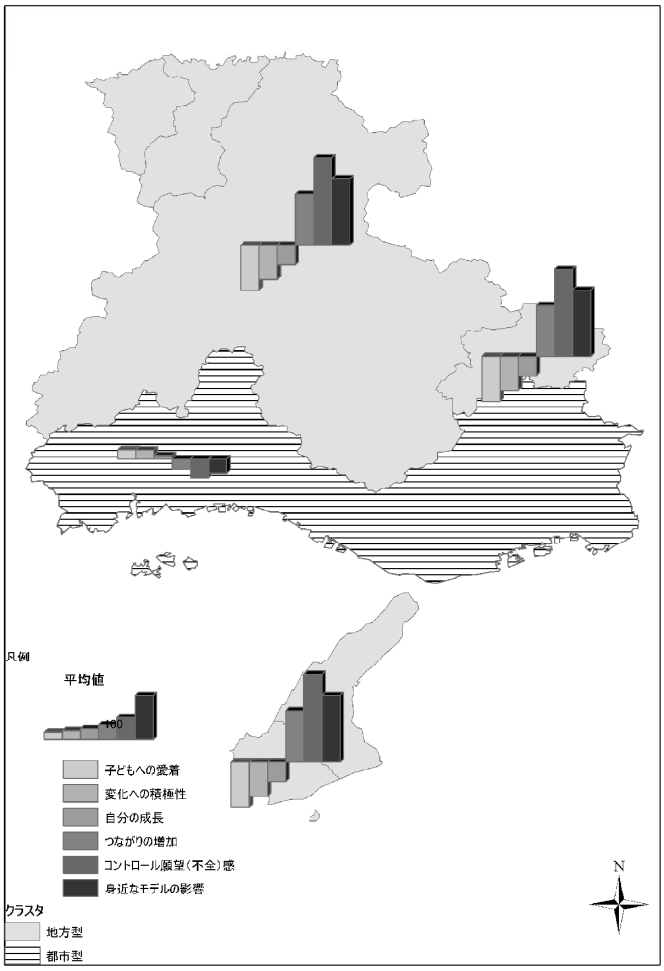


図 29 「子育て意識」の平均値の比較

（2）社会の中の子育てー「子育て意識」の規定要因

6 つの潜在因子からなる「子育て意識」が、それぞれどのような要因の影響を受けるのかについて、検討をおこなう。

孤独な子育ては、ときに養育者を追いつめ、極端な場合には虐待に至ることがある。前章の質的調査では、「仲間」をつくることや、他者への開放的な出産や子育てについて考察した。これを受けて、ここではとくに、養育者の持つ社会関係に注目して検討する。具体的には、他者や社会一般と関わることについての変数である「ファミリーサポートセンターの認知および、利用意向」「育児サークルへの参加および、役割の引き受け」「現在の職業」について検討をする。

「子育て意識」の 6 因子の平均値の比較（分散分析）をおこなった。まず、ファミリーサポートセンターについては、利用したことがあったり存在を知っている人は、子どもへの愛着が低い（F(2, 509=5.574 p<0.01)）（図 30）。

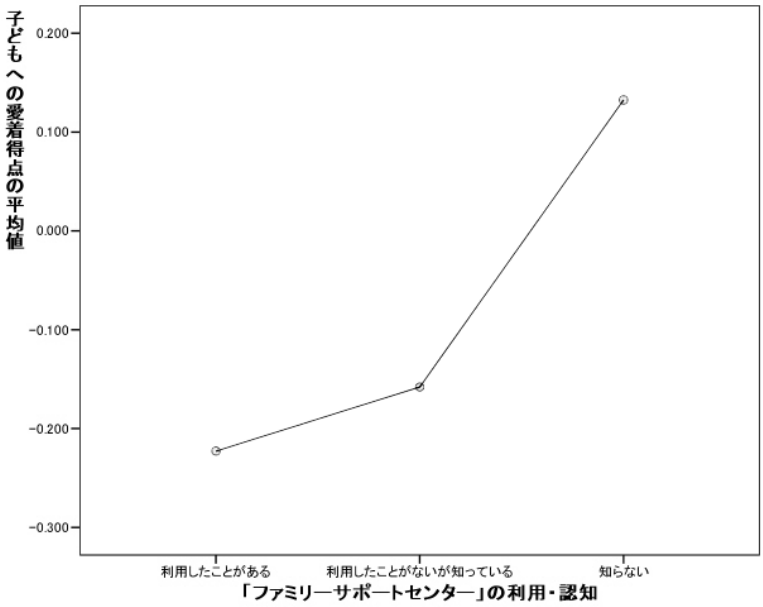


図 30 ファミリーサポートセンターの利用・認知による愛着得点の平均値の差

さらに、変化への積極性が高く（F(2, 509=4.310 p<0.05)）（図 31）、コントロール願望（不全）感は低い（F(2, 509=5.118 p<0.01)）（図 32）。

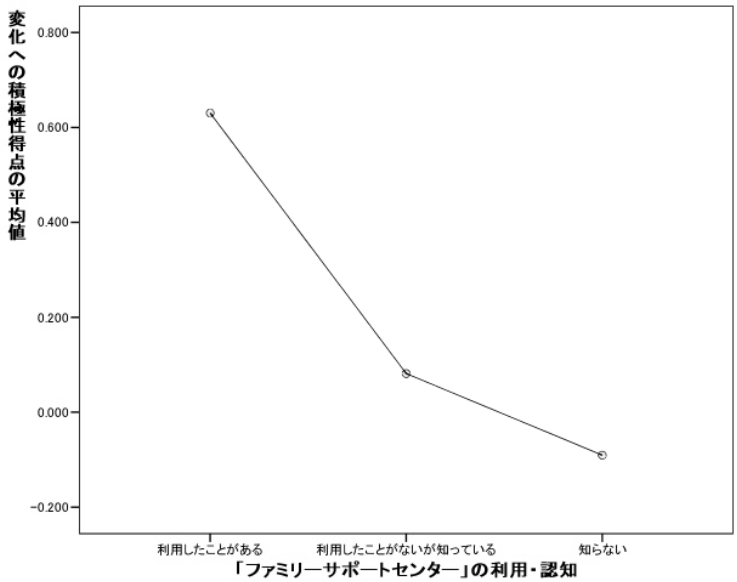


図 31 ファミリーサポートセンターの利用・認知による
変化への積極性得点の平均値の差

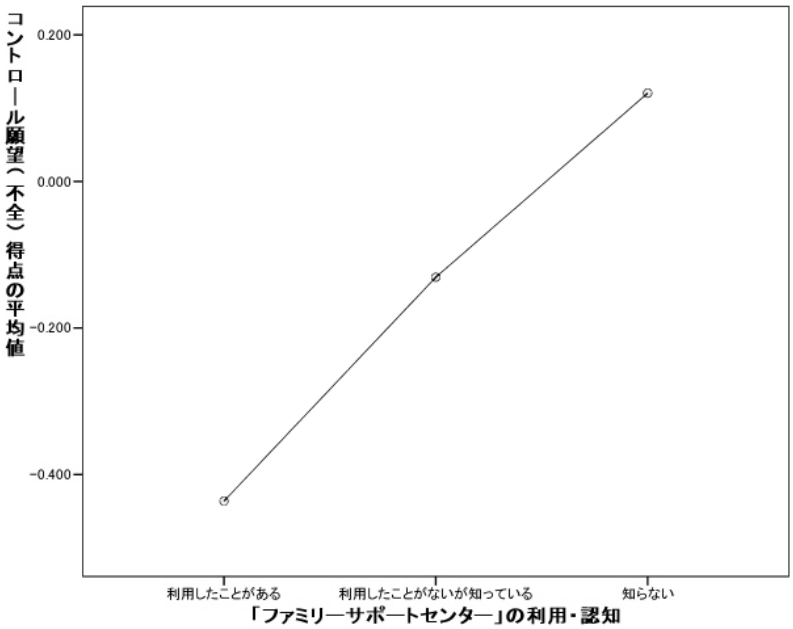


図 32 ファミリーサポートセンターの利用・認知による
コントロール願望（不全）感得点の平均値の差

ファミリーサポートセンターの認知が高い人の子どもへの愛着得点が低いことは、一見理解しがたいように思えるが、コントロール願望（不全）感が低いという結果および、後述の結果と合わせて子育てにどれだけ集中してしまう状況にあるか、が関係しているようである。つまり、周囲にどのような社会資源があるか等気を配っていないと、子どもへの愛着得点が高くなるのではないか。これは、子どもに対する過度の集中であると考えられる。同様に、周囲に気を配っている人は、子どもに対して過度に集中しておらず、子どもをコントロールしたいができない、とあまり考えていないのではないか。

また、同センターの利用意向についてであるが、利用したいと思っている人は、つながりの増加を楽しむ傾向にある（F(3, 314=4.214 p<0.01)）（図 33）。

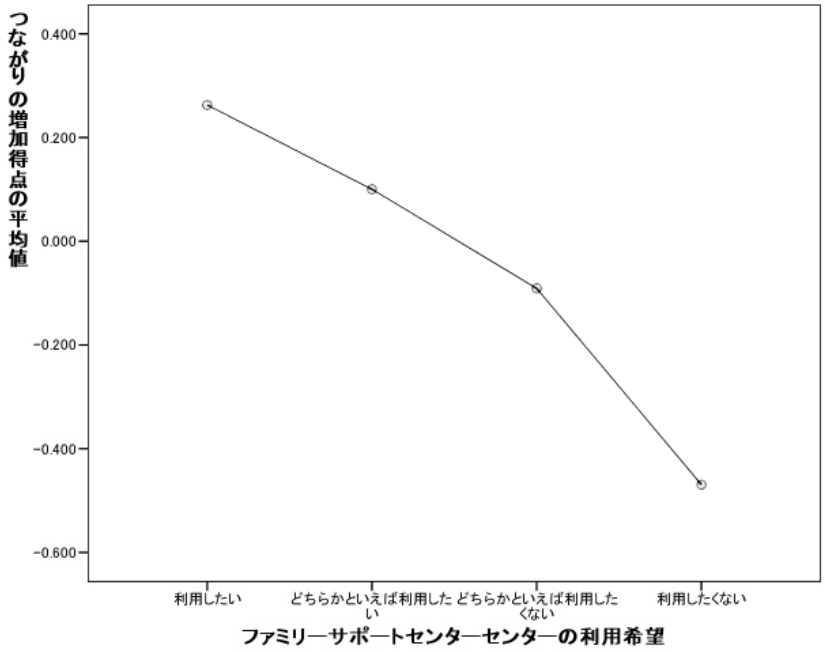


図 33 ファミリーサポートセンターの利用・認知による
つながりの増加得点の平均値の差

以上の結果から、ファミリーサポートセンターは、子育ての具体的な社会資源であるだけでなく、新しいつながり、新しい出会いの場としてもとらえられていることが読み取れる。

つぎに、育児サークルへの参加についてであるが、参加している人は、つながりの増加を楽しむ傾向にある。同様に、サークル内で役割を持っている人も、つながりの増加を楽しむ傾向にある（F(3, 503=5.471 p<0.01)）（図 34）。

最後に、現在の職業についてであるが、正規に雇用されるなど職業を持っている人は、コントロール願望（不全）感が低い（F(2, 509=3.724 p<.05)）（図 35）。

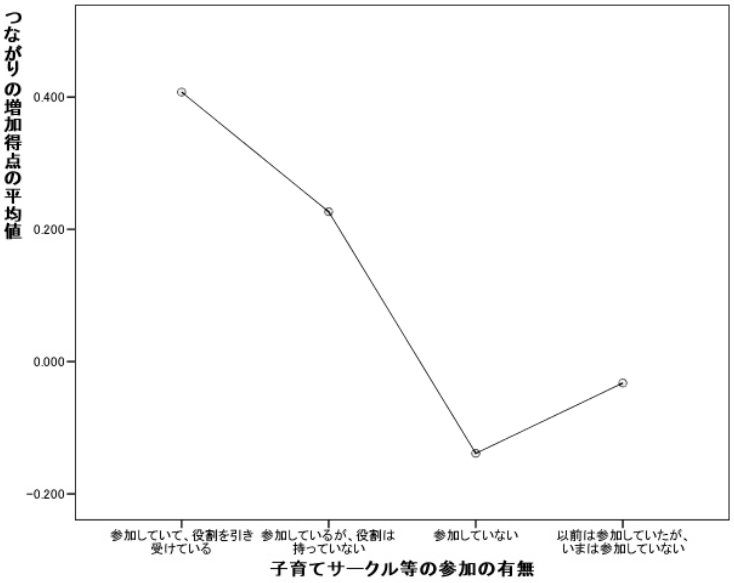


図 34 ファミリーサポートセンターの利用・認知による
つながりの増加得点の平均値の差

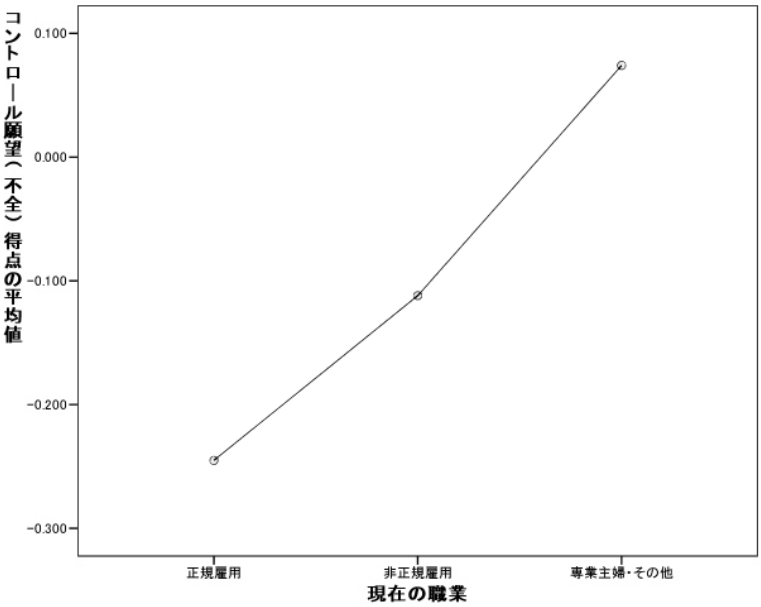


図 35 現在の職業による
コントロール願望（不全）感得点の平均値の差

以上のことから、制度を利用したり職業を持っているなど、子どもと一定の距離をとれることが、自分や子どもの生活をコントロールしたい（ができない）という不全感を下げる傾向があることがわかる。また、制度利用を積極的に「つながりをつくること」としてとらえることで、子育ての楽しみが増加することがわかる。

本報告では、とくに社会との接点に焦点をあてて分析をおこなったが、もう少し小さな社会集団、たとえば相談相手の選択等についても、「子育て意識」との関連に関する検討が必要である。今後の課題としたい。

4. 妊娠のコントロール幻想

第 3 章で既述のように、妊娠や出産、子育てにかかる女性の意識についての定性的把握をおこなった結果、実際に出産を体験した人たちですら「『妊娠すること』は案外コントロールできない」と考えていることが明らかとなった。タイミング法や避妊の中止でたやすく妊娠する女性がいる一方で、不妊に悩まされる女性も少なからず存在する。ここでは、「妊娠することの困難」について、希望した時期と実際の妊娠時期とのズレから検討をおこなう。

まず、どのくらいの人が妊娠することをコントロールしようとしているのか、妊娠の計画の有無を出産ごとに尋ねた。これは、第 1 子は計画しなかったが第 2 子計画を持っているなど、同一の回答者でも違いがあるためである。したがってここでは、回答数は回答者数ではなく、出産数になる。第 4 子までの全 648 出産のうち、妊娠の計画や予定を立てなかった、と回答したのは 87 出産で、全体の 13%、残りの 561 出産、87%は計画や予定を立てていた、と回答している（図 36）。9 割近くが、計画妊娠・出産であることが、このことから理解できる。

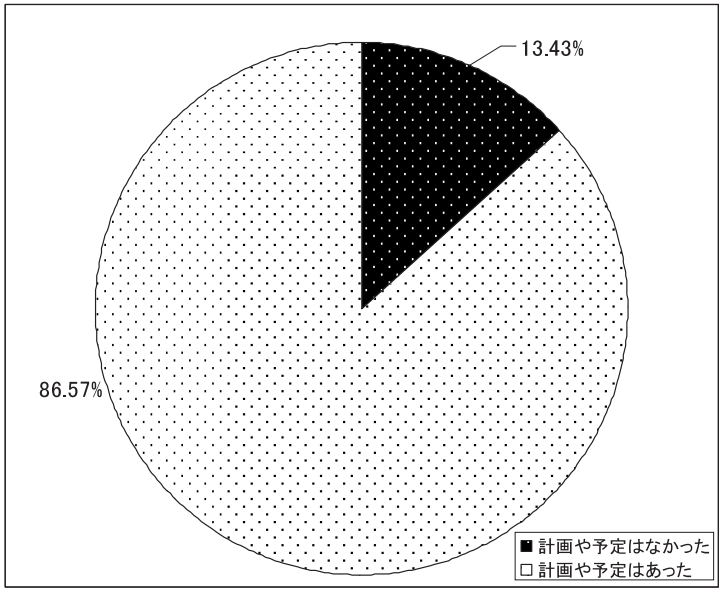


図 36 妊娠計画の有無（n=648）

つぎに、計画があったとする 561 出産のうち、計画・希望していた出産時期と、実際の出産時期とのズレについて尋ねた。561 出産のうち、計画どおりに子どもを持ったと回答したのは 321 出産で、57%であった。残り半数弱の 43%は、早かったか遅かったかのどちらかであり、「ズレ」が生じているケースである。つまり、出産できた人でも、半数強しか予定どおりにはいかないものなのだということがここから読み取れる。

「ズレ」が生じている 43%のうち、予定より早かったと回答したのは 92 出産で 16%である。これは、子どもを持とうとしていて、結果として早く持ったのであるから、計画とずれてはいても「妊娠することの困難」という文脈からは、そう問題視する必要はないであろう。注目すべきは、計画より遅かったと回答した 148 出産、26%であ

る。以上の結果は、図 37 に示すとおりである。

子どもを持つことを期待して性交渉をもつ男女が妊娠に至る可能性は、一年後に 90%である（吉村 1999）。ここから、子どもを持つことを望んで 2 年以上経過することは、不妊症の診断基準のひとつとされている（荒木・浜崎 1996）。

しかし、今回の質問紙調査の結果はわたしたちに、「妊娠することは、想像するよりもコントロールの難しいことなのではないか」と推測させる。インタビュー調査では、第一子は簡単に妊娠したが、第二子はなかなか妊娠しないという、いわゆる「二人目不妊」についての発言もみられた。これらの結果は、無事に出産した人たちによるものであることを考えると、妊娠に至らない人であれば、この「妊娠することの困難」は、さらに割合が増えるだろう。

「妊娠しないこと」については確かに、現在ほぼ 100%のコントロールが可能である。万一妊娠したとしても、日本では人工妊娠中絶という方法がとれる場合もある。わたしたちはこのことをもって、あたかも「妊娠するかしないか」をコントロールしているかのような幻想を抱いているのではないだろうか。「妊娠しないこと」を選択している女性たちや、現在積極的に妊娠しようとしていない女性たちのなかに漠然と広がる、「いつ妊娠できるのか、したらよいのか」という不安感は、2007 年度のベネッセ・ムック『ママになろうよ！赤ちゃんのいる暮らしも、そろそろいいかも』に象徴されている。わたしたちは、「望めば、避妊を中止すれば、妊娠するものだ」という認識を改め、「望んだからといって、できないかもしれない」ものとして、妊娠という現象を捉え直す必要があるのかもしれない。

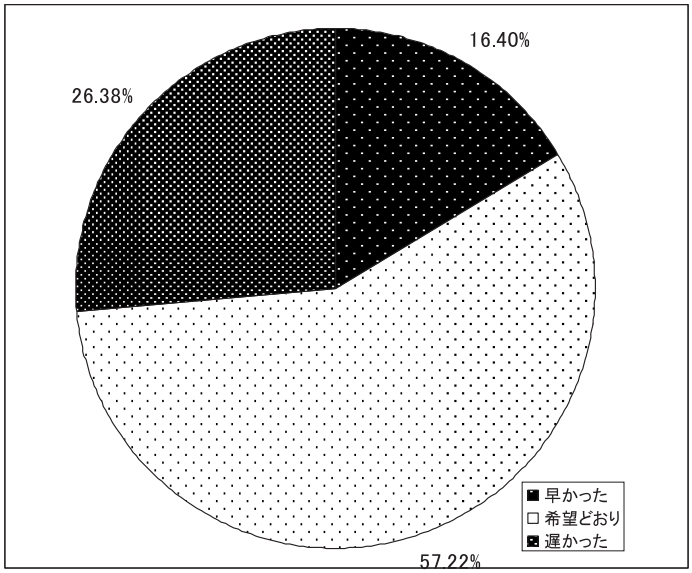


図 37 計画と実際のズレ（n=561）

第 4 節 本章のまとめ

本章では、質問紙調査を用いて「子育て意識」がどのような概念から構成されているか、また、それらはどのようなことがらと関連があるのかについて考察した。その結果、子育て意識は①子どもへの愛着、②変化への適応性、③自分の成長、④つなが

りの増加、⑤コントロール願望（不全）感、⑥身近なモデルの影響という 6 つの概念に整理できることがわかった。

これらの意識は、ライフスタイル選択で傾向が異なっており、都市型ライフスタイルの地域では、子どもへの愛着、変化への適応性、自分の成長という 3 つの概念の平均点が高いことがわかる。逆に、地方型ライフスタイルの地域では、つながりの増加、コントロール願望（不全）感、そして身近なモデルの影響という 3 つの概念の平均点が高い。

これは、都市型ライフスタイルでは、家族内で自分自身や子ども自身についての楽しみを大切にできると同時に、ときに社会との接点への関心が低く、孤独に陥りがちであることを示している。また地方型で、つながりの増加を重視したり、身近なモデルの影響を受けやすく、他者との関係で子育ての楽しみを持つが、同時に不全感をも持つ傾向にあることを示している。確かに、地方型のライフスタイル選択の地域では都市型に比べて、配偶者の親との地理的な距離が近くなっており、三世代同居も多くなっている。

他者とのかかわり、社会への開放性をどのように評価するかによって、「自分や子どもの生活をコントロールしたいができない」という感覚を持つ度合いが異なってくると考えられる。このことは実際に、「子育て意識」を規定する要因についての分析でも、社会資源について利用している人や認知が高い人、サークルに参加している人でコントロール願望（不全）感が低いという結果として確認された。

さらに、「妊娠するかしないかはコントロール可能である」という、妊娠のコントロール幻想ともいうべき認識が存在することが明らかとなった。少子化対策を検討する際には、このことを前提として考察する必要があると考えられる。

第５章 おわりに：結論と政策提言

最後に、本研究によって得られた知見を要約し、政策的提言をおこなう。本研究によって得られた知見は、大きく８つある。

まず、兵庫県下の女性の年齢階級別就労率グラフ（いわゆるＭ字カーブ）クラスタ分析結果（第２章）からは、①兵庫県下の市区町単位でクラスタリングをおこなった結果、４分類（瀬戸内地域・篠山+香美+淡路島北部・内陸地域・淡路島南部）されることがわかった。これは、都市型のライフスタイルと、地方型のライフスタイルとに大別される。

つぎに、子育て中の女性へのインタビュー調査結果より、②子育ての楽しみは「かわいい、成長が楽しみ」といった子どもそのものに関することだけでなく、「子育てしている自分の成長」などに関する、養育者にかかる内容が多く含まれることがわかった。③「子育ての少し先輩」に気楽に相談ができる環境が求められていることがわかった。④多胎児は増加傾向にあるが、施策は単胎児を基本としており、まったく現実に追いついていないことがわかった。現在は、ピアサポートならびに、母子保健の実践現場レベルでの奮闘がおこなわれている。⑤助産所の機能には、産む女性ひとりのイベントから、家族全員のイベントへと出産を変化させることおよび、出産に至る過程を丁寧にたどることによって、出産にリアリティを与えることが含まれる。これは、きょうだいたちへの「いのちの教育」となりえる。また、妊娠・出産の楽しみに含まれると考えられる。

さらに、質問紙調査の結果からは、⑥因子分析の結果、子育ての楽しさを中心とする、女性の意識について、６因子（「子どもへの愛着」「変化への適応性」「自分の成長」「つながりの増加」「コントロール願望（不全感）」「身近なモデルの存在」）が抽出、された。出産準備や子育て計画を立てるなど、変化を肯定的に受け止める一方で、子どもや自分の生活をコントロールしたい（ができない）という、両義的な意識があることが確認された。⑦「子育て意識」は、ライフスタイル選択によって特徴があり、「社会や周囲とのかかわりをどのように評価するか」は、子どもへの過度の集中を下げ、子育てを楽しむために重要な概念であることがわかった。⑧妊娠の計画を持っていた人のうち、実際に計画通りのタイミングで妊娠したのは57%に過ぎず、26%の人は計画よりも遅れた妊娠となっていた。つまり、妊娠（出産）しないことをコントロールできることと、妊娠することをコントロールできることは同値ではない（「妊娠のコントロール幻想」の発見）。

上記をふまえて、以下の政策提言をおこなう。

①女性の就労を積極的に支援するべき

②多胎児について、妊娠から出産、育児にかかる支援策を充実させるべき

③「妊娠のコントロール幻想」を周知し、行政と県民双方の意識改革を促進するべき

④妊娠・出産・子育ての楽しみを「将来の親世代」である思春期層へ伝えるようなプログラムを開発し実施すべき

女性の就労は、「コントロール願望（不全感）得点」を下げる影響がある。この得点は、育児ストレスに関する項目であると考えられる。子育ての楽しみを増幅するためには、子育てへの過度の集中を下げることが必要であり、そのひとつの方策は就労であろうと考えられる。この観点から、女性の就労を積極的に支援するべきである。

兵庫県は多胎出産の比率が全国的にも高いことや、多胎育児の当事者ネットワーク構築が全国に先駆けて構築されていることをふまえ、単胎育児を所与の前提とするのではなく、多胎児について、妊娠から出産、育児にかかる支援策を充実させるべきである。

妊娠したいときに必ずしもできない（出産できた人ですら、4 人にひとりはタイミングが遅れている）ことを周知し、行政と県民双方の意識改革を促進するべきである。ただし、本調査はすでに妊娠出産を経験した人を対象としており、この議論は、不妊治療への補助の議論へ直結するものではないことはいうまでもない。

妊娠・出産・子育ての楽しみを「将来の親世代」である思春期層へ伝えるようなプログラムを開発し実施すべきである。ここには、妊娠や出産を家族のイベントとしてとらえうる視点からの「いのちの教育」が重要であると考えられる。

以上、「ライフスタイルの多様性を支える少子化対策の展開」について考察してきた。今後は、ライフスタイルの地域特性をさらに詳細に分析することが必要である。また、「子育て意識」概念について、さらなる検討が必要である。あわせて、「子育て意識」の規定因については、本稿では「社会とのかかわりの意味づけ」に焦点をあてて考察したが、より広範な分析が必要である。今後の研究課題としたい。

［付記］
質問紙調査実施にあたっては、兵庫県健康生活部健康局健康増進課ならびに、神戸市をはじめとする県下の市町母子保健担当部署のみなさまに多大なるご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

［引用・参考文献］

荒木重雄・浜崎京子，2003，『不妊治療ガイダンス第 3 版』医学書院.

ベネッセコーポレーション，2007，「ベネッセムックママになろうよ 2008」.

内閣府，2007，「平成 19 年版国民生活白書」
（http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h19/10_pdf/01_honpen/index.html）
2008/03/30 閲覧.

————，2007，「平成 19 年版少子化社会白書」
（http://www8.cao.go.jp/shoushi/whitepaper/w-2007/19pdfhonpen/19honpen.html）
2008/03/30 閲覧.

中林正雄，2006，「『産科領域における医療事故の解析と予防対策』総括研究報告書」
（http://mhlw-grants.niph.go.jp/niph/search/NIDD00.do）2008/03/30 閲覧.

大木秀一，2007，「多胎児家庭の育児支援に役立つ図と表」（おおさか多胎ネット設立準備委員会発足記念講演会配付資料）

————，2008,『多胎児家庭支援の地域保健アプローチ』ビネバル出版.
齋藤堯幸・宿久洋，2006,『関連性データの解析法』共立出版.
多胎育児サポートネットワーク，2008,「多胎育児支援地域ネットワーク構築事業第 2 年次報告書」.
立木茂雄，1999,『家族システムの理論的・実証的研究』川島書店.
吉村泰典編著，1999,『不妊診療プラクティス』中外医学社.

資料編

・単純集計結果

・調査票

単純集計結果

Q1a　妊娠への満足度

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
満足	348	65.4
どちらかといえば満足	120	22.6
どちらかといえば不満	49	9.2
不満	13	2.4
無回答・非該当	2	0.4
合計	532	100.0

Q1b　出産への満足度

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
満足	359	67.5
どちらかといえば満足	117	22.0
どちらかといえば不満	42	7.9
不満	12	2.3
無回答・非該当	2	0.4
合計	532	100.0

Q1c　子育てへの満足度

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
満足	280	52.6
どちらかといえば満足	202	38.0
どちらかといえば不満	41	7.7
不満	6	1.1
無回答・非該当	3	0.6
合計	532	100.0

Q2a　妊娠・出産経験への賛否・子供を作る計画は楽しい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	156	29.3
ややそう思う	152	28.6
どちらともいえない	132	24.8
あまりそう思わない	58	10.9
そう思わない	31	5.8
無回答・非該当	3	0.6
合計	532	100.0

Q2b　妊娠・出産経験への賛否・どこで出産するか人に聞いたり調べるのは楽しい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	150	28.2
ややそう思う	162	30.5
どちらともいえない	118	22.2
あまりそう思わない	79	14.8
そう思わない	21	3.9
無回答・非該当	2	0.4
合計	532	100.0

Q2c　妊娠・出産経験への賛否・どの出産方法を選ぶか人に聞いたり調べるのは楽しい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	131	24.6
ややそう思う	129	24.2
どちらともいえない	142	26.7
あまりそう思わない	84	15.8
そう思わない	44	8.3
無回答・非該当	2	0.4
合計	532	100.0

Q2d　妊娠・出産経験への賛否・妊娠期間中の生活工夫は楽しい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	149	28.0
ややそう思う	164	30.8
どちらともいえない	128	24.1
あまりそう思わない	66	12.4
そう思わない	23	4.3
無回答・非該当	2	0.4
合計	532	100.0

Q2e　妊娠・出産経験への賛否・子どもの名前を考えるのは楽しい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	385	72.4
ややそう思う	103	19.4
どちらともいえない	28	5.3
あまりそう思わない	11	2.1
そう思わない	3	0.6
無回答・非該当	2	0.4
合計	532	100.0

Q2f　妊娠・出産経験への賛否・妊娠中は制限ばかりでうんざり

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	60	11.3
ややそう思う	129	24.2
どちらともいえない	102	19.2
あまりそう思わない	148	27.8
そう思わない	91	17.1
無回答・非該当	2	0.4
合計	532	100.0

Q2g　妊娠・出産経験への賛否・お腹が大きくなるにつれ、赤ちゃんへの愛情がわく

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	394	74.1
ややそう思う	98	18.4
どちらともいえない	27	5.1
あまりそう思わない	7	1.3
そう思わない	3	0.6
無回答・非該当	3	0.6
合計	532	100.0

Q2h　妊娠・出産経験への賛否・他人からでも話しかけられて嬉しい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	222	41.7
ややそう思う	162	30.5
どちらともいえない	93	17.5
あまりそう思わない	35	6.6
そう思わない	17	3.2
無回答・非該当	3	0.6
合計	532	100.0

Q2i　妊娠・出産経験への賛否・先の予測が付かないところが楽しい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	61	11.5
ややそう思う	107	20.1
どちらともいえない	207	38.9
あまりそう思わない	93	17.5
そう思わない	61	11.5
無回答・非該当	3	0.6
合計	532	100.0

Q2j　妊娠・出産経験への賛否・お腹の中で赤ちゃんが動くと楽しい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	417	78.4
ややそう思う	88	16.5
どちらともいえない	17	3.2
あまりそう思わない	5	0.9
そう思わない	3	0.6
無回答・非該当	2	0.4
合計	532	100.0

Q2k　妊娠・出産経験への賛否・生活は自分の思いどおりにしたい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	144	27.1
ややそう思う	141	26.5
どちらともいえない	150	28.2
あまりそう思わない	67	12.6
そう思わない	28	5.3
無回答・非該当	2	0.4
合計	532	100.0

Q2l　妊娠・出産経験への賛否・ほおずりたくなる

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	426	80.1
ややそう思う	82	15.4
どちらともいえない	12	2.3
あまりそう思わない	10	1.9
無回答・非該当	2	0.4
合計	532	100.0

Q2m　妊娠・出産経験への賛否・知り合いが出来て嬉しい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	376	70.7
ややそう思う	95	17.9
どちらともいえない	43	8.1
あまりそう思わない	12	2.3
そう思わない	4	0.8
無回答・非該当	2	0.4
合計	532	100.0

Q2n　妊娠・出産経験への賛否・出産後の自分はそれまでとは違う

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	234	44.0
ややそう思う	162	30.5
どちらともいえない	85	16.0
あまりそう思わない	35	6.6
そう思わない	14	2.6
無回答・非該当	2	0.4
合計	532	100.0

Q2o　妊娠・出産経験への賛否・出産を乗り越えた自分は誇らしい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	262	49.2
ややそう思う	150	28.2
どちらともいえない	72	13.5
あまりそう思わない	30	5.6
そう思わない	15	2.8
無回答・非該当	3	0.6
合計	532	100.0

Q3a　子育て経験への賛否・思ったとおりにいかず辛い

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	80	15.0
ややそう思う	173	32.5
どちらともいえない	112	21.1
あまりそう思わない	115	21.6
そう思わない	48	9.0
無回答・非該当	4	0.8
合計	532	100.0

Q3b　子育て経験への賛否・子育てする自分をほめたい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	189	35.5
ややそう思う	186	35.0
どちらともいえない	84	15.8
あまりそう思わない	54	10.2
そう思わない	15	2.8
無回答・非該当	4	0.8
合計	532	100.0

Q3c　子育て経験への賛否・思い通りだと、達成感を感じる

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	153	28.8
ややそう思う	155	29.1
どちらともいえない	128	24.1
あまりそう思わない	59	11.1
そう思わない	32	6.0
無回答・非該当	5	0.9
合計	532	100.0

Q3d　子育て経験への賛否・この子さえいなければ、と考える

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	14	2.6
ややそう思う	45	8.5
どちらともいえない	61	11.5
あまりそう思わない	88	16.5
そう思わない	319	60.0
無回答・非該当	5	0.9
合計	532	100.0

Q3e　子育て経験への賛否・他人の乳児を見て子どもがほしくなる

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	195	36.7
ややそう思う	128	24.1
どちらともいえない	84	15.8
あまりそう思わない	59	11.1
そう思わない	62	11.7
無回答・非該当	4	0.8
合計	532	100.0

Q3f　子育て経験への賛否・あやすことは楽しい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	309	58.1
ややそう思う	153	28.8
どちらともいえない	54	10.2
あまりそう思わない	10	1.9
そう思わない	2	0.4
無回答・非該当	4	0.8
合計	532	100.0

Q3g　子育て経験への賛否・見ていて飽きない

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	322	60.5
ややそう思う	121	22.7
どちらともいえない	58	10.9
あまりそう思わない	20	3.8
そう思わない	6	1.1
無回答・非該当	5	0.9
合計	532	100.0

Q3h　子育て経験への賛否・そばにいないと正直ほっとする

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	34	6.4
ややそう思う	79	14.8
どちらともいえない	140	26.3
あまりそう思わない	121	22.7
そう思わない	153	28.8
無回答・非該当	5	0.9
合計	532	100.0

Q3i　子育て経験への賛否・検診等には友人知人を作る楽しみがある

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	47	8.8
ややそう思う	72	13.5
どちらともいえない	142	26.7
あまりそう思わない	161	30.3
そう思わない	106	19.9
無回答・非該当	4	0.8
合計	532	100.0

Q3j　子育て経験への賛否・母親の自分はそれまでとはまるで違う

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	184	34.6
ややそう思う	152	28.6
どちらともいえない	91	17.1
あまりそう思わない	74	13.9
そう思わない	26	4.9
無回答・非該当	5	0.9
合計	532	100.0

Q3k　子育て経験への賛否・知らないことが多くてもなんとかなる

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	234	44.0
ややそう思う	196	36.8
どちらともいえない	75	14.1
あまりそう思わない	19	3.6
そう思わない	4	0.8
無回答・非該当	4	0.8
合計	532	100.0

Q3l　子育て経験への賛否・新しい自分自身を発見できた

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	215	40.4
ややそう思う	177	33.3
どちらともいえない	88	16.5
あまりそう思わない	32	6.0
そう思わない	15	2.8
無回答・非該当	5	0.9
合計	532	100.0

Q3m　子育て経験への賛否・自分の世界は狭くなった

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	33	6.2
ややそう思う	89	16.7
どちらともいえない	115	21.6
あまりそう思わない	127	23.9
そう思わない	164	30.8
無回答・非該当	4	0.8
合計	532	100.0

Q3n　子育て経験への賛否・日々新たな発見がある

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	310	58.3
ややそう思う	168	31.6
どちらともいえない	41	7.7
あまりそう思わない	6	1.1
そう思わない	1	0.2
無回答・非該当	6	1.1
合計	532	100.0

Q3o　子育て経験への賛否・子どもは仲間同士の遊びを通じて成長する

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	375	70.5
ややそう思う	131	24.6
どちらともいえない	19	3.6
あまりそう思わない	3	0.6
無回答・非該当	4	0.8
合計	532	100.0

Q3p　子育て経験への賛否・友人が増える楽しみがある

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	162	30.5
ややそう思う	187	35.2
どちらともいえない	101	19.0
あまりそう思わない	49	9.2
そう思わない	28	5.3
無回答・非該当	5	0.9
合計	532	100.0

Q3q　子育て経験への賛否・知らない人から話しかけられて楽しい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	215	40.4
ややそう思う	183	34.4
どちらともいえない	98	18.4
あまりそう思わない	22	4.1
そう思わない	9	1.7
無回答・非該当	5	0.9
合計	532	100.0

Q3r　子育て経験への賛否・成長した子どもを想像すると楽しい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	329	61.8
ややそう思う	142	26.7
どちらともいえない	39	7.3
あまりそう思わない	10	1.9
そう思わない	8	1.5
無回答・非該当	4	0.8
合計	532	100.0

Q3s　子育て経験への賛否・身近に子だくさんの人がいると、もう一人育てたくなる

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
そう思う	200	37.6
ややそう思う	115	21.6
どちらともいえない	93	17.5
あまりそう思わない	51	9.6
そう思わない	67	12.6
無回答・非該当	6	1.1
合計	532	100.0

Q4　「不妊専門総合相談」の認知

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
利用したことがないが知っている	44	8.3
知らない	480	90.2
無回答・非該当	8	1.5
合計	532	100.0

Q5　「ファミリーサポートセンター」の認知

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
利用したことがある	12	2.3
利用したことがないが知っている	228	42.9
知らない	288	54.1
無回答・非該当	4	0.8
合計	532	100.0

Q5-1　同センターの利用希望

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
利用したい	46	8.6
どちらかといえば利用したい	151	28.4
どちらかといえば利用したくない	90	16.9
利用したくない	38	7.1
無回答・非該当	207	38.9
合計	532	100.0

Q6　子育てサークル等の参加の有無

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
参加していて、役割を引き受けている	25	4.7
参加しているが、役割は持っていない	126	23.7
参加していない	301	56.6
以前は参加していたが、いまは参加していない	70	13.2
無回答・非該当	10	1.9
合計	532	100.0

Q6　問6の回答1，2の頻度

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
2回未満	48	9.0
2回以上4回未満	50	9.4
4回以上6回未満	40	7.5
6回以上	8	1.5
無回答・非該当	386	72.6
合計	532	100.0

Q7-1　子育て情報の情報源・子育て支援(学習)センター

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	456	85.7
反応有り	75	14.1
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q7-2　子育て情報の情報源・保健所

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	475	89.3
反応有り	56	10.5
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q7-3　子育て情報の情報源・インターネット

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	304	57.1
反応有り	227	42.7
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q7-4　子育て情報の情報源・育児雑誌や育児書

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	239	44.9
反応有り	292	54.9
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q7-5 子育て情報の情報源・配偶者(夫)

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	407	76.5
反応有り	124	23.3
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q7-6　子育て情報の情報源・友人

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	68	12.8
反応有り	463	87.0
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q7-7 子育て情報の情報源・保育士や助産師

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	450	84.6
反応有り	81	15.2
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q7-8　子育て情報の情報源・医師

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	430	80.8
反応有り	101	19.0
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q7-9　子育て情報の情報源・テレビやラジオ

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	341	64.1
反応有り	190	35.7
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q7-10　子育て情報の情報源・自分の両親

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	212	39.8
反応有り	319	60.0
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q7-11　子育て情報の情報源・配偶者の両親

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	365	68.6
反応有り	166	31.2
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q7-12　子育て情報の情報源・自分のきょうだい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	370	69.5
反応有り	161	30.3
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q7-13　子育て情報の情報源・配偶者のきょうだい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	457	85.9
反応有り	74	13.9
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q7-14　子育て情報の情報源・保育所

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	429	80.6
反応有り	102	19.2
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q7-15　子育て情報の情報源・子育てサークル等

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	416	78.2
反応有り	115	21.6
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q7-16　子育て情報の情報源・その他

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	504	94.7
反応有り	27	5.1
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q8　子どもの発達への不安の有無

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
まったく不安ではない	155	29.1
どちらかといえば不安ではない	264	49.6
どちらかといえば不安である	95	17.9
かなり不安である	13	2.4
無回答・非該当	5	0.9
合計	532	100.0

Q9a　相談相手への相談頻度・配偶者

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
相談する	375	70.5
わりと相談する	108	20.3
あまり相談しない	36	6.8
相談しない	4	0.8
該当者はいない	5	0.9
無回答	4	0.8
合計	532	100.0

Q9b　相談相手への相談頻度・自分の父親

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
相談する	35	6.6
わりと相談する	85	16.0
あまり相談しない	203	38.2
相談しない	132	24.8
該当者はいない	69	13.0
無回答	8	1.5
合計	532	100.0

Q9c　相談相手への相談頻度・自分の母親

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
相談する	313	58.8
わりと相談する	124	23.3
あまり相談しない	50	9.4
相談しない	17	3.2
該当者はいない	24	4.5
無回答	4	0.8
合計	532	100.0

Q9d　相談相手への相談頻度・自分のきょうだい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
相談する	99	18.6
わりと相談する	109	20.5
あまり相談しない	126	23.7
相談しない	165	31.0
該当者はいない	26	4.9
無回答	7	1.3
合計	532	100.0

Q9e　相談相手への相談頻度・配偶者の父親

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
相談する	11	2.1
わりと相談する	32	6.0
あまり相談しない	126	23.7
相談しない	247	46.4
該当者はいない	106	19.9
無回答	10	1.9
合計	532	100.0

Q9f　相談相手への相談頻度・配偶者の母親

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
相談する	84	15.8
わりと相談する	126	23.7
あまり相談しない	143	26.9
相談しない	124	23.3
該当者はいない	49	9.2
無回答	6	1.1
合計	532	100.0

Q9g　相談相手への相談頻度・配偶者のきょうだい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
相談する	25	4.7
わりと相談する	52	9.8
あまり相談しない	115	21.6
相談しない	284	53.4
該当者はいない	48	9.0
無回答	8	1.5
合計	532	100.0

Q9h　相談相手への相談頻度・友人

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
相談する	259	48.7
わりと相談する	207	38.9
あまり相談しない	47	8.8
相談しない	14	2.6
該当者はいない	2	0.4
無回答	3	0.6
合計	532	100.0

Q9i　相談相手への相談頻度・保育士

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
相談する	55	10.3
わりと相談する	96	18.0
あまり相談しない	95	17.9
相談しない	145	27.3
該当者はいない	128	24.1
無回答	13	2.4
合計	532	100.0

Q9j　相談相手への相談頻度・保健師、助産師などの専門家

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
相談する	38	7.1
わりと相談する	72	13.5
あまり相談しない	158	29.7
相談しない	177	33.3
該当者はいない	74	13.9
無回答	13	2.4
合計	532	100.0

Q9k　相談相手への相談頻度・医師

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
相談する	58	10.9
わりと相談する	138	25.9
あまり相談しない	175	32.9
相談しない	113	21.2
該当者はいない	31	5.8
無回答	17	3.2
合計	532	100.0

Q9l　相談相手への相談頻度・その他

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	511	96.1
反応有り	21	3.9
合計	532	100.0

Q9m　相談相手への相談頻度・相談相手はいない

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	529	99.4
反応有り	3	0.6
合計	532	100.0

Q9-1a　子どもを預かってもらえるか・配偶者

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	154	28.9
反応有り	378	71.1
合計	532	100.0

Q9-1b　子どもを預かってもらえるか・自分の父親

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	328	61.7
反応有り	204	38.3
合計	532	100.0

Q9-1c　子どもを預かってもらえるか・自分の母親

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	139	26.1
反応有り	393	73.9
合計	532	100.0

Q9-1d　子どもを預かってもらえるか・自分のきょうだい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	365	68.6
反応有り	167	31.4
合計	532	100.0

Q9-1e　子どもを預かってもらえるか・配偶者の父親

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	404	75.9
反応有り	128	24.1
合計	532	100.0

Q9-1f　子どもを預かってもらえるか・配偶者の母親

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	261	49.1
反応有り	271	50.9
合計	532	100.0

Q9-1g　子どもを預かってもらえるか・配偶者のきょうだい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	459	86.3
反応有り	73	13.7
合計	532	100.0

Q9-1h　子どもを預かってもらえるか・友人

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	407	76.5
反応有り	125	23.5
合計	532	100.0

Q9-1i　子どもを預かってもらえるか・保育士

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	488	91.7
反応有り	44	8.3
合計	532	100.0

Q9-1j　子どもを預かってもらえるか・保健師、助産師などの専門家

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	530	99.6
反応有り	2	0.4
合計	532	100.0

Q9-1k　子どもを預かってもらえるか・医師

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	532	100.0
合計	532	100.0

Q9-1l　子どもを預かってもらえるか・その他

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	521	97.9
反応有り	11	2.1
合計	532	100.0

Q10 子どもを3人以上育てた経験者の有無

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
いる	360	67.7
いない	146	27.4
わからない・知らない	25	4.7
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q11 幸福度

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
幸せ	345	64.8
どちらかといえば幸せ	170	32.0
どちらかといえば幸せではない	14	2.6
幸せではない	2	0.4
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q12 生活満足度

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
満足	165	31.0
どちらかといえば満足	289	54.3
どちらかといえば不満	62	11.7
不満	16	3.0
合計	532	100.0

Q13 傘を持つ降水確率

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
25%未満	11	2.1
25%以上50%未満	141	26.5
50%以上75%未満	312	58.6
75%以上	48	9.0
無回答・非該当	20	3.8
合計	532	100.0

Q14 年齢

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
25歳未満	18	3.4
25歳以上30歳未満	113	21.2
30歳以上35歳未満	259	48.7
35歳以上40歳未満	116	21.8
40歳以上	25	4.7
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q15 健康状態

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
よい	266	50.0
どちらかと言えばよい	130	24.4
ふつう	103	19.4
どちらかと言えば悪い	28	5.3
悪い	4	0.8
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q16a 兄弟姉妹数

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
1.00	22	4.1
2.00	283	53.2
3.00	183	34.4
4.00	27	5.1
5.00	10	1.9
7.00	1	0.2
8.00	1	0.2
無回答・非該当	5	0.9
合計	532	100.0

Q16b 兄弟姉妹数・兄弟姉妹の中での位置(全体)

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
1.00	236	44.4
2.00	211	39.7
3.00	69	13.0
4.00	6	1.1
5.00	2	0.4
6.00	1	0.2
7.00	1	0.2
無回答・非該当	6	1.1
合計	532	100.0

Q16c 兄弟姉妹数・兄弟姉妹の中での位置(同性間)

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
1.00	359	67.5
2.00	120	22.6
3.00	26	4.9
4.00	3	0.6
5.00	1	0.2
無回答・非該当	23	4.3
合計	532	100.0

Q17 最終学歴

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
中学校	6	1.1
高校	132	24.8
短大、もしくは専門学校	245	46.1
大学	136	25.6
大学院	12	2.3
その他	1	0.2
合計	532	100.0

Q18 配偶者の有無

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
いる	527	99.1
現在はいない(離別)	3	0.6
結婚したことがない(未婚)	2	0.4
合計	532	100.0

Q19 育児休業制度利用の有無

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
はい	26	4.9
いいえ	506	95.1
合計	532	100.0

Q20 現職

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
経営者、役員	6	1.1
常時雇用されている一般従業者	72	13.5
臨時雇用・パート・アルバイト	50	9.4
自営業主、自由業者	15	2.8
家族従業者	12	2.3
内職	3	0.6
専業主婦	361	67.9
その他	13	2.4
合計	532	100.0

Q21 妊娠後の退職の経験の有無

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
はい	293	55.1
いいえ	239	44.9
合計	532	100.0

Q22 退職前の職業

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
経営者、役員	2	0.4
常時雇用されている一般従業者	135	25.4
臨時雇用・パート・アルバイト	113	21.2
派遣社員	34	6.4
自営業主、自由業者	5	0.9
家族従業者	4	0.8
無回答・非該当	239	44.9
合計	532	100.0

Q23 同居人数

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
1.00	1	0.2
2.00	8	1.5
3.00	247	46.4
4.00	169	31.8
5.00	68	12.8
6.00	18	3.4
7.00	10	1.9
8.00	6	1.1
無回答・非該当	5	0.9
合計	532	100.0

Q24-1 同居者との関係・配偶者(夫)

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	12	2.3
反応有り	519	97.6
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q24-2 同居者との関係・子

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	7	1.3
反応有り	524	98.5
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q24-3 同居者との関係・自分の父

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	517	97.2
反応有り	14	2.6
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q24-4 同居者との関係・自分の母

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	515	96.8
反応有り	16	3.0
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q24-5 同居者との関係・配偶者の父

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	508	95.5
反応有り	23	4.3
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q24-6 同居者との関係・配偶者の母

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	500	94.0
反応有り	31	5.8
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q24-7 同居者との関係・自分の祖父

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	530	99.6
反応有り	1	0.2
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q24-8 同居者との関係・自分の祖母

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	530	99.6
反応有り	1	0.2
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q24-9 同居者との関係・配偶者の祖父

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	527	99.1
反応有り	4	0.8
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q24-10 同居者との関係・配偶者の祖母

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	525	98.7
反応有り	6	1.1
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q24-11 同居者との関係・自分のきょうだい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	527	99.1
反応有り	4	0.8
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q24-12 同居者との関係・自分のきょうだいの配偶者

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	531	99.8
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q24-13 同居者との関係・配偶者のきょうだい

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	523	98.3
反応有り	8	1.5
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q24-14 同居者との関係・配偶者のきょうだいの配偶者

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	531	99.8
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q24-15 同居者との関係・友人、知人

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	531	99.8
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q24-16 同居者との関係・その他

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
反応無し	530	99.6
反応有り	1	0.2
無回答・非該当	1	0.2
合計	532	100.0

Q25 子ども(第一子)について・年齢

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
1.00	280	52.6
2.00	8	1.5
3.00	57	10.7
4.00	48	9.0
5.00	42	7.9
6.00	30	5.6
7.00	18	3.4
8.00	14	2.6
9.00	7	1.3
10.00	4	0.8
11.00	5	0.9
12.00	5	0.9
13.00	3	0.6
14.00	1	0.2
15.00	2	0.4
17.00	2	0.4
無回答・非該当	6	1.1
合計	532	100.0

Q25 子ども(第一子)について・性別

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
男	280	52.6
女	246	46.2
無回答・非該当	6	1.1
合計	532	100.0

Q25 子ども(第一子)について・計画や予定の有無

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
なかった	196	36.8
あった	327	61.5
無回答・非該当	9	1.7
合計	532	100.0

Q25 子ども(第一子)について・計画との比較

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
早かった	86	16.2
希望どおり	203	38.2
遅かった	90	16.9
無回答・非該当	153	28.8
合計	532	100.0

Q25 子ども(第二子)について・年齢

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
0.00	14	2.6
1.00	178	33.5
2.00	6	1.1
3.00	19	3.6
4.00	12	2.3
5.00	13	2.4
6.00	6	1.1
7.00	5	0.9
8.00	3	0.6
10.00	1	0.2
11.00	1	0.2
13.00	1	0.2
14.00	1	0.2
無回答・非該当	272	51.1
合計	532	100.0

Q25 子ども(第二子)について・性別

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
男	131	24.6
女	126	23.7
無回答・非該当	275	51.7
合計	532	100.0

Q25 子ども(第二子)について・計画や予定の有無

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
なかった	62	11.7
あった	198	37.2
無回答・非該当	272	51.1
合計	532	100.0

Q25 子ども(第二子)について・計画との比較

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
早かった	46	8.6
希望どおり	118	22.2
遅かった	55	10.3
無回答・非該当	313	58.8
合計	532	100.0

Q25 子ども(第三子)について・年齢

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
0.00	1	0.2
1.00	63	11.8
2.00	1	0.2
3.00	2	0.4
5.00	1	0.2
8.00	1	0.2
無回答・非該当	463	87.0
合計	532	100.0

Q25 子ども(第三子)について・性別

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
男	33	6.2
女	36	6.8
無回答・非該当	463	87.0
合計	532	100.0

Q25 子ども(第三子)について・計画や予定の有無

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
なかった	31	5.8
あった	40	7.5
無回答・非該当	461	86.7
合計	532	100.0

Q25 子ども(第三子)について・計画との比較

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
早かった	15	2.8
希望どおり	19	3.6
遅かった	14	2.6
無回答・非該当	484	91.0
合計	532	100.0

Q25 子ども(第四子)について・年齢

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
0.00	2	0.4
1.00	4	0.8
無回答・非該当	526	98.9
合計	532	100.0

Q25 子ども(第四子)について・性別

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
男	3	0.6
女	3	0.6
無回答・非該当	526	98.9
合計	532	100.0

Q25 子ども(第四子)について・計画や予定の有無

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
なかった	5	0.9
あった	1	0.2
無回答・非該当	526	98.9
合計	532	100.0

Q25 子ども(第四子)について・計画との比較

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
早かった	2	0.4
希望どおり	1	0.2
無回答・非該当	529	99.4
合計	532	100.0

Q25 子ども(第五子)について・年齢

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
1.00	1	0.2
無回答・非該当	531	99.8
合計	532	100.0

Q25 子ども(第五子)について・性別

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
男	1	0.2
無回答・非該当	531	99.8
合計	532	100.0

Q25 子ども(第五子)について・計画や予定の有無

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
なかった	1	0.2
無回答・非該当	531	99.8
合計	532	100.0

Q25 子ども(第五子)について・計画との比較

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
無回答・非該当	532	100.0
合計	532	100.0

Q26a 現在の家庭関係・問題は全員で話し合い、決定は成員の同意の上

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
はい	414	77.8
いいえ	107	20.1
無回答・非該当	11	2.1
合計	532	100.0

Q26b 現在の家庭関係・役割は明確に区分されているが、時に皆で補うこともある

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
はい	462	86.8
いいえ	63	11.8
無回答・非該当	7	1.3
合計	532	100.0

Q26c 現在の家庭関係・問題に対しいつも勝手に決断を下す人がいる

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
はい	68	12.8
いいえ	457	85.9
無回答・非該当	7	1.3
合計	532	100.0

Q26d 現在の家庭関係・家での役割を気軽に交代することが出来る

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
はい	362	68.0
いいえ	162	30.5
無回答・非該当	8	1.5
合計	532	100.0

Q26e 現在の家庭関係・家の決まりは皆で守る

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
はい	429	80.6
いいえ	94	17.7
無回答・非該当	9	1.7
合計	532	100.0

Q26f 現在の家庭関係・約束を実行することはほとんどない

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
はい	43	8.1
いいえ	478	89.8
無回答・非該当	11	2.1
合計	532	100.0

Q26g 現在の家庭関係・問題は全員で話しうが、最終決定はいつも同じ人である

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
はい	146	27.4
いいえ	378	71.1
無回答・非該当	8	1.5
合計	532	100.0

Q26h 現在の家庭関係・家族で決めたことは守られたためしがない

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
はい	38	7.1
いいえ	481	90.4
無回答・非該当	13	2.4
合計	532	100.0

Q26i 現在の家庭関係・各自が自由に過ごしつつも、たまには一緒に過ごす

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
はい	235	44.2
いいえ	288	54.1
無回答・非該当	9	1.7
合計	532	100.0

Q26j 現在の家庭関係・子供が落ち込んでいる時、心配はするがあまり聞かない

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
はい	35	6.6
いいえ	458	86.1
無回答・非該当	39	7.3
合計	532	100.0

Q26k 現在の家庭関係・悩みを家族間で相談する

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
はい	473	88.9
いいえ	51	9.6
無回答・非該当	8	1.5
合計	532	100.0

Q26l 現在の家庭関係・家族はお互いの体によくふれあう

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
はい	455	85.5
いいえ	67	12.6
無回答・非該当	10	1.9
合計	532	100.0

Q26m 現在の家庭関係・用事以外の関係は全くない

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
はい	14	2.6
いいえ	506	95.1
無回答・非該当	12	2.3
合計	532	100.0

Q26n 現在の家庭関係・必要最低限以上の会話はあまりない

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
はい	39	7.3
いいえ	485	91.2
無回答・非該当	8	1.5
合計	532	100.0

Q26o 現在の家庭関係・休日は家族で過ごすことも、友人と遊ぶこともある

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
はい	333	62.6
いいえ	190	35.7
無回答・非該当	9	1.7
合計	532	100.0

Q26p 現在の家庭関係・誰かの帰りが遅い場合、その人が帰るまで待っている

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
はい	60	11.3
いいえ	462	86.8
無回答・非該当	10	1.9
合計	532	100.0

Q27 現住所在住年数

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
3年未満	235	44.2
3年以上6年未満	180	33.8
6年以上9年未満	80	15.0
9年以上	28	5.3
無回答・非該当	9	1.7
合計	532	100.0

Q28 自身の親の住まいとの地理的関係

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
同居	17	3.2
徒歩10分以内	50	9.4
同じ市(町)内	138	25.9
兵庫県内	165	31.0
兵庫県外	148	27.8
親はいない	8	1.5
無回答・非該当	6	1.1
合計	532	100.0

Q28 自身の親の住まいとの所要時間

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
2時間未満	394	74.1
2時間以上9時間未満	107	20.1
9時間以上	4	0.8
無回答・非該当	27	5.1
合計	532	100.0

Q28 配偶者の親の住まいとの地理的関係

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
同居	35	6.6
徒歩10分以内	48	9.0
同じ市(町)内	124	23.3
兵庫県内	153	28.8
兵庫県外	144	27.1
親はいない	21	3.9
無回答・非該当	7	1.3
合計	532	100.0

Q28 配偶者の親の住まいとの所要時間

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
2時間未満	385	72.4
2時間以上9時間未満	89	16.7
9時間以上	11	2.1
無回答・非該当	47	8.8
合計	532	100.0

Q29 自身が主収入かどうか

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
はい	17	3.2
いいえ	508	95.5
無回答・非該当	7	1.3
合計	532	100.0

Q30 主収入の方の職業

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
経営者、役員	29	5.5
常時雇用されている一般従業者	429	80.6
臨時雇用・パート・アルバイト	12	2.3
派遣社員	3	0.6
自営業主、自由業者	38	7.1
家族従業者	9	1.7
無職	1	0.2
無回答・非該当	11	2.1
合計	532	100.0

Q31a 自身の年収

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
300万円未満	295	55.5
300万円以上－400万円未満	20	3.8
400万円以上－500万円未満	21	3.9
500万円以上－600万円未満	9	1.7
600万円以上－700万円未満	2	0.4
700万円以上－800万円未満	4	0.8
800万円以上－900万円未満	1	0.2
わからない・答えたくない	28	5.3
無回答・非該当	152	28.6
合計	532	100.0

Q31b 配偶者の年収

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
300万円未満	66	12.4
300万円以上－400万円未満	107	20.1
400万円以上－500万円未満	96	18.0
500万円以上－600万円未満	85	16.0
600万円以上－700万円未満	40	7.5
700万円以上－800万円未満	28	5.3
800万円以上－900万円未満	10	1.9
900万円以上－1000万円未満	13	2.4
1000万円以上－1500万円未満	10	1.9
1500万円以上	5	0.9
わからない・答えたくない	50	9.4
無回答・非該当	22	4.1
合計	532	100.0

(財)ひょうご震災記念 21 世紀研究機構
少子・家庭政策研究所

妊娠・出産・子育てに関する
子育て中の女性の意識についてのアンケート

【ご協力のお願い】

～子育て中のお母さまがたへ～

このアンケートでは、子育て中のお母さんがたの、妊娠や出産、子育てについての意識についておうかがいします。その目的は、どのようにすれば楽しく子育てができるのか、また、不安や負担が少ない子育てを社会全体で支援するために、大切なことはなにかを明らかにすることです。

アンケートにお名前を書いていただく必要はありません。回答は統計的に処理され、個人が特定されることは一切ありませんので、どうぞありのままをお答えください。また、このアンケートへの回答内容による、あるいはアンケートに回答しないことによる不利益は一切発生いたしません。アンケートの趣旨をご理解いただき、どうか最後までアンケートにご協力いただきますようお願い申し上げます。

少子・家庭政策研究所 所長 野々山久也

ご記入にあたってのお願い

・ご記入は、黒または、青のボールペンでお願いいたします。
・回答は、あてはまる番号にはっきりと○をつけてください。
・文字や数字を記入していただく場合は、空欄に具体的にお書きください。

このアンケートのお問い合わせ先
(財)ひょうご震災記念 21 世紀研究機構
少子・家庭政策研究所（担当：越智）
〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2　ひと未来館 6 階
TEL：078-262-5579（直通）
FAX：078-262-5593

★ご記入が終わりましたアンケートは、お配りした返信用封筒に入れ

平成 19 年 12 月 28 日（金）までにポストにご投函願います。

現在子育て中の母親の方にご回答をお願いいたします。
2 人以上お子さんがいらっしゃる場合は、質問のなかで特にことわりのない限り、**一番年少の**お子さんについて、質問にお答えください。

○妊娠・出産・子育ての経験について、あなたのお気持ちをお尋ねします。

問 1 あなたが経験された、妊娠や出産、子育てはひとことでいって、どのような体験ですか。あなたのお気持ちに最も近い番号を 1 つ選んで○をつけてください。

		満足	満足いえば満足	どちらかといえば不満	不満
a	妊娠	1	2	3	4
b	出産	1	2	3	4
c	子育て	1	2	3	4

問 2 妊娠・出産の経験に関する下記のことがらについて、あなたのお気持ちはどれに近いでしょうか。あてはまる番号を、**それぞれ 1 つずつ**選んで○をつけてください。

		そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
a	いつ子どもをつくろうか、計画を立てるのは楽しい	1	2	3	4	5
b	どこで出産しようか、人に聞いたり調べたりするのは楽しい	1	2	3	4	5
c	どの出産方法を選ぼうか、人に聞いたり調べたりするのは楽しい	1	2	3	4	5
d	妊娠期間中、自分なりに生活を工夫するのは楽しい	1	2	3	4	5
e	子どもの名前をあれこれ考えるのは楽しい	1	2	3	4	5
f	妊娠中は、制限ばかりでうんざりする	1	2	3	4	5
g	お腹が大きくなるにつれ、赤ちゃんへの愛情がわく	1	2	3	4	5
h	妊娠中は、知らない人からでも話しかけられてうれしい	1	2	3	4	5
i	妊娠中の生活は、先の予測のつかないところが楽しい	1	2	3	4	5
j	お腹の中で赤ちゃんが動くと、いとおしい	1	2	3	4	5
k	妊娠中の生活は、自分の思いどおりにしたい	1	2	3	4	5
l	赤ちゃんをみていると、ついほおずりをしたくなる	1	2	3	4	5
m	赤ちゃんをきっかけにして、知り合いができてうれしい	1	2	3	4	5
n	出産を経験した自分は、それまでの自分とはまるで違う	1	2	3	4	5
o	出産を乗り越えた自分を、誇らしく思う	1	2	3	4	5

問 3 子育て経験に関する下記のことがらについて、あなたのお気持ちはどれに近いでしょうか。あてはまる番号を、**それぞれ 1 つずつ**選んで○をつけてください。

		そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
a	子育ては、思ったとおりにはいかず、つらい	1	2	3	4	5
b	子育てをがんばっている自分を、ほめてあげたい	1	2	3	4	5
c	子育ての目標（おむつはずしの時期など）が思いどおりだと、達成感を感じる	1	2	3	4	5
d	この子さえいなければと考えることがある	1	2	3	4	5
e	よその赤ちゃんをみると、自分ももうひとりほしくなる	1	2	3	4	5
f	子どもをあやすことは楽しい	1	2	3	4	5
g	子どもをみていると飽きない	1	2	3	4	5
h	子どもがそばにいないと正直ほっとする	1	2	3	4	5
i	健診等には、友人知人をつくる楽しみがある	1	2	3	4	5
j	母親になった自分は、それまでの自分とはまるで違う	1	2	3	4	5
k	子育てについて知らないことが多くても、なんとかなるものだ	1	2	3	4	5
l	子どもを育てることで、新しい自分自身を発見できた	1	2	3	4	5
m	子どもがいることで、自分の世界は狭くなったと感じる	1	2	3	4	5
n	子育てには、日々新たな発見がある	1	2	3	4	5
o	子どもは仲間同士の遊びを通じて成長する	1	2	3	4	5
p	子育てには、自分の友人が増える楽しみがある	1	2	3	4	5
q	子どもを連れていると、知らない人からでも話しかけられてうれしい	1	2	3	4	5
r	成長した子どもを想像すると楽しい	1	2	3	4	5
s	子だくさんの人が身近にいると、自分ももうひとり育ててみようかと思える	1	2	3	4	5

○子育て支援や子育て情報についてお尋ねします。あてはまる番号に○をつけてください。

問 4 あなたは、県立男女共同参画センターで「不妊専門総合相談」を行なっていることを知っていますか。

1. 利用したことがある　2. 利用したことはないが知っている　3. 知らない

問５ あなたは「ファミリーサポートセンター」を知っていますか。

1. 利用したことがある　2. 利用したことはないが知っている　3. 知らない

問 5-1 「知らない」とお答えの方にお聞きします。「ファミリーサポートセンター」とは、「“育児の援助を受けたい人”と“育児の援助を行ないたい人”とがお互いに会員になって、子育て中の人や働く人の家庭を地域で支えるシステム」のことですが、今後あなたは利用したいと思いますか。

1.　利用したい　　2.　どちらかといえば利用したい
3.　どちらかといえば利用したくない　　4.　利用したくない

問 5-2「3. どちらかといえば利用したくない」または「4. 利用したくない」とお答えの方は、その理由をお書きください。

（　　）

○子育てサークル等についてお尋ねします。ここで、「子育てサークル等」とは、子育て中の保護者たちで、ある程度固定したメンバーが定期的に集まって、親子で自由に遊んだり、情報交換をしたり、子育てについての悩みなどを相談しあう活動をしているグループを言います。グループは、行政主体のものも自主グループも含みます。

問６ あなたは子育てサークル等に参加されていますか。参加されている場合、役員や会計係など、なにか役割を引き受けていますか。また、参加回数は１ヶ月あたりになおすと、何回くらいでしょうか。

1. 参加していて、役割を引き受けている→　１ヶ月に（　　）回くらい
2. 参加しているが、役割は持っていない→　１ヶ月に（　　）回くらい
3. 参加していない
4. 以前参加していたが、いまは参加していない

問 6-1 あなたが子育てサークル等に参加している（あるいは、参加していない）理由をお書きください。

（　　）

問７ あなたは、子育てに関する情報をどこから手に入れますか。**あてはまる番号すべてに**○をつけてください。

1.　子育て支援（学習）センター	**2.　保健所**	**3.　インターネット**
4.　育児雑誌や育児書	**5.　配偶者（夫）**	**6.　ともだち**
7.　保健師や助産師	**8.　医師**	**9.　テレビやラジオ**
10.　自分の両親	**11.　配偶者の両親**	**12.　自分のきょうだい**
13.　配偶者のきょうだい	**14.　保育所**	**15.　子育てサークル等**
16.　その他（具体的に　　）		

問８ お子さんの心身の発達に関して、あなたは不安を感じることがありますか。あてはまる番号に○をつけてください（**○はひとつだけ**）。

1.　まったく不安ではない　　2.　どちらかといえば不安ではない
3.　どちらかといえば不安である　　4.　かなり不安である

○子育てに関する相談相手についてお尋ねします。

問９ 子育てに不安や心配ごとなどがあるとき、あなたは下の表に挙げる相手に対して、どの程度相談をしますか。あてはまる番号を、**それぞれ１つずつ**選んで○をつけてください（死亡等で該当する人がいない場合は「いない（5）」に○をつけてください）。

問 9-1 あなたが困ったときに、子どもを預かってもらえそうな人はどなたですか。下の表のあてはまる空欄に○をつけてください（**○はいくつでも**）。

	相談する	わりと相談する	あまり相談しない	相談しない	該当者はいない	問 9-1 預かってもらえそうな人
a　配偶者	1	2	3	4	5	
b　自分の父親	1	2	3	4	5	
c　自分の母親	1	2	3	4	5	
d　自分のきょうだい	1	2	3	4	5	
e　配偶者の父親	1	2	3	4	5	
f　配偶者の母親	1	2	3	4	5	
g　配偶者のきょうだい	1	2	3	4	5	
h　ともだち	1	2	3	4	5	
i　保育士	1	2	3	4	5	
j　保健師・助産師などの専門家	1	2	3	4	5	
k　医師	1	2	3	4	5	
l　上記以外の相手に相談する（具体的に　　）						
相談相手は誰もいない場合、かっこ内に○　→（　　）						

問 10 友人や近所の人などあなたの身近に、子どもを 3 人以上育てている人はいますか。

1. いる　2. いない　3. わからない・知らない

○ご自分に対する、あなた自身のお考えについてお尋ねします。

問 11 あなたは現在、幸せですか、それとも幸せではありませんか。あなたのお考えに最も近い番号に**ひとつだけ**○をつけてください。

1. 幸せ　　2. どちらかと言えば幸せ
3. どちらかと言えば幸せではない　　4. 幸せではない

問 12 あなたは現在、生活全般に満足していますか、それとも不満ですか。あなたのお考えに最も近い番号に**ひとつだけ**○をつけてください。

1. 満足　2. どちらかと言えば満足　3. どちらかと言えば不満　4. 不満

問 13 あなたはふだん電車等公共交通機関でお出かけになるときに、天気予報の降水確率が何%以上のときに傘をもって出かけますか。

（　　）パーセント以上

○あなたご自身についてお尋ねします。

問 14 あなたの年齢をお答えください。　　（　　）歳

問 15 あなたの健康状態について、最も近い番号に**ひとつだけ**○をつけてください。

1. よい　2. どちらかと言えばよい　3. ふつう　4. どちらかと言えば悪い　5. 悪い

問 16 あなたの兄弟姉妹は**あなたを含めて**何人ですか。義理のごきょうだいは除いてください。あなたはその中の上から何番目ですか。また、同性のごきょうだいの中では何番目ですか。

あなたを含む兄弟姉妹数	人	全体の中で	番目	同性の中で	番目

問 17 あなたが最後に出た学校（中退を含む）はどれですか。あてはまる番号**ひとつに○**をつけてください。

1. 中学校　2. 高校　3. 短大もしくは専門学校
4. 大学　5. 大学院
6. その他（　　）

問 18 あなたには、現在、配偶者（夫）がいますか（結婚届を出していない事実婚も結婚と考えます）。

1. いる
2. 現在はいない（離別）
3. 現在はいない（死別）
4. 結婚したことがない（未婚）

問 19 あなたは現在、育児休業制度を利用していますか。

1. はい　2. いいえ

問 20 あなたの現在の職業をお答えください。

1. 経営者、役員
2. 常時雇用されている一般従業者
3. 臨時雇用・パート・アルバイト
4. 派遣社員
5. 自営業主、自由業者
6. 家族従業者（農家や個人商店などで、家業を手伝っている家族）
7. 内職
8. 専業主婦
9. 無職

問 21 あなたは妊娠を機に、おしごとを辞めた経験がありますか。

1. はい　2. いいえ

問 22 問 21 で、「はい」とお答えの方にお尋ねします。妊娠を機におしごとを辞める前の、あなたの職業を教えてください。

1. 経営者、役員
2. 常時雇用されている一般従業者
3. 臨時雇用・パート・アルバイト
4. 派遣社員
5. 自営業主、自由業者
6. 家族従業者（農家や個人商店などで、家業を手伝っている家族）
7. 内職

問 23 あなたを含めて、同居されている方は何人ですか。

あなたを含めて　（　　）人

問 24 あなたと一緒に住んでいる方たちは、あなたからみてどれにあたりますか。この中から**あてはまる番号すべてに**○をつけて下さい。

1. 配偶者（夫）　2. 子　3. 自分の父
4. 自分の母　5. 配偶者の父　6. 配偶者の母
7. 自分の祖父　8. 自分の祖母　9. 配偶者の祖父
10. 配偶者の祖母　11. 自分のきょうだい　12. 自分のきょうだいの配偶者
13. 配偶者のきょうだい　14. 配偶者のきょうだいの配偶者　15. 友人・知人
16. その他（　　）

問 25 あなたのお子さん**全員について**お尋ねします。あてはまる番号に、**それぞれひとつずつ**○をつけてください。

①それぞれのお子さんの年齢をお答えください　→　下の表に数字をご記入ください。
②それぞれのお子さんの性別をお答えください。
③妊娠したい時期について、計画や希望をもっていましたか。
④実際の妊娠時期は、計画や希望とずれがありましたか。

	①年齢	②性別		③計画や予定は		あった場合	④妊娠時期は、計画と比べて		
		男	女	なかった	あった		早かった	希望どおり	遅かった
第1子	歳	1	2	3	4	→	5	6	7
第2子	歳	1	2	3	4	→	5	6	7
第3子	歳	1	2	3	4	→	5	6	7
第4子	歳	1	2	3	4	→	5	6	7
第5子	歳	1	2	3	4	→	5	6	7

問 26 あなたの、現在の家族関係についてお聞きします。あてはまる番号を、**それぞれ１つずつ**選んで○をつけてください。

		はい	いいえ
a	問題が起こると家族みんなで話し合い、決まったことはみんなの同意を得たことである	1	2
b	家でのそれぞれの役割ははっきりしているが、皆でおぎないあうこともある	1	2
c	困ったことが起こったとき、いつも勝手に決断を下す人がいる	1	2
d	わが家ではそれぞれの家での役割を気軽に交代することができる	1	2
e	家の決まりは皆が守るようにしている	1	2
f	わが家はみんなで約束したことでもそれを実行することはほとんどない	1	2
g	問題が起こると家族で話し合いがあるが、物事の最終決定はいつも決まった人の意見がとおる	1	2
h	わが家では家族で何か決めても、守られたためしがない	1	2
i	たいがい各自好きなように過ごしているが、たまには家族一緒に過ごすこともある	1	2
j	子どもが落ち込んでいる時はこちらも心配になるが、あまり聞いたりしない	1	2
k	悩みを家族に相談することがある	1	2
l	家族はお互いの体によくふれあう	1	2
m	家族の間で、用事以外の関係は全くない	1	2
n	家族のものは必要最低限のことは話すが、それ以上はあまり会話がない	1	2
o	休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある	1	2
p	誰かの帰りが遅い時には、その人が帰るまでみんな起きて待っている	1	2

問 27 あなたは現在のお住まいに何年間住んでいますか。

（　　）年　（　　）ヶ月

問 28 あなたの住まいと、親の住まいとの地理的な関係についてお尋ねします。以下の質問であてはまる番号に○をつけ、空欄にご記入ください。

		同居	徒歩１０分以内	同じ市（町）内	兵庫県内	兵庫県外	親はいない	あなたの住まいからの所要時間は
a	あなたご自身の親の住まいは、あなたと	1	2	3	4	5	6	時間　　分
b	あなたの配偶者の親の住まいは、あなたと	1	2	3	4	5	6	時間　　分

問 29 あなたの世帯で、もっとも大きな収入を得ているのは、あなた自身ですか。

1. はい　　2. いいえ

問 30 あなたの世帯でもっとも大きな収入を得ている方の職業をお教えください（**○は１つ**）。

1. **経営者、役員**
2. **常時雇用されている一般従業者**
3. **臨時雇用・パート・アルバイト**
4. **派遣社員**
5. **自営業主、自由業者**
6. **家族従業者（農家や個人商店などで、家業を手伝っている家族）**
7. **内職**
8. **無職**

問 31 あなたと、あなたの配偶者（夫）の１年間の収入は、それぞれおよそどのくらいですか。あてはまる番号に**それぞれひとつずつ**○をつけてください。

		あなた a.	配偶者 b.
1.	**300 万円未満**	1	1
2.	**300 万円以上－400 万円未満**	2	2
3.	**400 万円以上－500 万円未満**	3	3
4.	**500 万円以上－600 万円未満**	4	4
5.	**600 万円以上－700 万円未満**	5	5
6.	**700 万円以上－800 万円未満**	6	6
7.	**800 万円以上－900 万円未満**	7	7
8.	**900 万円以上－1, 000 万円未満**	8	8
9.	**1, 000 万円以上－1, 500 万円未満**	9	9
10.	**1, 500 万円以上**	10	10
11.	**わからない・答えたくない**	11	11

以上で質問は終わりです。ご記入が終わりましたら、もう一度、記入間違いや記入もれがないかどうかお確かめください。
ご協力いただきありがとうございました。

＜ご参考＞

「(財)ひょうご震災記念２１世紀研究機構」について

私ども(財)ひょうご震災記念２１世紀研究機構は、阪神・淡路大震災の１０年にわたる復興過程の総括検証を通じて、２１世紀文明社会の目標として再認識した「安全・安心なまちづくり」と「共生社会の実現」を着実に推進するため、実践的な政策提言を行なう総合的シンクタンクとして、２００６年４月、設立されました。

弊機構は、４つの研究所および、本部長直轄の特別研究からなる「研究調査本部」、「人と防災未来センター」、「こころのケアセンター」、「学術交流本部」、「事務局」で構成されています。各セクションは、それぞれの機能を発揮しながら、総合的な研究や研修・学習などの事業をすすめています。あわせて、この地域に集積する防災・健康・環境・人道支援などに関する国際的な研究・活動機関とのネットワークを活かした取り組みを展開しています。

私ども少子・家庭政策研究所は「研究調査本部」に属し、「家族のライフスタイルのあり方」を主な研究分野として様々な研究・調査を行ない、政策提言をしてまいりました。少子化の問題が、わが国における最大の社会問題となっている状況に鑑み、2007 年度のテーマのひとつを「ライフスタイルの多様性を支える少子化対策」とし、子育て期の家族の特徴や課題を明らかにし、多様なライフスタイルを生きる、今日の家族を支える社会のあり方を導き出していきたいと考えています。

会長　　野尻　武敏
神戸大学名誉教授/経済学博士
専攻　経済政策論、比較経済体制論

理事長　　貝原　俊民
前兵庫県知事
財団法人兵庫地域政策研究機構理事長

●連絡先　　〒651-0073　神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2　ひと未来館６階
(財)ひょうご震災記念２１世紀研究機構　少子・家庭政策研究所
TEL　078-262-5579　　FAX　078-262-5593
（このアンケートの担当）
越智祐子

ライフスタイルの多様性を支える少子化対策の展開

調査研究報告書

◆発行　　(財)ひょうご震災記念 21 世紀研究機構
少子・家庭政策研究所

〒651-0073　神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2　ひと未来館 6 階
TEL : 078-262-5579　　FAX : 078-262-5593
http://www.hemri21.jp/kenkyusyo/index.html

平成 20 年 3 月

Hem21